

# 果樹園

第143号

蓮田善明とその死 小高根二郎  
生きのこり 田中克己  
日記 蓮田善明

新訳「ルバイヤット」(四) 森 亮  
私の庭 福地邦樹  
英訳「八月の石にすがりて」 伊東静雄  
山莊詩評 宮城賢  
秋の海 吉本青司  
編集後記 美堂正義

## 蓮田善明とその死(四十五)

小高根二郎

一党の精神的な拠り所であった林桜園の肥後国学に於ける統流は、すでに蓮田の説いたところであるが、師・長瀬真幸が宣長の学統を引いてだけあって、どこか宣長に似ている。ただし、彼は儒を憎んでいるのでなく、信奉さえしていると前提する。しかし、道といえは儒のことだとする世潮の一辺倒がいけない。この一辺倒が皇国の道をとんじさせるのだ。唐土で聖王といえは堯舜に限っているが、なるほど書籍が説くように、堯が人を知り、舜が民を安んじたことはなみだいでいでなかったろう。しかし、これは現事であっ

て神事ではない。神事が本で現事が末だ。この区別がつかんようでは神道を語るに足らない。

「見よ、印弟亜にヘイデネンあり、即仏教。ジユデア如徳亜に耶蘇あり。黙徳那に馬哈黙あり、ヘロシヤにソコラテスあるを、就中、ソクラテスは、孔子に後る、こと百年ばかりにして、其法博愛を尚び、上天に根拠し、礼楽法度大に儒に似たり。ア、五大洲は広し。教道何ぞ独り儒教に限るべけんや。」

と、喝破する。

この見識と論法は宣長に似ている。宣長も天竺や於蘭陀、その他異国を引っぱりだして「漢学者の、かの国にのみなづめるくせの、あしきことのしらるゝなり」と、遠交近攻策で儒教をやっつけていた。ただ宣長が「はる

かの西の国々」と歐羅巴を担ぎだしただけなのに、桜園はグローバルに五大洲を引用している。(宣長は五つの洲を亜細亜と解釈した) これは生きた時代の差——桜園は宣長の晩年に生を享け明治三年まで永らえた——によるのである。

ここで注目すべきは、桜園が「神事は本で現事は末」と、神事と現事を明確に区別していることである。これは神事と現事が一如一統であった宣長の思想と違っている。宣長にあっては、祖神たちは現事のままを生きられた。オールマイティーでないあるがままの現事を神事とされたのである。あるがままの現実に生きる道に満足されたのである。つまり祭政一致だった。これが惟神の日本の智であった。

ところが桜園には「昇天秘説」がある。それは身のケガレを祓って、清々の心に復って、よく天の道を得たときは、颯国の死を免れて高天原に永生する……という思想である。死は定理ではないという説である。これに加えて「宇氣比考」がある。ウケヒは最もすぐれた神の道で、この道を得たものは天下の事で出来ないことがないゆえんを説いている。この説は昇天に通じる。高天原に永生する希望につながる。この二説がそのまま神風連の

勇気を形成したわけであった。

しかるに宣長は反対である。「魂気天に上ると云も、漢国の人の、理を考へてかまへたる作事」と喝破している。「おもしろくは聞ゆれども、其は作事なれば、いかやうにもおもしろくはいはるゝなり」である。「人死ぬれば、善人も悪人も黄泉国へゆく外なし」(香問録)であったのである。ここが儒教を信奉した松園と、しからざる宣長の違いである。

又、宣長は神仏混濁の両部神道を否定したが、松園は否定どころか、これを容認していたのである。明治二年の晩年、彼は藩主細川侯に召されて上京したが、たまたま岩倉具視卿に謁したことがあった。そのさい、御から、「先生百歳の後、道を誰に尋ね可きか？」と下問があったが、松園は後日書面をもって井戸勘兵衛と太田黒伴雄兩人を推挙した。前者は兵学と両部神道を伝え、後者に皇学と唯一神道を授けていたからである。つまり、松園は百年後の日本に、両部神道と唯一神道、折衷主義と純粋主義と共々必要だと考えたのである。

この見透しからだろう、松園は弟子の中から特に斎藤三郎を選んで蘭学を学ばせ、西洋の兵学を知ろうとした。「外夷は最も火技に長じ、常に火を用ひて来り攻める。我はよ

ろしく水を用ひて、之にせねばならぬ」という見識を松園は持っていたからである。その斎藤三郎が鎮台の攻撃に当って長槍をこいたのである。火に対抗する水のつもりであったのだろうか？ 旗揚げに際して西洋の鉄砲の起用を主張したのは、この斎藤ではなく、同志中に二番目に高齢だった六十六才の上野堅吾だったから不思議である。この主張は一党の主流だった青壮年の反対でしりぞけられたのだ。彼は太股を射抜かれて民家に後退する際、看護する左右の者に「だから鉄砲を使えと余はいったのだ。聞き入れられなかったでござるだ……」としきりに慨嘆をしたという。この同じ民家に、やがて胸板を射抜かれた盟主太田黒伴雄が担ぎ込まれてくるが、この上野老人の慨嘆に、胸の負傷の痛みはさらに倍加したに相違ない。事実、歩兵營での戦闘が悪あがきとなつてから、砲兵營で分捕った山砲を利用して、俄仕立ての砲撃を試みたが奏効しなかった。又、家の近いものは鉄砲を取り戻つて十数挺で戦列に参加したが衆寡もとより敵しえなかつた。

つまり、一党は松園の持っていた折衷主義の意向は採らず、純粋主義の意向に偏重して自ら招いた結果だった。「宇氣比考」から「昇天秘説」に高揚したがための見事な敗北

## 生きのこり

田中克己

大学の学部を選ぶときになってやけくそで好きな文科を選んだ

(就職率〇・一パーセント)

ドビュッシーを研究した松浦悦郎は肺病で死にそのあとを松下武雄とドイツ語のできた薄井敏夫が追った戦死かでないとなつたのが宗教学のFで

フィリップピンで戦死したのは中島栄次郎だ

戦後は肥下恒夫が自殺をしその葬式に悲しげに出た服部正己は敗血症といふ不治の病気で死んだ

「保田と松田明とおれたちだけだぞ」

けふ二十五年めに会ったペンネームは「高山茂」といふのにわたしは確認させた

昭和三年に入學した文乙クラスのああいさうなロマンチックな奴らだった

橋川 文三

### 現代知識人の条件

主な内容

- I 現代知識人の条件／絶対者の探求と政治／文学史と思想史
- II 保守主義と転向／国体論・二つの前提／日本人の風格について
- III 近代日本における戦争体験継承の一視角／成功型における人間の研究／ロマン派へ接近の頃／大衆ナショナリズムの視角／丸山眞男批判の新展開
- IV 実感の文学を超えて／ネオ・ロマン派の精神と志向／告白と共感の位相／三島由紀夫伝
- V 吉本偉断片／井上光晴のイメーヂ／尾崎秀樹のユダ

東京都港区新橋四ノ一〇  
振替東京四四三九二

徳間書店

¥ 760

を斉唱していたと云う。(福永治著、「秘録二六六事件真相史」)

## 日記

蓮田善明

七月十三日

果して、敏子たちを呼ぶのに例のおせつくないな反対。わびしい限りである。父も自分は何といふみにくい想像で蔽ふのだ！ 父よさびしくないか。

敏子に何の罪もない。その敏子を何でこんなに、ハツとすくませたりさせるのか！ なかせるのか。その父にあつて物もいへないで涙ばかり出たといふではないか。そして、どんなに夫にすがらうとしてゐることか！

自分は敏子がこの二年半に、人として深みを増してきたことはよろこぶ、しかし、あまり大きな犠牲を払はせすぎる。

敏子が必死でその素直さで生き抜かうとしてゐる姿をみてみると、嵐の中でひとり風にもがいてゐる木のやうな、いたましさといぢらしさをかんじる。もう数ヶ月の間、倒れないうやうにしてゐてくれ。

妻として以上に人間としていとしさをかんじる。そして夫として以上にたたかひをかん

じる。夫としては妻としての敏子へますます愛情をますますばかりだ。

敏子  
晶一

八月二日

七月二十八日に帰来。その夜より晶一発熱。翌朝五時をききて二丁目に敏子負うて行く。エキリ症とてひまし油をのまされたれども晶一は吐き出し、粉薬ならのむといひてのむ。洗腸。注射。頭を上下より冷す。食も求めずして午後を下る。三時ころ空腹を訴ふ。おもゆすこし。「おかゆは入つとらんたい」とうらむ。「一丁目にかへつて食ふ」とさわぐ。父が卵黄と米粒のところをもやる。爾後次第に恢復。今朝飯も普通になる。

旧作  
地玉子と一字不明杖のある青葉

家

苦しみ合うて はなれてゐる  
日も強う照るふるさとの庭の中は草木茂り  
て虫とびさかる

氷などで勿体ないよといふ母の額は(三十九度を越す熱十九度を越す)

八月五日

蟻を吹きころがす  
蟻が吹きころいだ 蟻を吹きころがる

八月十五日

夾竹桃咲きやまぬ日であり

九月九日(日)

エリザベト・ベルクナアの「夢みる唇」の筋を書いておかねばならない。わざ／＼こんなことを書きとめようとするのは、又それだけ傑作であり、又それだけ筋が誤解されてゐるからだ。そしてこの筋を正しく知るといふことはこの映画を理解する上に、それから鑑賞する上に必要にして、あやまりがないことの証明になるからだ。

これは典型的なドイツ映画の一つだ。吉村冬彦氏の所謂理屈で押ししてゐる。これが「頭がわるい」といふ問題を暫くおくとして、その理屈の押し方は、未だ嘗てこれほどのものを知らない。それが単に理屈を丸出ししてのものなら、却つてアメリカものにあらう。そんな意味でないことは吉村氏も同意と思はれる。芸術的方法として、あくまで芸術としての評価の上に高く位置しつゝ、それが精密な基でもうつかの如くだ。そしてこの「夢見る唇」はその妙味にある。

小川 国夫

生のさ中に

¥ 680

たぐい稀れな明晰さ、古典的な重量感、静謐な情感！ ここには、ある若い精神の、まごう方なき八青春の旅Vが、完成度の高い雄勁端正な表現で描き尽くされている。第一小説集「アポロンの島」を凌ぐ絶品！

里にしあれば／物と心／役者たち／巨人伝説  
／再臨派／相良油田／解らない道具／コート  
にて／高砂旅／三月／爽かな辻／平地の匂い  
海峡と火山／修道士の墓地／エンベドクレス  
の港／警備隊のいる町／スバルタ／旅療病室  
／軍艦／ウフランスまで／ゲラサ人の岸／旅  
の痕跡／アポロナスにて

東京都千代田区神田神保町一ノ三  
振替 東京 七二二七五

審美社

さて筋だ。肝心なことは実は一つだ。即ちベルクナーの紛するガビーが、いつからペーターを恋してゐることを自ら覚るやうになつたか。——この一点に重点がある。大抵は、

新訳 ルバイヤット (四)

一 オーマー・カイヤムの四行詩一

森 亮

第二十四歌

「今日」をよく暮らそうと気をくばる者にも  
まだ見ぬ「明日」にあこがれて待ち望む者  
にも  
ムエッジーンは声高らかに暗闇の塔から呼  
ばわる、  
「愚か者よ、お前らは今生でも来世でも酬  
いられぬぞ。」

第二十五歌

この世あの世の二世界にかかわることども  
を  
我賢けにあげつろうた賢人、達士も何の事  
はない  
愚かな予言者のように捨てられ、その言葉  
は嘲られ、  
その口は塵泥でびたりと詰めをされている

第二十六歌

賢い人たちの談論は聞き流して、老いたる

カイヤムに

従うがよい。命は短かいもの、これだけは確  
かなこと。

命というは短かいもの、そのほかはそれごと  
にすぎぬ。

第二十七歌

わたしも若い頃には博士、賢者を  
まめに訪れ、かるがゆえにの高論卓説  
拝聴してはみたものの、いつもいつも  
出て来たのは入ったと同じ戸口から。

第二十八歌

わたしも人にまじって知恵の種をまき、  
労をいとわずつちかかって育てもしたが、  
わたしの取り入れたものは一握みの言葉だっ  
た、  
「水のようにおれは来て、風のように去って  
ゆく。」

第二十九歌

なぜかは知らないでこの世界の中に  
どこからともなく水のように流れてきて、

噴野を渡る風のように己れの意志に係わり  
なく

行く先も知らないでわたしはゆく。

第三十歌

何とまあ、有無を言わずどこからか連れ  
込み、  
有無を言わずどこかへさつと連れ去る。  
この無礼を記憶から洗い落すためにも、  
さあ一杯、いやもう一杯さかずきを傾けよ  
うや。

第三十一歌

大地のさ中からぐんぐん昇って第七天の戸  
をぐり抜け、土屋の王座にわたしは坐っ  
た。道すがら難問に次ぐ難問を解きほぐし  
たが、解き及ばなかった謎は世にある人の  
生き死にの運命。

第三十二歌

扉があつてその鍵が見つからなかった。  
幕が垂れてその奥はうかがえなかった。  
われとか汝とか噂する声が出来てきたように  
思ったが今は分け隔てする汝もわれもない

### のどかな戦場

西部ニューギニアのマノクワリ  
 墓地の小隊長としての作者自身の  
 体験をもとにした作品であり、  
 文章も実に立派であるが「のど  
 かな戦場」と自ら題したところ  
 に注目していただきたい。「戦  
 争文学」と称するものはいろい  
 ろ出たが、その大部分は「恥辱  
 の記録」であり「あやまちは二  
 度くりかえしません」という、  
 だれにあやまるのか広島方式の  
 「泣きごと戦記」であった。中  
 谷中尉は敢えて戦場の、「のど  
 かさ」を描いた。男のレジスタ  
 ンスである。(朝日新聞評)

¥ 480

東都書房

東京都文京区音羽二ノ一ノ三三二  
 振替東京七二七三二

夫が客をもうしばらくといいつて引きとめる  
 際に「おやすみ」といつてしまふガビーだ。  
 音楽に興味があつて、人に興味は第二か、或  
 は第二でもない。

楽屋でベーターをみて、目の色かへてあは

て、にげ出す……これが事件としては重大な  
 第一の伏線だが、あはて、にげる目の中には、  
 尊敬と、尊敬からの庄服感、あてのちがつた  
 まごつきの衝突、それを、彼女らしい無邪気  
 いっぱいでろくく謝りもせず、子供らしい  
 気まりわるさであんなに「小鹿」のやうに後  
 姿をみせたのだ。

家で再会、彼女が夫からの前通知でその  
 男と気づいてゐる気もちには恋といつた気も  
 ちもなく、たゞ夫の旧友の来訪にも、すねて  
 ゐる程度で男が「ハツ」と思つてるほどに  
 は、こちらはのんきだ。

夫の口から意外なことがもれる。「酔ふと  
 おしやべりになりますの」といふ、彼女には  
 やつと出たお上手だ。すばらしい女をベータ  
 ーが見たといふベーターの感激は、ガビーに  
 は、男とはちがつた好意に余り遠くない愛情  
 でみられてゐるくらいにしか受け入れられて  
 ゐない。

彼女は音楽を愛してゐる。もう一べんきか  
 せてくれと客のベーターに要求するのをもそれ  
 だ。普通ならその客人の疲れを察して、ミハエ  
 ルがいふ通り、むしろこちらで御馳走に「呼  
 ぶべきところを。その率直な子供らしい初な  
 要求。

そして、シネマ館のプログラムの「梗概」も、

ベーターが演奏するのをガビーがきき入つて  
 ゐるところからしてゐる。思ふに、映画を  
 見る目が、アメリカものになれてゐる目には  
 仕方ない誤謬といつてよい。実は、ガビー  
 がベーターの旅行先からの電話があつた後  
 で、その夜疲れて夢に、夫に、しらずしらず  
 劑をあやまつてのませて(そのしらずしらずし  
 てることを夢見る一つの「我」は知つてゐ  
 る)、さめた、そのあたりだ。このいつから  
 意識して恋する気になつたかを定めてから、  
 それ以前をふり返つてみると、あの鹿爪らし  
 い、(しかし熱情的な音楽をもつヴァイオリ  
 ニストの)ベーターと、おしやべりのおしや  
 べりの夫のミハエルと、若い、小鳥のやうな、  
 いや「小鹿」のやうなガビーの組合せとも、つれ  
 とが解けてゆき、それからあの最後の「死」  
 も理解(文字通り理解)されよう。

はじめネボスケのガビー。わざと着物をち  
 がへて着て行くガビー。時間をおくれるガビ  
 ー。——いたづらくした子供っぽさを現は  
 してゐる。ベーターのヴァイオリンにききとれ  
 る……音楽好きを示す。そしてかなり音楽に  
 打たれてゐることを示す。ここでベーターに  
 もう愛をかんじはじめてゐるなどいつたら、ア  
 メリカ式の目だ。

翌日の招待を断つたのは、実は翌日一人で  
 出かける魂胆だ。なぜ一人でかけるか。夫の  
 おしやべりに無意識のこの際の「邪魔」をか  
 んじてゐる。一人で腹一杯きかう。——さう  
 なのだ。

翌日は、ベーターは心があつてみる、しか  
 し彼女は夫をおいてきぼりにして、無断でき

## 私の庭

福地邦樹

私の狭い庭には

殆んど花らしいものは無かつた

子供の砂あそびの場所が

広い方がよからう

という気持もあつたのである

すると最近

交通事故以来ブラブラしている

閑な教え子が

私の庭に異常な関心を示し

次々に花を運んで来はじめた

それが不思議な事に

浜木綿とか アマリリスとか

グラジオオラス 水仙

たことにあくまで無心だ。音譜をさがしなが  
 ら、「約束」したではありませんかといつて  
 ゐる。夫には、そのうちこのことは話すとい  
 つてゐる。なぜベーターが演奏を中止したか、  
 彼女の不審な目。そして彼女一人できたとい  
 ふことをわると無理にも知らせたのはベ  
 ーターだ。「かるはずみなことはしません」と

といった球根性の  
 似たような姿の花ばかり  
 運んでくるのである  
 ちつとは違うのを持って来てくれよ  
 と注文をつけるのだけど

一向にききめがなく  
 相変わらず また  
 クロッカスとかチューリップなどと  
 球根のをどこからか見つけてきて

私の留守中に勝手に植えていくのである  
 いずれ 私の庭は

私の好みとは無関係に  
 その閑な男の趣味に従つて  
 蘭みたいな花ばかりで

埋まってしまうのじやなからうか  
 何とか どころで

別れぎはにちやんと言つて出たガビー。男は  
 わが心の思ひの幕でガビーをも蔽ふものとい  
 つてよい。

その夜の酒場。夫との乱ちき、「よふと面  
 白いのよ」と、自分も酔つて大笑ひ。夫に女  
 をさがしてやつてから、気むづかしいベータ  
 ーに叱責されて、着物のことも、なんでこんな

対策を考えねばならぬと  
 思わぬでもないが  
 そして 実は私は  
 花の咲く木や一年生の草花の方が  
 好ましいとは思つてゐるのだが  
 自分で買い集めてくる所までは  
 いかないのである

三つの娘は  
 その「変なお兄ちゃん」の植えた花を  
 大切にしているが  
 時々遊びに夢中になり  
 踏んづけて 枯らしてしまつたりする  
 そんな報告を妻から聞くと  
 私は正直のところ  
 蘭族のはびこりの自然淘汰に  
 満足さえ感ずるのである

## Holding on to the Stone of August

Shizuo Itoh

Holding on to the stone of August,  
A blissful butterfly has gasped its last.  
After having known one's own destiny,  
Who could yet live  
In this fierce sunlight of summer?

Destiny? Yes,  
Ah, we ourselves are a solitary and silent illuminant!  
A white external world.

Behold, the sun creates there,  
Only for itself,  
A deep, beautiful shade of the tree.  
I, too,

Will dream awhile  
Of the bluish eyes, shadowed by hanger,  
Of a wolf fallen down in the snow field.

Translated by Ken Miyagi

に叱るのかしらといった顔「これが一番妾の上等なのよ」それから男に自分を「愛してるか」と訊く。男は一生懸命で「非常に」と答へる。ガビーは「うれしくてたまらない」といふ、「三人でかうしてゐるとたのしい」。子供らしく「愛してる」と確信を得たよろこびだ。男がいつてゐるのは種類のちがふ「愛」をガビーはいつてゐるのだ。

その翌日、ベーターの出発。送りにきて泣いてゐるガビー。この涙は、恋人との別れの涙とこれさうにもある。しかし、女の涙といふやつは何がどうでの涙なのか分らない。却つてすぐれた芸術家はきまり文句の涙を出させようとしな。自然な涙を出させるだけだ。別れてしまふとけろりと夫をいたはる彼女だ。

長い病気の気疲れ。女の神経を計算に入れねばならぬ。せめて夫のミハエルがもつとしばらくに愛してくれたらよかつたかもしれぬ。

ベーターの演奏旅行先からの電話。彼女には、ベーターがなぜ帰つてくるかが今初めて分つた。彼女はわるい悪感のやうなものをかかしてゐる。

その夜の夢で、意外彼女は自分がいかにベーターに惹きつけられてゐるかをかんじ知つた。否す、それをしてつたのではない。女らしく

男のある力にどうにもならぬやうな強さと恐れをかんじたといった方がよいかもしれぬ。そしてあの夢は精神分析学をしらねば理解（この場合も監督は理解を要求する。これがアメリカの観念主義とこんぐらかつて見物に見えてしまつてゐるのだ）できないのだ。夫への薬剤のあやまり。彼女はもう一個の神経衰弱病にか、つてゐる。それが、夫が無理に戸外に出したことによつてとうとうあやまちに落させてしまつたのだ。彼女はもう一つの催眠術にかけられたやうな夢遊病的な精神状態である、彼女の頭意識はそれと抵抗しようとし、それと対抗的に力となり得る夫に救ひを求めてゐる。而もそれが夫のひとりよがりでありすぎる甘さの故にかへつて彼女をひとりでつき放した形になつた。泥だらけにさせたのだ。姦通のあやまちはあやまつた後に始めて感じられるのが本当だらう。監督は、さういふ風に筋をはこんでゐる。最後の死も全く自然といへる。決して大袈裟でない。彼女は、「死の恐怖をかんじる前に」即ち理性をとり戻す前に、自らの感情の中に自分の墓穴をほる道をえらんだ。

筋に無理がない。しかし見てゐてこの描出の「理」の押し方のこまかさ、見る方でつ

かれさせられる。面白い点も同時にそこだが、目でみる映画でさへ、こままでになるとこの堺をかんじさせられる。日本人でも、この「理」型の鑑賞者でないとは分るまい。

Gトラークル  
平井俊夫訳

筑摩叢書一〇〇

## トラークル詩集

今世紀のはじめ、落日のオーストリアが生んだ稀有の抒情詩人ゲオルク・トラークル、本書はその純粋で深い詩風において比肩するものヘルダーリン唯一人という、若くて逝つた鬼才の詩集の待望の全訳である。本邦初訳。

Ⅰ 美しい街／小協奏曲／農夫たち／悪の夢  
／深い淵より／村にて／ヘリアン  
Ⅱ 夢のなかのゼバステイアン／孤独者の秋  
／死の七つの歌  
Ⅲ 夢と狂気／訣れを告げた者の歌／啓示と没落  
年譜・解説 ￥ 560

筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八  
坂 啓 東 京 四 一 二 三

か

# 山荘詩評

吉本青司

「言葉」1（広島市）の、四反田五郎の評論「中河与一・試論」には、「日本における実存文学の先駆者」という副題がついているが、短文ながら、孤高に生きる作家を論じて胸のすくものを感じさせる。

いつの時代にも、貴重であるべき作家や、作品が、故意か半解のため無視された例は、数少くなかったのではなからうか。現代日本の文壇や詩壇の盲点を、指摘した評論として注目する。

「歷程」8（東京都）の裏表紙に書かれた草野心平の「天山まつり」は、ほかの詩を読むよりも面白い。物も行為も、リポートされることによって、文化として定着する。

「詩賊」15（長崎市）の、福田須磨子の「われなお生きてあり」は、素朴なタッチで書きつづけた、原爆被災記である。柔軟な皮膚をとおして描かれた、事実についての表現のリアリテが、文飾的なてらいを一切拒否している。潤れないものは、読者の涙だけである。「無名鬼」第七号（武蔵野市）の、桶谷秀昭の「伊東静雄」は、従来の試論をふまえた

定稿だという。それだけに、読みの深さを感じさせる明快な評論である。

伊東の詩の生み出された場所を「意識の暗黒部との必死な格闘」としたことも、十分に傾聴させられる。

きびしい時代の予感が、彼にそれを強いたことは、その作品が、むしろ今日のこの時間にも、いきいきと見られることを見れば、明らかである。

意識の間黒部こそ、夢のふるさとだということ、ユングなども考えたところである。「魔法の会」9（東京都）の、南江治郎の「現代詩の朗読」は、詩の音声学的な理解を示唆する。和歌の拓いた「縁語」や「掛詞」などの手法を「むしろ、形式（フォルム）に即して、形式をも超越するための、超現実的な、表現の『妙』として、自然に生れ出たものであろうと考える」といっている。

「自然に生れ出た」という言葉には、少し舌たらずの感があるが、伊東詩などにも、そのような詩法のあることを見のがしてはならない。

「日本談義」6月号（熊本市）の、今田哲夫の「西天庵文晝について」は、芭蕉の終焉記からんで、興味深い文章である。「天秤」20（宝塚市）の、桑島玄二の

かれる。「匠」は、すぐれた詩だ。

山根忠雄詩集「竹梅抄」は、柔軟で、ヒステリアを醸していない。それは良くもあり、弱点でもある。「一本の蠶」「知音」「金龍の大壺」などは、むしろ、そのために成功している。

殿岡辰雄の詩集「遙かなる未」は、性の陰部から宇宙を遠望しようとしている。殿岡にとって、キャバレーも麻雀荘も陰部である。詩集の黒いページも陰部である。でも、ちょっと戯画化しすぎたところに、不満がある。

## 秋の海

美堂正義

「星が奇麗になりました」娘は私に言つて空を仰いだ。私は忘れてゐたものが不意にあらはれた思ひで、久振りにゆつくりと夜星にちりばめられた、寶石のやうな星を見た。市の中に住んでゐては、落付いて星を鑑賞する心のゆとりを失つて、自然の美しさも見忘れ勝ちになる。

娘の家はバスで十五分も海岸線を走つた、山懐の部落に住んでゐる。そこから

「美」の言葉たちは、美しく響きあっている。言葉のエコーこそ詩なのだ。「沖繩小篇」はりっぱな詩である。

稗田董平の詩集「岩の女神」は、想念のあそびが、作品をよわめている。感動的なイメージは、「虚実皮膜の間」に定着するものである。「宵」「情念」などの方向に、このひとの未来を眺めた。

ミヨウガの塩漬を食べる  
絶望の季節に  
こんなシンプルな詩句はめずらしい。

は変化する海の美しさがよいと言ふ。雨上のりの海の色が一番だと、瞳をかがやかしながら話す。生活につかれよく旅に出た。あてもなく海岸線の美にひかれ、孤立する岬の灯台に心の安らぎを求めて、いまはそ

のやうな旅へも出られない。水害にいたためつけられたその娘には、そんなかけりも残さない明るさで、声を立てて笑ひながら話す。その娘の顔を見ながら、暗れた日の瀬戸内海の色を思ふ。

秋の空を映した海を想像する。「一度そこから海を見たいと。」不意に私の口から飛び出した。

「反戦詩はあったか」も、反戦詩とは何か、という命題を投げかけている。政治の次元と精神の次元と、そう二分するとすれば、文中に引用された井上靖の「元氏」や「友」などは、後者であろう。そのような認識からいえば、桑島のいうように「すぐれた相聞歌も反戦詩」である。

さてここで、詩集の展望をしたい。石塚照代詩集「雪庭の女」は、観念のあそびのある作品より「夢科の宿にて」のような、叙景の思念をうたったものが、より美しい。「薔薇のゆううつ」は、抽象化された感情の反射がおもしろい。

萩本家義詩集「坂の話」は、さわやかな風を聴くような本である。「冬」「坂の話」「春の枯葉」「かかし」など、さりげない話ぶりが、枯葉にたまった露滴のような詩になっている。

松村茂平の詩集「牛」は、現代にこびず、自分の言葉で、ニガリのように、生と死のふれあう場所を追っている。「牛」「赤富士」「落葉の舗道」など、まとまりを持つものと、平凡なものと混った本である。

広瀬道子の「それとは別の」は、実感の伴わない観念詩よりも「いじわるなあなた」のように、滲み出る歯こたえを持った作品にひ

詩洋四拾周年記念詩集「詩洋詩人選集」第3巻は、たくさん詩人の集まりである。阿部英雄の「残響」、小池鈴江の「ころろき」蠟山京子の「滝」はか一連の詩、前田鉄之助の「海鷗」など、ナイーブな新鮮味が、ころろに沈む。とくに「海鷗」の、老いた漁師の非情さは印象的だ。

平畑博道の詩集「青い時間」は、「七夕」のようなリリズムが、このひと自身の意匠で育つ日待ちたい本である。

浅野晃の「流転詩集」は、過・現・未が混然として、別離と再会と、絶望と期待と、死と生と、というような両極を包む、虚無という宇宙のなかで、流転している。その軌跡は、永遠に停止することのない環状である。音楽でいうなら、主題と応答句が重なりあって展開してゆくフーガであろう。

大島幹生の訳した「ダクスン詩集」は、十九世紀末に生きた一人のイギリス詩人の、本邦初訳本である。百年遅れの今世紀末に生れてくる詩人を想いはかり、世紀末詩人の生き方ということ、興味があつた。

だが、訳詩としては、青春の時期に行われ、十年を経た今日の訳者の、詩人としての感受性の鈍磨が感じられない。コトバの新味や響きあいに欠けるところがある。

# 四季復刊第一号

樹と少女…………丸山 薫  
 鍋・汽船…………田中 冬二  
 物 語…………神保光太郎  
 セラステウス・プロパルティウス  
 グアレリーの「消えた葡萄酒」  
 吳 茂一訳  
 長明の散文詩…………河盛 好蔵  
 一 昼 夜…………小高根二郎  
 近 況…………竹中 郁  
 樹のしたで…………田中 克己  
 青春の絆・廻転ドア…………大木 実  
 「四季」と辰雄…………阪本 越郎  
 女らしく…………堀 多恵子  
 四季の犀星の詩のひとつ…………萩原 葉子  
 傾 斜…………室生 朝子  
 波と蜩…………杉山 平一  
 銀 河…………伊藤 桂一  
 渦…………山岸 外史  
 四重奏…………塚山 勇三  
 座談会…………小山 正孝  
 「四季発刊について」  
 〔三好達治〕

潮流社

果樹園 一四三号 昭和四十三年一月一日発行 (毎月一回一日発行)

とはいっても、「祈る老僧」「終わりの調べ」の二篇は、ダウソンの詩のこころを伝える力作である。

これで、今度の作品評を終る。

ところで、若い世代における詩の復活は、単に、流行のポピュラーソングの発展的現象とだけは考えたくない。そこには、文明宇宙にあきたらない、現代の最も若い人々が「意識の暗黒部」から、五次元宇宙のかがやきに向かおうとする、無意識のねがいを読みとることができると。読者を軽蔑してはならない。

詩を読むことが逃避なら、すべての詩人は消えざるがよい。政治に向かえば、破壊型の無政府主義者になる若者も、精神の次元に立ちかえるとき、花心にふれるような愛のうづきを覚えるであろう。詩は愛であるとした宣長の思想は生きている。

## 編集後記

十一月四日、産業スパイというはなはだ芳しからぬ呼称の事件に、僕の勤め先が巻き込まれた。たまたま同業他社の一社員が自社の技術資料を持ち出し、プロカーを紹介して他社に売り込もうとしたのが発端だった。そのプロカーの手から入手した資料を、盗品と知っておりながら買ったのではないかと、というのが容疑の核心だった。スポーツスマンの立場の僕は、新聞、週刊誌はおろか、NHKテレビの「10番まで引く張り出されて醜態をさらさざるを

えなかつた。お蔭で同人会員各位に非常な心配をかけ見舞いをいただいた。御好意に衷心から感謝を申し上げる。但し、僕にとっては、日本の運命にかかわった蓮田の死以上の事件ではなかつたことは、詩人の確信として申し上げる。

十一月十六日、「東京新聞」「大波小波」欄に「伊東静雄をめぐる新説」と題し「アホラン氏」の匿名で紹介とちよつびりやうが出た。「南北」十二月号の拙稿「伊東静雄の抒情の結晶」に関してである。アホラン氏の伊東に関する知識はどの位であるか知る由もないが、伊東の抒情の核心である「意識の暗黒部」の必死な格闘」を解く重要な鍵の一つであることは間違いない。

今月は先に広告を掲載した四著を頂戴した。なにぶんとも草々の間で、味読するにいたらず散見のていどを出ないが、いずれも今日を生きぬための貴重な糧であると感銘された。とりわけ「トータル詩集」はかつて本誌に連載したものであることを光栄とする。

## 果樹園 第一四三号 (毎月一回一日発行)

昭和四十三年一月一日発行  
 池田市石橋二丁目六ノ五  
 編集者 小高根二郎  
 大坂市東住吉区桑津町五ノ八  
 印刷所 元市印刷株式会社  
 池田市石橋二丁目六ノ五  
 発行所 果樹園社  
 定価 四十円 送料 二十円

果樹園 一四四号 昭和四十三年二月一日発行 (毎月一回一日発行)

# 果樹園

第144号

蓮田善明とその死 小高根二郎  
 柳田国男先生 田中克己  
 存在の痛みの文学 前田敬作  
 訳業のかたわらで 飛鷹 節

新訳「ルバイヤット」因 森 亮  
 夕 起 子 三 才 福 地 邦 樹  
 山 莊 で 吉 本 青 司  
 英訳「秋鷲は飛ばずに全路を歩いて来る」  
 伊 東 静 雄  
 宮 城 賢  
 在 所 浅 田 二 三 男  
 海 の 断 章 美 堂 正 義  
 編 集 後 記

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

## 蓮田善明とその死(四六)

小高根二郎

蓮田は昭和十七年の「文芸文化」十二月号後記で、「所感」と題して開戦一周年の回顧をしている。

「南太平洋海戦の事が発表せられた。真珠湾やマレー沖の海戦の事を知った時ともまた違った気持を味った。前以て報道部長の放送があつてゐたし、その後いろいろこの海戦の長引いてゐる様子をきいて、ひとりの待ぎこたへではあつたが明け暮れ念じてゐたところ、あの報道をきいて、私の祈りもあつた、められた気持もあつたためかもしれぬ。あの夜外から帰つてゐた私は、家の直

ぐ近くの家の前を通りかゝるとラジオの音がそれと分つたので、生垣の外に月光を浴びながら立つてき、終つて帰つた。けれどこの海戦は開戦以来一週年近い、今日の戦闘らしい戦闘として、このやうに、戦は大きく進んで行く。われら又素敵撃滅の闘魂を休めてはならぬ。

愈々校本源氏物語が成つて刊行されることになつたことも心から祝ひたい。もう二年前になつたが、戦線にあつた私は源氏物語をどんなに喜びにあふれて読んでゐたか分らない。たまらなくなつて軍事郵便のがきをカードにして書きとつたものも忘れがたい思ひ出となつてゐる。生きてゐる限りの煩惱でそれをしてゐた。その時の蠟燭の火のいろまで忘れられない。確か二回目

十二月八日が経めぐつてくる。まことに(風雅みやびの)をせむるものは、その地に足をすま難く、一步自然に進む理なり、といつた古人のふかい心に国文学者として私は心を据多たいと思ふ。

思ひ出深い今年には又順徳天皇御七百年忌に当る。百敷やふるき軒端のしのぶにもなほ余りある昔なりけり、三誦四誦千誦万誦して私どものちかひとしたい。」

蓮田は月光に立ち濡れながら南太平洋海戦のラジオ・ニュースを聞いたのだ。これはたぶん十一月十二日の第三次ソロモン海戦の戦果を伝えるニュースだったろう。既述した丹羽氏が負傷した夜戦は八月の第一次ソロモン

海戦だったが、その後三ヶ月間の一進一退の死闘を繰り返しているうちに、形勢はとみにわが軍に不利になりつつあったのである。：というのは、十月のサヴォ島海戦から、敵は電波探知機を起用したので、わが軍得意の夜襲が以前ほど奏効しなくなつたからである。蓮田は生垣近くの道路に身じろぎもせず佇みながら、ルンガ湾深く突入したわが艦艇が、米艦六隻を撃沈、その他にも大きな損害を与えながら、われもまた戦艦比叡が大破、駆逐艦二隻を失うにいたつた相当な損害を、眼を閉じて脳裏で聞いたであろう。蓮田はその脳裏に、「コギト」五月号で読んだ伊東静雄の「海戦展望」の情景を、まさまじと想起したに相違ない。

いかばかり御軍らは  
まなこかやきけむ  
皎たる月明の夜なりきといふ  
そをきけば  
ころほろばろ  
スラブヤ沖  
バタヴィアの沖  
敵影のかずのかぎりを  
あきらかに見よと照らしし

月読は  
夜すがらのたたかひの果  
つはものが頬にのほりし  
ふまひをもみそなはしけむ  
スラブヤ沖  
バタヴィアの沖

「敵艦六隻撃沈」という威勢のいいニュースで、蓮田の頬には、詩中のつわものと同じ笑いが、つい：浮んでいただろう。しかし、「わが方もまた相当な損害……」という結びで、その笑いも瞬間に消え、家へ向って歩みだした蓮田は「うむ！ 索敵撃滅あるのみ」と拳を固く握りしめていたであろう。その昂揚している彼は、その日から一年後、スラブヤ・バタヴィアから跳び石伝い、小スンダ列島の中部、オーストラリアからつい北沖のスマバ島に進駐するようになろうとは、想像したであろうか？ いや、いや想像をしたと想われる節がある。……というのは、彼は校本源氏物語を介して、戦場を思い出しているからである。

それは二年前の晏家大山の円蓋塚であつた。心細い蠟燭の光で岩波文庫本の源氏物語をひもどいたのだ。五十四帖を読破し、さらに第三十二帖目の「梅ヶ枝」まで読み返えし

複製版四季  
★全八十三冊原寸大、布装帯入  
★頒価参万八千五百円(別に送料五〇〇円)  
★三百部限定  
東京都目黒区駒場町八六一  
日本近代文学館事務局

ていたのである。軍事郵便ハガキをカードにして梗概だろうかメモまでとっていた。明日の命は誰も保証してはくれない。戦とは凡そ緑のないこの痴情物語のらちもないてんめん、まるでわが命脈がすがりうる唯一の寄り場があるかのように、すがって来た。耽読してきた。ただ、なんとということはない、「生きてゐる限りの煩惱で、それをしてゐた」のだ。

夜冷えて尿意を催した彼は、蠟燭の光を遮蔽している暗幕とアンペラをはねて塚外に出た。彼は最寄りの草叢を選んでシヤン、シヤン、シヤン……とすかさず小便を打つた。

### 柳田国男先生

田中克己

先生にお目にかかったのはその御老年になってからでいつも散歩にお越しになる場所でのことだった  
会ふといつても同じ質問をなされた  
「どなたでしたかね」  
「おくにはどこでしたかね」  
あとの御質問に「淡路です」と答へるとまたきまって「淡路には伊藤といふ漢学者がゐるがご存じかね」とおたづねになった  
わたしはいつも「存じません」と答へた先生が亡くなられてからわたしは発見した  
わたしの母の姉の嫁ぎ先の男で百歳まで生きたのがその人だといふことを  
碑文は平沼黙一郎の筆で洲本に建てらる  
柳田先生の御学問の百分の一は本になつたが  
伊藤蘭秋は著書をもたないのでその学問はつひに知られずじまひである

う。砲座の方角から、月光で部下の誰かと判る影が近付いてくる。と、「誰か？」と誰何する。「三べん問うも答えざれば、捕獲するか、又は射殺すべし」の陣中勤務令のあれである。蓮田は鷹揚に滴を払いながら、「ハ・ス・ダ・少・尉……」と答える。銃を構えていた影は、銃剣を一閃さすと捧げつつに変わり、「歩哨中、異常ありません！」と報告をする。蓮田は滴を払い終つた筒をスポンに仕舞いこみながら、「「苦勞……」とねぎらう。「続いて服務します！」と影は復唱すると、砲座の方角へ月光に紛れていってしまつた。模糊、茫洋とした一面の月光の海。洞庭湖だけがそこはかとなく遍照して明る。先ほど歩み去つた歩哨は、そのまま月光の霧に乗り、湖を渡って、どこぞ行方しれずになりはすまいかと錯覚させる。それほど時を越えた静寂が支配している。まさに劫初そのままの静けさだ。一体どこで凄惨な戦闘が行われているのか？ 蓮田はときとしてこんな思いにふと執り憑かれることがある。それは戦闘のさ中であつてさえ通れられなくなる恍惚だ。ある討伐戦で、蜘蛛手となつて流れる川辺でも、その恍惚を体験した。近くの松林ではすでに砲撃が開始されていた。蓮田は戦

### 存在の痛みの文学

前田 敬作

葉むらは滅びにつつまれてしめやかに煙り  
大きい死の沈黙が森のなかにみちる

「末期の眼」という言葉があるが、このような眼をもっていた詩人は、どのような人間なのであろうか。かれの眼は、つねに「滅び」を見、おののく。「滅び」こそ、トラウマ詩の根本基調である。それは、ほとんど無調に近いけれども、どこかしらおなじザルツブルク生れのモーツァルトの悲痛な短調をお



もわせる。

夕ぐれの庭園で死者を歎きつつ

オルフォイスが堅琴を銀色に奏するとき

一九一〇年ごろを境として、ヨーロッパ文学の上に地すべり現象にも似た大きな変革がおこる。これを正確に理解するためには、「近代の終末」という事実を念頭におかなくてはならない。ルネサンスとともに始まる「自律」倫理とガリレイおよびデカルトにおいて成立する科学理性への信仰とを軸にした近代的世界観は、十九世紀市民社会の爛熟とともにようやくその矛盾と限界を露呈しはじめ、第一次世界大戦によってそれが決定的となった。ひとつの時代の没落は、人間を存在の零地点におとし入れる。古い世界はすでに崩壊し、新しい世界はまだ成立していない。この「すでない」と「まだない」という二重の不在状況こそ、スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセーもいうように、「危機」というものの本質構造にほかならない。この零地点的状况の解明とそれからの脱出ということが、一九一〇年ごろからはじまる現代文学の根本課題である。それは、近代文学とは根本的に異なった、いわば「存在の文学」であっ

て、もはや「人はいかに生きるべきか」ではなく、「人はいかにして存在しうるか」と存在そのものを根底的に問う。このような「存在の文学」の最初の記念碑的な作品は、一九一〇年に発表されたリルケの「マルテの手記」であるが、このころカフカは、あの戦慄的な「流刑地にて」を書いていたはずである。

トラークルの「滅び」も、このような存在の零地点的状况である。とはいえ、トラークルは、存在の問題をかならずしも根底的に問うたわけではなく、むしろ存在喪失の恐怖と戦慄を身をもってしめす震度計となったのである。二十七歳で夭折したかれの詩は、たとえばリルケのように独自の神話的世界を構築するまでにはいたらなかったが、その指ししめすところは、はるかに深い。まことに、トラークル詩は、「存在することの痛み」の文学であるといえることができる。

ここにトラークルの全詩が日本語に移植されたことを、一読者としてここからよろこびたい。この訳業が稀有の情熱をこめた驚嘆すべき神品であることは、いまさら提灯をもつまでもない。以後は、この愛する詩人の作品を平井氏の訳で反復熟読することができるといって、トラークル自身の自画像と

Gトラークル  
平井俊夫訳  
筑摩書房一〇〇  
トラーケル詩集  
東京都千代田区神田小川町二ノ八  
振替 東京 四 一 二 三  
筑摩書房

もういべき「カスパール・ハウザーの歌」の訳詩のほとんど完璧なまでのみごとさ——

真実かれは太陽を愛していた。紫となって  
丘をおちた太陽を

森の小径や歌をうたう黒い鳥を  
そうして緑の歓喜をかれは愛していた。

銀が閃めいてこの生まれなかった者の首が  
おちた。

(京都大学教養学部教授)

### 訳業のかたわらで

飛鷹 節

夭折した詩人トラークルのほんとうの意味

### 新訳 ルバイヤット (五)

—オーマール・カイヤムの四行詩—

森 亮

#### 第三十三歌

めぐってやまぬ天に向かつてわたしは呼ばわ  
った。  
「暗闇をよろめきながらゆく人の子を  
どんな明りを灯して運命は導くか」と。  
「目の見えぬ悟りが手引き」と天からの声  
が答えた。

#### 第三十四歌

そこでわたしはいのちの秘密の源を探りあ  
てようとして、  
陶の大きさを口移しにわが唇をもって行った。  
さかすきは口移しにささやいた、「生きて  
ある間は  
飲むがよい。死ねばまた帰って来られるも  
のでなし。」

#### 第三十五歌

もつれた舌でわたしに答えたこの杯は、思

うに、  
嘗てはこの世に生き、浮かれ騒いだ人であろ  
う。

私がかくちをよせるこの冷たいくちも生きてい  
た日に

幾たびくちづけを人から受け、また与えたこ  
とか。

#### 第三十六歌

市場のまちである日の暮れがわたしは見た  
陶工が水を含ませた粘土をはたはたと打つ  
を。  
言葉にならぬ言葉で粘土はぶつき言ってい  
た、  
「人であったおれを、頼む、お手柔かに打っ  
てくれ。」

#### 第三十七歌

ああ、さかすきを満たせ。いくら嘆いても無  
駄なこと、  
時はわたしたちの足もとをすべるように流れ  
る。  
まだ生まれぬ明日や逝ってしまった昨日を  
なぜ又思い悩むのか、今日が楽しい今日であ

るなら。

#### 第三十八歌

滅びの曠野に身をおくこの一刻、  
いのちの泉から生気をくみとる瞬間、  
星は次第に空から消えて、しずしずと人の  
世の隊商は  
虚しい暗に向かつて出発を始めた。さあ、  
急げよ。

#### 第三十九歌

なんと長い間あれを求めこれを究めようと  
倦むこともなくあげつらいつづけたことか、  
実り多い葡萄を愛でて随分はしゃぐがよい、  
苦い果を噛み当てたり、得る所なくて嘆く  
よりは。

#### 第四十歌

わたしが又新しく妻を迎えるというので  
家で飲んだり騒いだりしてから何年にもな  
る。  
寝床から追い出されたのは理性という石女、  
その代りに迎え入れたのが葡萄の樹の娘。

での詩作は、短かったその生涯のなかでもさらに短い最後の数年に集中しているとみてよいのであろう。平井さんの作成された年譜をみると、一九一〇年のところに「この頃から独自の詩的世界を展開しはじめる」とある。それは、具体的には「滅び」や「美しい街」あるいは「嵐の夕べ」などの詩がうまれたことを指しているらしい。つまり、現在のかたちの詩集において、その劈頭をかざっている一連の詩である。

そのうちの一篇「嵐の夕べ」には、ひとつのエピソードがまつわっている。というより、この詩のただずまいを詩人みずから解説した一通の手紙がのこされている。ことのおこりは、ウィーン在住のあるジャーナリストが「嵐の夕べ」をほとんど剽窃したような詩を書き、これをトラークルに朗読してきかせたことになったという。詩人がその短いのを、まるで仮面でもすげかえるみたいに無雑作に身につけて詩人との親近性をほこり、あまつさえこの親近性をちらつかせて詩人におもねるその態度は、言いようもない悲しみといきどおりをトラークルのところに刻みつけたらしい。彼はその悲憤を小学校時代からの親友ブッシュベクに宛ててひそかにもらして

いる――

「……要するに、ぼくの仕事の衣裳だけが、血みどろになって獲得した詩法の外形だけが、こまかな細部にいたるまで模倣されたのです。なるほどあの『親近性のある』詩には、ほかならぬこの詩型を創りださずにはいられなかった生きた熱気が欠けており、したがってその全体が魂のないつくりものとしか見えません。だが、そのうちきつとどこかで、ぼくは自分の相貌の歪んだ鏡像が見もしらぬ男の顔のまえに仮面として浮びでるのを見るにちがいないのです。そのとき、ぼくは果してまったく面識のない無縁な人間として、それを平然として見送ることができるものでしょうか。」

トラークルの詩をわたしたちのことばにうつしとろうとする平井さんの仕事は、容易には進捗しなかったらしい。訳詩集の「あとがき」でみずからそのことを振返る平井さんは、そのとどこおりに「昏迷」という形容さえ与えている。もしそこに昏迷というようなものがあったとすれば、その理由はなによりもまず上のような詩人の呪詛にあったのではないだろうか。少くともはた目には、そう思われるふしぶしがあつた。詩人のうちに響いている旋律に迫るためには、ほかならぬ詩人

## 夕起子三才

福地邦樹

三つの夕起子の

過去 現在 未来は

おおざっぱで

至極さばさばしている

過去はすべて「きのう」で

きのうおじいちゃんと公園行ったのよ

きのう百貨店のエスカレータのつたね

きのうユコチャン岡山に行つて泳いだね

現在は一番確かで

だから意識の上では希薄である

未来は「大きくなったら」

大きくなったら幼稚園につれてくれるね

大きくなったら父ちゃんと結婚するのよ

大きくなったらユコチャンにお酒のまし

てくれるね

## 山荘で

吉本青司

雪の中から

大根を抜いてたべる

パッハのオラトリヤを

聴いた朝

ことし最初の

雪がふった

その人がもぎとられまいと両手でしっかり押さえている相貌をむしりとり、しかもこれをわたしたちのことばにうつさざるを得ぬという根本的な矛盾。この呪わしい矛盾をかくくぐってゆくことから生じる諦念。そして責務。そういう暗澹としたものが、ただ周辺にすぎない者にもおほろげながら察せられるのであつた。

「果樹園」に訳詩をすこしずつ掲載するあいだ、それは二年半にわたつたが、毎月末の原稿締切日にはかならず小高根氏宅まで足をこんで訳稿を届けるのが、平井さんにとつてならいになったようである。阪急でわずかに一駅の距離とはいへ、これはやはり並大抵のことではない。すくなくとも平井さんが日常にしめす身のこなしの遅速からいって、尋常ではない。

平井さんはまた校正にも厳格であつたらしい。あれは「ヘリアン」の詩が掲載されたときのことであつたらうか。記憶は確かでないがとにかく節の不揃いな詩で、その区切りを印刷所のためとくに指示しておいたらしいのに、うまくゆかなかつたことがある。その折の平井さんのいらだち、そして小高根氏への折目正しい喰いさがりぶりは、やはり尋常ではなかつた。それがぼくたちにも識れたのは、

その後しばらくして小高根氏宅へ客として招かれたときのことである。その日おいしい洋酒をいく種類も御馳走になったぼくたちは、すでにかなり酔つていた。ふと気付くと、平井さんがうつつむきこんで机に顔をすり寄せるようにしながら、区切りの件を小高根氏にむし返している。言葉はあくまで丁寧に、少しづつむし返している。その件はもう充分承知されているはずの氏にむかつて、誠意をこめてぶつつかつてゆく。ぼくたちは、ただそれを見守るほかはなかつた。やがてそれも一しきり終つたところで、小高根氏がぼくたちにむかつて「森亮先生のヘリックと平井先生のトラークルだけは、とても校正をゆるがせにできません。これからは御自分でやっていたことにしました」と、ここから嬉しうに笑いながら、眼を細められた。その高い眉はしかし一層高くつりあげられていた。詩に憑かれた人同士このふれあいを、ぼくは異様に美しいとおもつた。

やはり「果樹園」に連載中のこと、「夕暮」の詩のテキストが第十一版と十二版のあいだで異同があるのを発見したときの、平井さんの途方に暮れたような表情も、ぼくは忘れることができない。従来版では、そして再び十二版でも、訳せば「白い子孫の」となつて

# The Crake Comes, Not Flying But Walking All the Way

Shizuo Itoh

Over the way the crake goes  
No fragrant morning wind is needed,  
Nor any lacy cloud is needed.

At night when it lodges at a chestnut Shrubbery  
Where the fog is wavering, so  
It has turned out warm there like a kitchen,  
The crake drinks off as night-cap  
The lovely dews that stays on warped, fallen leaves.  
On the whitish lakeside with waves afar,  
The crake doesn't like to fall into company  
With the wild-goose who feels most at home there;  
For his compellingly plaintive story of old days  
Is hard to listen to with irrelevant responses.

Soon the crake will come to my garden,  
And leaving this biographer behind,  
Will go away as when it comes.

Translated by Ken Miyagi

いる一行がなぜか十一版だけ「白い子孫に」と改められているというのである。テキスト・クリティークがまだ充分に行われていないらしい現在のかたちの「詩集」に拠らざるを得ぬもどかしさ、はがゆさが、その表情にあふれていた。

だが平井さんの仕事を困難にしたほんとうの理由は、いったい何であったのだろう。先にあげた詩人の呪いは、どのような醜訳にも多かれ少なかれつきまわっているいわば業のようなものである。そこから直ちに「昏迷」が生じるわけのものでもないだろう。だとすると、平井さんの言う「昏迷」は、おそらくトラークルの詩そのものに由来していたに違いない。

貌がにわかには驚かしてしまい、ひとつの影絵にすぎなくなるのを感じる。ほとくの理解は、このシルエットにさえぎられてその先へは届かない。不甲斐ないことだが、事実だからいたしかたない。

そこへ至るまでのトラークルの相貌なら、ほくは未だなんとか想像することができような気がする。たとえば、その面上にあらわれる浸潤の罅。これは、トラークルが「美しい街」などの詩を書くよりもっと前、おそらく彼が現実生地にザルツブルクの美しい街をはなれたころ、すでにひろがりはじめていたに違いない。一九〇八年の秋ウィーンに着いたばかりの彼は、そとの現実から彼の内部へ容赦なく迫ってくる浸潤をありのままに見つめ、その怖しさを姉のミンナに伝えている。ちょうどバリに着いたばかりのリルケのように。しかしそれと同時に、トラークルは未だこう書くことができる――

「だが、それも過ぎざりました。今日は、この現実というまぼろしも沈んでゆき、事物たちは遠く、その声はさらに遠くかすんでいます。ほくは再び生きいきとした耳をとり戻して、自分の内部にある旋律に聴き入り、再び活気をえたほとくの眼は、あらゆる現実よりも美しい内部の形象たちを夢みています。ほ

## 日本近代文学の展開

川副国基 著

### 目次

- 近代文学の展開
- 明治・大正期の文学論争
- 作家の相貌
- 透谷から藤村へ／藤村「野の歌」について／藤村と自然主義／藤村と外国文学／島村抱月研究／自然主義と研風・潤一郎／激石について
- 激石と恋愛／東大講義時代の激石／二百十日から「坑夫」まで
- 人と文学とふるさと
- 島村抱月の田居／フランスとフランス人／箱入岬／小高根二郎氏の伊東静雄論／伊東静雄の故郷／窪田空穂「近代文学論」
- 大正文学研究会のこと
- 近代文学と短歌
- マッキンノン博士のこと
- 藤村記念堂と藤村記念館
- 馬籠と藤村記念堂／小説と藤村記念館
- 梶井基次郎「城のある町にて」
- 勝本清一郎のこと、其他

¥ 1500

明治書院

東京都千代田区神田錦町一ノ二六  
振替口座(東京)四九九一

## 在所

浅田 二三男

孫やんの鼻や  
奈良市つあんの耳や  
伝右衛門はんの目が  
歩いている  
青年団や消防団の寄りあいでも  
集団登校の田舎道でも  
鸚鵡のくちばしみたいなの  
孫やんの鼻がいる  
飛べそうで  
そのくせエンピツがはさめなかった  
奈良市つあんが耳がある  
蟹のような伝右衛門はんの目も  
………  
ひまわりが垣根ごしにたおれかかる。  
この一節は、何度試みてもゆっくりは読めない。「……が」のたたみかけが、そうすることを許さない。詩行は、個々のイメージよりもむしろただ時間の流れだけを読む者に意識させながら、三節へむかって軽快に急いでゆ

ぬものです。」  
しかし、トラクターの相貌にたいするほどの理解は、この辺でふつりととぎれてしまふ。それから先へは進めない。たとえば次のような手紙の一節を、ほくたちはどう読めばいいのだろうか——  
「だが、岩場の小径を降りていったとき、ほくを狂気がとらえた。ほくは夜空に高く悲

冬ざれの海の風が  
対話すら失はせてしまふ

きらきら きらきら  
陽は海の面に反射する  
その海に一本の筋  
水脈が突進んでゐる  
藍色の海を  
真直ぐに 真直ぐに  
藍よりもなほ青く

遠い過去の私に似て  
がむしやらの姿を  
いとほしく かなしく  
涯のうへから瞳をはなされない

くはいま我にかえっています、ほくの世界とひとつです。限らない和音にみちた、ほくのまろやかな美しい世界そのものです。」

このような手紙を書くトラクターの相貌を、ほくは、荒涼とした川岸に転がっている岩のようなものとして想い浮べてみたい気がする。その黒い岩肌は、寄せてくる波によって浸蝕され、さまざまの亀裂やふかい小孔をもっているだろう。だが波が引くたびに、これらの裂け目から思いがけぬときに澄みきった水流がふき出し、次の波がおそいかかるまで、その無数の小さな響きがごだましあうことだろう。その傍らには、川の水がひたひたと流れてゆくばかり。——いま考え直してみると、こういう勝手な表象をなんとはなしにほくが作りあげてしまったのは、平井さんの訳詩のなかでもとくに好きなもののひとつ「呪われた人びと」に負うところが大きいのかも知れない。(先日お尋ねしてみたらこの訳詩は六・七年まえに出来た由。おなじ頃、「孤独者の秋」や「ソーニャ」はすつと訳せたのに、これには難渋したとも。)

夕闇が近づくと、老婆らが泉へ出かけてゆく。栗並木の暗がりでは赤い笑いがあがる。  
店先からはパンの匂いがただよい

ついでに言えば、この訳詩からうける感銘は、トラクターがあつた彫刻にたいしてみずから「嵐の夕べ」に内在している衝動をはこっている言葉にそのまま結ばれてゆく。「だがあんなものは、ほくの形象的な手法、つまり四節にわたって散在する四個の部分的形象を打って一丸とし、ただひとつきりの印象を生むほくの詩法とは、およそ似ても似つか

## 海の断章

美堂正義

I  
くり返し くり返し波は寄せてくる  
くり返し くり返し哀しみを運んでくる  
浜辺の薄桃色の桜目よ  
それも私の手には入らなかつた

II  
少女よ  
愛を知り  
哀しみを  
人々との間に  
いつも吹いてくる

きらきら きらきら

陽は海の面に反射する  
その海に一本の筋  
水脈が突進んでゐる  
藍色の海を  
真直ぐに 真直ぐに  
藍よりもなほ青く

遠い過去の私に似て  
がむしやらの姿を  
いとほしく かなしく  
涯のうへから瞳をはなされない

鳴した。やがて銀色の指をまさぐりながら、黙った水面にかがみこんだとき、ほくは、ほくの相貌がほくを捨ててしまったのを見た。白い声がほくに死ねと言ふ。うめきながら、ひとりの少年の影がほくのうちに起きあがり、きらきら瞳をひからせてほくを見つめる。するとほくは泣きながら樹林の下に、壮大な星空のもとに崩れるのだ。」  
親友のひとりにむかって、自分の相貌が自分を捨ててしまったとつめくこのトラクターの相貌を、わたしたちはどういうものとして想像すればよいのであろうか。かつての詩法への矜持は、相貌といっしょにかれを見捨てているにちがいない。トラクターの詩は、このころから定型をはなれて自由な韻律となる。それにともなって、かつての「内なる旋律」もまったく異質なものに変りはてたことだろう。内面の旋律が、いっさいの外部を襲って、闇のなかにただひとつすじ銀色にふるえはじめたら、その縹渺とした旋律に相貌はあるのか、ないのか。もどかしい。  
これを平井さんに尋ねてみても、またいつかのように一言のもとに退けられるだけかもしれない。その時またまたお酒の席であったが、詩人における人と作品のつながりというふうな意味のことを口からすべらせたら、

# 四季復刊第一号

- 樹と少女……………丸山 薫  
 鯛・汽船……………田中 冬二  
 物語……………神保光太郎  
 セクストゥス・プロベルテウス  
 グアレリーの「消えた葡萄酒」 奥 茂一訳  
 長明の散文詩……………河盛 好藏  
 一昼夜……………小高根二郎  
 近況……………竹中 郁  
 樹のしたて……………大木 克己  
 青春の絆・廻転ドア……………阪本 越郎  
 「四季」と辰雄……………堀 多恵子  
 女らしく……………萩原 葉子  
 四季の犀星の詩のひとつ  
 室生 朝子  
 傾斜……………杉山 平一  
 波と蜩……………伊藤 桂一  
 銀河……………山岸 外史  
 渦……………塚山 勇三  
 四重奏……………小山 正孝  
 座談会 「三好達治」  
 「四季発刊について」

東京都中央区日本橋町三ノ五三  
 振替東京九一三七五番  
**潮流社**

果樹園 一四四号 昭和四十三年二月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

果樹園 一四五号 昭和四十三年三月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

# 果樹園

第145号

伊東静雄十六回忌特集

伊東静雄 (-)	石川勝之	大鉄 鍾	田中 克己
思出	内田健一	夕方と夜のうた	大村直子
英訳「曠野の歌」	伊東静賢	仲長明の散文詩	吉本青司
	宮城賢	海断片	小高根二郎
		蓮田善明とその死	美堂 正義
		新訳「ルバイヤット」	森 亮
		武州宿場考	萩本 義
		編集後記	

## 伊東静雄論

— 礼と堪へ—  
 石川勝之

孤独というものは、究極の、ぎりぎりの深さにまで達すると、ふと、明るい色彩を帯びはじめのではないか。紫陽花の花弁の冷たい青が、ふと、あたたかい赤みを帯びるように。

伊東静雄の詩にはその全期を通じて、この孤独への沈潜から生まれた明るさが感じられる。反抗的な怒号とか、絶望的な暗さとか、みじめな生活のリアルな写真とかは、静雄には無縁であった。また、生活の中に安住する

そんな生ったるい紐はないと、それきり取りつく島もなかった。しかしまさしくこの点に、平井さんの訳業の困難さが根ざしていたのではないかと、ぼくは勝手に想像している。あの「昏迷」というのは、相貌が自分を捨てたようにめくトラークルその人の、飄然とただよう影を追い求めている昏迷であったにちがいない。

「果樹園」に連載が終ったときにも、また今度の「あとがき」にも、平井さんはほくがなにか大層なことをしたみたいに書いてくださったが、こういう機会を与えられたのをさういらい、ぜひとも事の真相を明らかにして、自己釈明しておきたい。ぼくは、上に書いたとおりトラークルの一番大切なところがどうしても理解できない。しかも、平井さんには責任のようなものが重くのしかかっていることだけは承知している。だから、ぼくは勝手なことを言っていればよかった。知らぬ強みでなにを言ってもよかった。駄目なことは、あの責任や諦念のひしめきのなかで黙殺されるだけだろう。そして、事実その通りであった。その間になにかを得たのは、ぼくの方である。ことばとか、詩とか、翻訳とかについて、その都度なにかがしかのことを考えることになったのだから。ぼくはかたわらに居たことを感謝せねばならない。そして、この訳業

の完成に二ころからお祝いを言いたい。  
 (京都大学教養学部助教)

### 編集後記

十二月一日、蒲池未亡人と子さんから、歌一さんの成名は歌院歌室海一実居士である由お知らせをうけた。歌院とは故人生前の人柄を現わしてゆたかと改めて追悼した。  
 五日、西井家より、小太郎先生がヘルン教授から八雲賞として拝領した、シエンキグイッチ全集をお譲りいただいた。静雄に關連した貴重な資料として愛蔵させていた。  
 十二日、石川勝之氏から「南北」所載の拙論に關し、「彼の内の苦惱が身に伝ってくるのを覚える」旨の便りをいただいた。次号に伊東論を執筆して下さる由である。期待を願いたい。  
 十三日、近代文学館から「四季」複製版が届いた。二つの版入りの美事なものである。残部ある由だから希望者は備えられるとよい。  
 十八日、冬室書房の中島善彌氏から静雄の「わがひと」とある哀歌を複製する旨の連絡をうけた。宇都宮の小川和佑氏が認識の同者複製のため機嫌に供したのである。美事である。価額千円。限定五百部の由である。  
 二十二日、所用あつて浅野景氏にホテル・オークラでお目にかかった。前にお目にかかったのは、田中氏が上京した直後だったから、もう十年になる。足を負傷された後とて足許が少し悪かつたがさすがふる意気旺盛。近頃の若い詩人なぞ足許にも及ぶまい。  
 本号には平井俊夫氏の「トラークル詩集」誌上出版記念の意味で、平井氏の京大での先輩前田歌作氏と同僚の飛鷹節氏より貴重な一文を頂戴した。深謝申し上げる。(〇)

### 果樹園 第一四四号 (毎月一回一日発行)

昭和四十三年二月一日発行  
 池田市石橋二丁目六ノ五  
 編集者 小高根二郎  
 発行者 小高根二郎  
 大阪市東住吉区桑津町五ノ八  
 印刷所 元市印刷株式会社  
 池田市石橋二丁目六ノ五  
 発行所 果樹園社  
 定価 四十円 送料 二十円

楽天性、人生と隔絶した耽美性などにも、静雄は無縁であったと言える。  
 生 (Leben) にはふたつの生がある、とトーマス・マンは言う。死を知った生と死を知らない生と。死を知った生だけが人間を愛に導き、死を知らぬ生は、労苦を欠いた生であり単なる粗野にすぎないと言う。  
 この点から見れば、静雄の生は「死を知った生」ということができよう。事実彼ほど自己の中の死を凝視した詩人はいないのであるかろうか。静雄詩の底を流れている寂寥感とは、この自己の中の死の凝視から生まれているといってもよい。

昭和五年に発表された彼の処女作に「空の浴槽」という詩があるが、その冒頭に次のような詩句がある。

午前一時の深海のとりとめない水底に坐つて、私は、後頭部に酷薄に白塩の溶けゆくを感じてゐる。(「明暗」五年五月号)  
 これは、死の意識の体内への侵入を象徴したものであろう。後年、中村武三郎の「万象に侵入しゆく白は那辺よりかきたる。その昔の秘苑に湛へし紅熱の沼あり、今その深みに白は弄むる。わが頸肉のおくがに白が巣くふはかかるときぞ」という「白の侵入」と題する詩に對して、まるで自分の分身のような異常な親近感を寄せているのも、同じ死の意識につながるものであろう。

この死の意識は、哀歌期では、「河辺の歌」の中で次のように歌われている。  
 悔恨にすつと遠く  
 ザハザハと河は流れる  
 私に残った時間の本性ノ  
 孤独の正確さ  
 その精密な計算で  
 さかん  
 織な陽の中に  
 はやも自身をほろぼし始める  
 野朝顔の一輪を  
 私はみつめる (「コギト」九年十月月号)  
 野朝顔をみつめる静雄の目は、死を知った目であり、そのとき彼の体内に、白(死)が河の流れのようにザハザハと音たてて流れ込む

のが聞こえるようである。

伊東静雄の詩の中に、こうした死の意欲の定着を見出すことには、それほど困難を感じないであろう。「曠野の歌」「決心」「八月の石にすがりて」「墜ちし蝶」「水中花」「自然に、充分自然に」「若死」「庭の蟬」「夏の終」等の中には、死の影が色濃く流れ込んでいる。

この死への親近、接近と、それへの抵抗、反抗は、夏花期において最も著しい。詩集「夏花」の扉の「ルバイヤット」(森亮訳)からの引用そのものが、すでにこの傾向を如実に示している。

友ら去りにしこの部屋に、今夏花の新よそほひや、楽しみてさざめく我等後年、静雄はこの「夏花」を陰気な詩集と呼び、「反響」に収めるにあたって「凝視と陶酔」と改題しているのも、やはりこの詩集の死の匂いに関連することであろうが、そのことについてはまた別の機会にゆずりたい。

私はこの論の副題を「礼と堪へ(ころ)」としているが、「礼」というのは、一つの精神的生存形式であり、今ここで結論を先取りして定義すれば、静雄の体内を流れる死の意識や「くずれ」の意識を支える「意志の姿勢」であると言ってもよからう。なお別な言葉で

言えば、孤独や死を克服しての「正しさ」「勁さ」への意志の姿勢と言ってもよい。伊東静雄の詩は、この摸索の姿勢そのものの定着であり、思索そのものが詩になったものである。彼の哀歌期から春のいそぎ期にかけて交友のあった中島栄次郎は、これをたくみに「詩索そのものが詩となった」といっている。静雄詩のもつ知的性格や批評性もここに根ざしており、彼の詩の魅力の最大の要因もそこにあるといっても過言ではなからう。

江藤淳は静雄詩の堪える姿勢について、「決然たるストイシズム」という言葉をつかって次のように言っている。

「伊東静雄の、詩的資性、詩人的資性の特徴をなしているのは、一種の決然たるストイシズムであります。心の奥底に何か非常に深い悲哀感がある、現世的な何ものによっても癒されないうような、非常に深い、存在のいちばん深いところから湧いて来るような悲哀が、伊東静雄の詩の裏側にはつねにただよっている、しかしそれをそのままに歌うというのではなくて、むしろおさえておさえる、それを耐えて生きて行く自分の心を、歌って(こう)というのがわたくしの理解するところの伊東静雄の詩の特

日本詩人全集 28  
伊東静雄  
立原道造  
丸山 薫

「わがひとに与ふる哀歌」(庄野潤三解説)  
「萱草に寄す」(中村真一郎解説)  
「帆・ランプ・隴」(河盛好誠解説) 他

暗い地層を貫いてきらめき流れる伊東静雄の清冽な抒情。  
軽やかな旋律を奏でて若き日の憧憬を綴る立原道造の全詩篇。  
虚妄の現実を越えて永遠の郷愁を夢みる丸山薫の詩業  
好平の解説者を得た便利な袖珍版……

新潮社

¥ 330

大 鐵 鎚

田 中 克 己

「正月早々大鉄鎚を下した」由である事のおこりは「×××××」という雑誌名の示すやうに政治家の卵がアジビラならぬ文かいてその残りを詩人たちに書かしてゐる一二五ページ「果樹園」の薄いのにはいつも泣いてゐるが

この厚い(今の時世では)雑誌はなぜできたか  
よんでゆくうちグラグラと火の玉がたぎって

編集責任の詩人に電話かけてしまった  
そのお返事が「大鉄鎚」である  
こはいこはいおぢいさんにあたしはなり  
ましたよ  
可愛い可愛いわたしの孫たちよ

徴であります。」(「現代詩手帳」四十年八月号)また、吉田精一は「モラルがリシズムに溶かされている」(「近代詩」至文堂、昭和二十五年刊)という言葉で定義している。いずれも静雄詩の本質をたくみにとらえたことばであるが、「ストイシズム」や「モラル」という語に、私は何か明確には言えない一種の不満を感じるのである。それらの定義では、明確な形を獲得して、その形によって救われようとした静雄の姿勢がつかみきれないような気がするからである。「礼」とか「堪へ(ころ)」ということばは、それを言い得て充分というものではないが、静雄の或る時期(特に昭和十年代前半)にとって、重要な位置を占める言葉である。

「礼」という語を彼の作品中に求めると、詩では「私の孤独を」と「無題」、散文では「レーナウの一詩」がある。

私の孤独を  
私の孤独を  
一鉢の黄菊に譬えよう  
つ、ましい庭前に作られて  
位置の正しい 明るい花が  
いくつも咲く

又それを  
静かな饗宴と言はう  
美しい空気の日には  
礼に厚い貧しい人達が  
一人づつ招れて来る(「耕人」七年二月号)

無 題  
四辺がくらくらくなって来たやうな気がして、わたし達は、繁木の下を離れた。空にはしかし未だ、昼の溼しない、淡いあはれ藍色が行き渡ってゐた。女は、先刻言葉少年に見つけてゐたあやめの花をも一度、ちらと振返った

私達は徐かに柵の方へと歩いて行った。その弓場に、ひとりの少年が、額を青白ませて最後の礼射をしてゐた。矢は射られた。少年はしばらく射放した姿勢のままに、凝と、正しい礼儀で立ってゐた。

師の教への尊いかな、  
さうわたしは呟いて、女の目を見た。  
と、言ひやうのない、孤独な悲しみが  
わたしの胸に満ちるまへに、  
女の瞳に、夕方の空の明るさが、

## Song of the Wilderness

Shizuo Itoh

For the lovely day when I am to die,  
The dream of the mountain chain! Keep thy  
White snow unvanishing.  
In this wilderness of suffocating thinness,  
Passing by the fountain unknown to anybody,  
Walking past the hidden place  
Where mandarin oranges ripen,  
A flower I plant as the token;  
This landmark shall lead the horse back  
That will draw my corpse the day to come.  
Ah thus, thy noble white light will watch  
My eternal return to home,  
The fruit shining, the fountain smiling...  
My painful dream, only then at last,  
Will be at rest!

Translated by Ken Miyagi

かすかに、水のやうに揺れるのを認め  
た。(「四季」十三年六月号)

「レーナウの二詩」(「革新」十四年七月  
号)では「夕暮」というレーナウの詩をあけ  
た後、次のように書いている。

「旅路に疲れて、夏の昼間をはたこやにね  
てゐた旅人が、平和な人々の、家庭の休  
息につくたそがれの、静かな時刻に、又  
杖を手に取って旅をつづけるために、宿  
を出立つといふのである。歌詞は静穏だ  
が、その心は言はず無限放浪とでも呼び  
たい寂寥を極めてゐる。殊には、「ある  
じにあつく礼をのべ」といふ文句が気に  
入った。これには寂寥と虚無とに住する  
人間独特の静肅な鄭重さと、一種の自尊  
の気持がよく現れてゐる。」

そして文末に「今のわたしは、こんなやり、切  
れぬ詩はなるべく忘れてしまひたいと思つて  
ゐる。そしていくらか、忘れるこゝみたいな  
ものを體得出来たやうな気がしてゐる」と書  
き添えている。

まず「私の孤独を」であるが、伊東静雄は  
レーナウの詩を昭和四年頃から読んでいたよ  
うであるから、この詩にもレーナウの影響が  
あるとみてよいかもしれない。この詩で注目

すべき句は「位置の正しい明るい花」とい  
句である。この語には感傷的な響きはなく、

思索の中核から生まれたことを示すところの  
確実な手堅い響きがある。そしてこの、孤独  
な劣苦から生まれた花には、ただ「礼に厚い  
貧しい人」のみが有縁であるとした発想に  
は、すでに静雄的なものが確実な位置を占め  
つつあるのが読みとられる。「礼に厚い貧し  
い人」の内なる心までが感得できよう。「わ  
がひとに与ふる哀歌」中の詩句「私たちの内  
の勝はるる清らかさ」を連想させるものがそ  
こには秘められてゐる。静雄は大学在学中、  
作歌にもかなり凝っていたようだから、ある  
いはこの詩には、木下利玄の「牡丹花は咲き  
定まりて静かなり 花の占めたる位置のたし  
かさ」あたりの影響もあるのかも知れない。

弓場の少年を歌いこんでいる「無題」は、  
この前後に発表された詩のテーマである「夜  
と昼のあはひ」を歌った「夕の海」「稲妻」  
「金星」「夜の葦」等、一連の詩の中の二つ  
である。矢を射放した姿勢のままに「凝と正  
しい礼儀」で立っている少年を見ている静雄  
の目は、哀しいほどに盛んだ目である。詩人  
の心が「孤独な悲しみ」に満ちると同時に、  
その同じ目が、女の瞳に映っている水のように  
揺れる「空の明るさ」を見ていることは意

グリーンベルト・シリーズ

## 日本の名歌

前川 佐美雄 著

八十余歌人、約百五十首の代表的名歌  
の鑑賞を通して見る日本の抒情の流  
れ!

古代記紀歌謡から、万葉、古今、新古  
今の精華を経て、茂吉、啄木、文明等  
の近代にいたる短歌の美しいしらべを、  
秀技な鑑賞眼力でとらえた恰好の短歌  
鑑賞案内：大阪読売新聞文化欄に連載  
し好評であった「秀歌鑑賞」を時代順、  
年代順に改編されてさらに鑑賞に  
便利である。

座右に、あるいは通勤のポケットにし  
のばすに恰好な著である。

¥ 280

築摩書房

味深い。自己の中核を見つめ孤独に堪える姿勢が、究極的に何を目指しているかを示しているからだ。「死を知った生」と私が先に言ったのはこの意味である。

レーナウの詩の「あるじに厚く礼をのべ」に感じている静雄は、この孤独な旅人の心の中に自己の心を見たのであろう。

人皆の明るい灯の下での団欒、そして安らかな眠り。それを約束するたそがれ時であるにもかかわらず、あるじに厚く礼をのべて出発する旅人。「無限放浪とでも呼びたい寂寥」の中でこの鄭重さ。それは静穩の中に秘めた孤独の極限状況と呼んでもよい。実に「やり切れぬ詩」である。静雄がこの鄭重さの中に「一種の自尊の気持」を読み取っていることは重要である。世俗の安逸に対する抵抗はこの旅人の中に見ているからである。あるいは、自己の運命に対する無言の、静かではあるが強烈な、反抗精神を見ているのであろうか。とにかくこの「礼」の中には一種のレジスタンスを見ることが出来る。

こう見てくると、「礼」という語のできる以上三例ともに孤独とか寂寥とかに結びつけられていることに特徴がある。孤独に堪える姿勢であることは共通である。堪える姿勢が静雄にとって生きる姿勢の象

徴として感覚的にとらえられているのはなぜか。私は、それは静雄の内部の「くずれの意識」に根ざしているのではないかと思っ

## 思 い 出

内 田 健 一

伊東静雄の思ひ出や、その詩について書かれたものは大分読みましたが、皆夫々に興味がありました。殊に小高根さんの非常な御努力によるちみつな研究で、彼の魂の遍歴が明らかになされ、私なども始めて知ったことが多かったです。たゞ欲をいえば、そんな多くの記述の中に彼の高校時代の話が少いことが残念な気がします。考えようでは、詩人の若い時代のことは、ほんやりと人の想像に任せられてあるのがよいのかも知れません。しかし彼の詩人としての道程の上で、高校時代は重要な時期だと思われまじし、私などその頃のことが一番印象が強く、またなつかしいので、誰か書いて下さったらという気がするのです。私の印象など、大分年下で伊東の高校時代は小学から中学一、二年位でしたから、高校がどんな所かも知らず、まして彼の

## 夕方と夜のうた Ⅱ

大 村 直 子

山々はたそがれた  
野良のものらは帰る  
ひろがった田の上を  
つめたい風が吹きぬける

栗の木のの上に  
まるい月がのほり  
そして夜がおりてくる  
ああ びろうどの眠り

そのころ さめている者は  
よきことに耳かたむけ  
あたたかい涙を思ふ  
それは いつか 私らの  
にがいみのりを  
かますであらう と

## 仲 間

吉 本 青 司

こどもたちは  
りこうな狐のことも  
ずるい狸のことも知らない

でも 山に雪がふると  
こどもたちは精霊になる  
からやかに白い羽をつけ  
しばのうえであそぶ

ストーブがあかあかと燃え  
狐いろのパンがやける  
白い天のミルクを  
くちにうけてたべる

狐や狸が仲間いりしても  
こどもたちははだれも  
気づかない

心の中については知るよしもなく、外面的な印象でしかありません。それで彼をもっとよく知っていた人たちの回想記があったらと思うのですが、残念乍らその主な人はもう殆ど物故されてしまつて、今では聞くことも書いてもらうこともできないのです。その友人たちというものは、小高根さんの研究にも出てきますが、中学の同級生には、山口高校に行つて後に医者になつた大塚格さん、中学を出てから小説家を志望して上京した馬場さん、その外ありますが、この二人とも伊東より早く亡くなられました。佐賀高校の友人には「新世界のキノコ」に出てくる伊藤正雄さん、この人は後に長崎市の教育長や総務部長になりましたが、伊東の死後間もなくして亡くなられました。その外の人では、伊藤さんと共にいつも彼の話題に出た日隈昇さんとか、「新世界のキノコ」のもう一人の人物、梶原さん、それから「三いつとう」のもう一人伊藤徳則さん、その他名前をきいた人たちは今どうしておられるか、その人たちの思ひ出を聞きたいのですが、すぐできる見込みもなさそうです。それで年少の頃のたよりない私の思ひ出でも少し書いておきたいと思うのです。何十年昔のことでも、いろいろのことが目に浮びますが、一番印象が深いのは彼の友人

について話したことです。夏休みになって帰省すると、ハサミも入れない長髪の恰好で、親戚に挨拶廻りにきました。そして大人から小さい子供たちまで集つた中で高校生活の土産話をして聞かせるのでした。それは小さい我々でも夢中にさせるように面白いのです。一学期間たまった話が溢れ出すような有様で、私の家がすむと、近くの親戚でまたつきがあるのです。私など彼の弟の寿恵男君と一緒に廻つて聞いたのでした。後に彼は自分で「座談の名手」だと自慢していましたが、その頃既にその片鱗が現れていました。

話題は教室や寮、試験前の友人たちとの勉強、野球対校戦の応援など、いろんな時に友人たちの云つたりしたりした奇抜な言葉や痛快な様子、はては滑稽なぐさなどで、休暇毎に何度も聞いている中に、私たちの間では、会つたこともないその人たちが大分前からの親しい人のように生々としたイメージができ上り、彼が〇〇さんというのと、すぐその人が目の前に浮んでくるのでした。こういっただけではまだ彼の話の影響力の大きさはお分かりにならないかも知れません。その当時から聞いた話は何十年後の今日まで、生々と脳裡に残り、中には彼が話した友人の言葉の一つ



一つまで覚えて位なのです。或る点では自分の高校時代よりなつかしいところがあるのです。そんなに印象が強かったのは、私が小さくて、始めて感じた青春というものに感動したのか、それとも彼の話の魔力に魅せられたのでしょうか。全くそのクラスには、今考えても個性の強い人たちが多かったように、彼らは大正末期の平和な学生生活の中で悠々と暮らした型破りの、或は老成した快男児たちだったようです。そういう人間の魅力が大きかったことも確かです。また彼の話術は、お会いになった方はご存知のように、辛辣で、皮肉で、ユーモアがあって、観察が鋭くてといった端倪すべからざるものがあり、彼に向っているとき誰でも緊張せざるをえなかったのですが、その友人たちの話になると、愉快で楽しいものでした。彼は友人をよぶのに、〇〇さんが、と誰でもさん付でいうのです。いくら自分が若くても同級生なのです。私にはユーモアたっぷり話していても、ほんとはその人たちに大変敬意と友情を持っていただんだなと思います。それはまた彼らと暮らしている自分の生活を大切にす気持だったかも知れません。そういう友人たちの間で彼がどんな位置を占めていたのか分りませんが、たゞ試験前には寮でこれらの豪傑

たちの先生だったようですが、自らをロマンチストと称し、そういう自負を持って過していたようです。彼は中学、高校時代は美術家のように思われているようですが、私はもう中学時代から文学少年らしく、或はロマンチストとして振舞っていたように思われます。それは外から見た私のこの印象記からでもお気付になると思います。いつか高校の時の自分の写真を見せながら「夢みるような目をしているだろう」と自讃したことがありますが、そのように夢多き生活だったかも知れませんが、しかし必ずしも楽しいばかりの生活でもなかったでしょう。卒業アルバムに自分のことを「イッヒ ビン アイザム」と書いているようにやはり悩み多き青春だったのです。そういえばその表情にはもう青年のことも健康な明るさや楽しさはなく、蒼黒いといった顔色をして、ギョロリとした目でにやりと笑ったり、まことに「傷ついた青春」といった感じでした。多くの人が書いておられるように、彼の現実を見る目の確かなことと、人心の機微をとらえることの鋭さは驚嘆すべき程でしたが、それもその頃から既にすぐれていました。そのような目でたえず世の中や人間をみていたのですから、孤独の寂しさも人一倍激しく感じたことでしょう。そんな

### 杉山平一詩集

## 声を限りに

#### 夜学生以後

位置/声/たましい/下降/退屈/舞す/潔白/眼/種子/孤独者/船出/土曜の夕方/洗濯物/遅刻者/花火/あいびき/目をつぶって/傾斜/憩い/五分間/ジャズ/新しい世界へ/情熱/日/轟/よもぎ摘み/窓/梅の花/夜/一家/閉された部屋/会話/夜更けの坂/階段/相対性原理/風鈴/無題/市電/踏切/夜の市電/走る/急行電車/人/季節/夕方のプラットフォーム

夜学生抄

機械/帽子/橋の上/ピラミッド/黒板/硝子/途上/夜/ストーブ/曇天/建築/ロマン派/ラッシュアワー/夜学生/はたらく娘/町にて/徽章/桜/運送/月へ/卒業に/孤独/旗/秋晴/鉄道/仕事場/別れ/電話/写真師/速力/感傷/について

¥ 900

## 思潮社

時、酒井先生のお宅にも度々伺うようになったのでしたが、まだその頃は先生のお名前

を時々聞く程度で詳しいことは分りませんでした。

## 長明の散文詩

小高根 二郎

### 仙人になった稚子

奈良の松室という所に僧がおった。役僧にわざとならなかつたが、徳があつたかしてあちこちからはやされた。彼には大変可愛いがってた稚子があつた。まだ幼いのに朝夕となく経を愛誦した。「似合わん。幼いときには幼いときの学問があるもんじや」と、彼は諷めた。いったんいうことをきいたかに見えたが、しばらくするとまたぞろ経を誦んで倦まなかつた。志がいかにも深そうなので、もう誰もなんともいわなかつた。十四、五才ばかりになつた頃、急に何処へいったか行方がしれなくなつた。彼は吃驚して心あたりをくまなく捜したが行方は香と知れなかつた。「化け物にでもさらわれたらどう」といって、泣く泣く供養をしていた。

数ヶ月たってからのことである。同じ寺の法師が奥山へ薪を探りに入った。すると

樹の上から経を誦む声がするではないか……。おかしいと思つて梢を窺うと、なんと行方不明になつたあの稚子であつた。あきれかえつた法師は、「どうしてそんな鳴気なことをしてるのか？ 老師はきつう歎いておいでるのに」といえば、「そのことです。一度お断りしておかねば……と思つておりました。なにかと便が悪くてお伺いしませんでした。今あなたに会えて幸いです。すぐ老師にここに越しくださるよう、お伝えください」というので、走り帰つてその由を伝えた。吃驚してすつ跳んできた彼に向つて、稚子がいうには、「私はとうとう説誦仙人になつてしまつたのです。日頃おしたわしく思いながら、このような者になりました。いまさらお尋ねするにもだてがなく、又人の住みます界隈はなんとなし汚らわしく悪臭にみちているように、よう堪えられそうにもありません。心にかげながら、つい失礼をしておりまして。しかし今日お目にかかれたとは、なんとこの幸運でございませう」と、共に涙を流して語る話は尽きなかつた。いよいよ別れの時に

故郷の諫早の町では夏休みになると、帰郷した学生たち、各地の大学や高校、専門学校

なつて稚子がいつた。「この三月十八日に竹生鳴で仙人たちの音楽会がございます。私は琵琶の受持ちでございませうが、実はその琵琶をまだ探しあてておりませう。ついでにはお手許の名器をお貸しくださるわけにはいきませうまいか？」「お安し御用だ。どこへ持参させよう？」と彼が訊ねると、「ここにいただきます」ということで別れた。やがて琵琶を法師に届けさせたが、もう稚子の影も形もなく、やむなく樹の根元に置いて帰つた。

さて、音楽会の前日に彼は竹生鳴に参詣をしたが、翌十八日の明け方のこと、なんともいへぬ絶妙な音楽が遙かに聞こえてきた。雲に響き風に従つて、この世の音色ならすめだかつたので、つい涙をこぼして聞き惚れていたが、ようやく楽隊が近付いたと思つと、はた！と楽の音がと絶えた。と、思つていると、縁に何か物を置く音がした。夜が明けてから確かめると、まさしく貸した琵琶であつた。

注・これは鴨長明「飛心抄」に拠つた。原題は「松室童子成仙傳」である。

に行っている学生たちが会をつくり、その主催で、弁論会や、運動会、懇親会を開くのが例になっていました。その時は小さい田舎町を都会的で知的な青春の雰囲気であらったのですが、若い中学生たちは好奇と憧れの目をもってそれらの先輩たちを眺めたのです。伊東もその役員をずっとしていたのですが、彼の姿を弁論会の壇上にも、懇親会の壇上にも、まして運動会場にも一度も見たことはありませんので先輩たちの目にもとまらなかつたでしょう。晴れがましいことのきらいな彼を御存じの方はそれはそうだろうとお思ひになるでしょう。たゞ或るとき、会場になっている中学の校庭（彼の母校の大村中学でなく、後にできた諫早中学）の松の大木の下で、人がぞろぞろ歩いてる中に一人立っていた彼の姿を妙にはっきり覚えています。高校の夏帽子である朱色のリボン長く垂らした鏝の広い麦稈帽をかぶり、霜降りの小倉の夏服をきて、白い鼻緒の杉下駄をはいていました。髪は例のような長髪で、蒼黒い顔をして無精ひげを生やし、眼光だけは鋭く人を射るような、つまり後年の写真と変らない風貌をして立っていたのです。またその頃の或る晩、大塚さん、馬場さんと三人、三人とも異様ともいえる長髪、浴衣の着流して諫早の本通り

## 海

美堂正義

月が海を渡つていく  
青白い光  
昼間の藍色の海を歩いていく  
山を照らし  
湖を明るくし  
遠い国から旅をしてきた  
月が いまこの海の上を  
ゆつくりと足音もしないで  
過ぎてゆく

悲哀と歎息

を濁歩！全く濁歩しているのに出会ったときのこととはっきり覚えています。それから伊東の家の二階の城山の見える縁側で、帰郷している友人たちと談笑していた様子もよく思い出します。伊東はその縁から外に向つてよく寮歌など歌つたのですが、低い声で感情をこめた彼流の歌い方で、それは後に自作の詩や萩原明太郎の詩をよく朗詠してきかせたのに似ていました。

苦悩と汚辱  
奇妙な精神のままに  
刻み込まれた人間の生き方  
ひとのうへに遺つた投影  
男とはなんだらう  
女とはなんだらう  
愛とは  
人間とは  
この海に對つて  
いつもたづねてみるのだが  
ただむなしく  
答へは返つて来ない

それから数年後、私たちが高校受験の年令になって、弟の寿恵男君と一緒に佐賀高校を受験した時、伊東がついて来てくれました。そして二人とも合格して入学するときは、大塚さんへ帰るついでで、また佐賀に立寄りました。その時、お世話になった高校の先生や知人を訪問したりしましたが、その二度とも暇さえあれば、私たち二人を連れ出して佐賀の町を散歩しました。彼は高校時代よく散歩し

たようですが、その時も老櫓の茂る堀端や、田圃の間の道など歩きながらよく寮歌を歌いました。私たちが入室した時、田圃の中に立つ寮の二階の窓から校庭やその向うの校舎を黙って眺めていました。その時は気がつかなくなつたのですが、恐らく過ぎ去つた青春の日の思ひ出に胸をしめつけられていたのでは

## 断片

浅野 晃

1 到る処でおれは殺された  
おれくらの幾度も殺された奴が他にあるか

2 おれは赤道でも死んできた

3 ステツプのもつと先でも死んできた

4 おれを不死身と思ふでない  
何へんでも殺されてきただけだ

5 神の子なんかと間違へないでくれ  
おれはよみ返つたりはしなかつた

う。彼は京都で、佐賀の時のように心が充実しないという意味のことを書いていますが、その書き方は佐賀の時代を黄金時代のように考へていると私には感じられたのです。彼は高校時代にはあまりまだ文学活動はしていないようです。短歌をいくつか校友会雑誌に出した程度だと思ひます。小品を数編書

6 ふんどしで首をしめられるのもいや  
十字架にかけられるのもまつびら

7 百歩蛇に咬まれた勢ひで  
竹槍部隊がはだしで行く

8 それほど喧嘩がしたいのなら  
共倒れになるまでやらうぢやないか

9 おれの眼は遠い沖を見る  
白い花が空たかく沈んでゆく

10 たかが踊りの理屈がなんだ  
距離や時間のことなど言ふな

奇蹟が生れるとしたら それは  
耕された野の師父からだ

## 蓮田善明とその死(四十七)

小高根 二郎

以上は幼い私の眼に映じた高校時代の彼の姿で、外面的で推測が多く、たよりないものですが、こんなに誠実に、真摯に、全身的に過した彼の高校時代は詩は作らなくとも、詩人としてカオスの時代ともいふべきで、充分にその資質を培つた重要な時期ではなかつたかと、詩は分らないながら、私なりにそう考へるのです。

川辺でサザレ石に執り憑かれた陶酔……まさにそれと同じ陶酔に蓮田は浸っていた。どこからか横笛の音がしている。いや琴の清振きかもしれない。それとも松籟の錯覚かもしれない。茫々と霞んで見えるのは他でもない、明石の海なのだ。模稜とした沖の暗みに、淡路島が潜んでいる。十三夜の月影に誘われて、誰か向うからやってくる。それは二人だ。一人は紛れもなく落人の源氏。一人は供の惟光（これみつ）だ。共に直衣姿だ。都なら牛車というところである。ここでも馬と

いのが尋常であろう。かちであるところから推すとよほどのおしのびなのだ。噂に聞いた明石入道の娘の館へ通う魂胆に相違ない。それにしても惟光の他に警固の者を従えぬとはうかつである。どど——ん。遠くの空に響きあがって黄色い流星が尾を曳いて消えた。それに呼応して、さらに遠い空で、どど——んと音がすると、同じ色の星が流れた。これは風流な火花ではない。曳光弾だ。敵同志が進出位置を示しあつて合図なのだ。それに、山麓の方でパチ！パチ！パチ！という小銃の攪乱射撃も起つた。最前線の日常風景だ。それにしても危険である。即刻、源氏の君にはお引きとり願はずばなるまい。蓮田は近付いてくる主従に忠告をしようと身構えていると、それは歩哨交替の二人の兵の影だったのだ。

それにしても最前線の陣地であつて源氏に敗退しておつた蓮田は、内地掃蕩の内命を受ける口惜しくてならなかつたという。職業軍人ならとにかく、応召軍人としてはいささか異常な心理・心境といわねばなるまい。つまり、蠟燭の光から電燈の下へ戻るとは、古典からの別離であつたからに相違ない。均衡した光芒とルックスより、ときに揺らめき息づく不確かなそれの方が、源氏が身近かに

感觸されたからであろう。

先に蓮田はやがて迫っている第二次応召の進駐地スムバ島を予感しただろう……と、筆者は妄言をしたが、佐渡ヶ島に七百年前に没し給うた順徳院を回想していることも、同じ島というものにかかわる思いから、待ちうけている運命に因縁しているといえ、妄に妄を重ねることにならうか？

蓮田はさらに十二月八日の開戦一周年に關連し國文学者としての覚悟をひれきしている。「まことをせむるものは、その地に足をすま難く、一步自然に進む理なり」。これは「三冊子」の一つ「赤双紙」が伝える芭蕉の言葉である。例の有名な不易流行論の解説なのだ。この言葉の後に「心の色うるはしからざれば外に言葉を工む。是則常に誠を勤めざる心の俗也。誠を勉るといふは、風雅に古人の心を探り、近くは師の心をよく知るべし。その心を探らざれば、たどるに誠の道なし」という言葉がある。蓮田はこの前後の言葉を關連づけて伝統尊重を説いているのだ。つまり、心が美しくない者は言葉を飾る。誠を求めるつもりがないので、自然に心が墮落するため、外見を飾らざるをえないのだ。誠を求めるというのは、古人の心を探り、近い師の心をよく学び知ることだ。この心の系譜を知

らなくては、辿るべき誠の道が判らぬではないか。従つて誠を求める者は、伝統を知るがゆえに停滞することがなく、目先が拓けて見えるので自然に歩を進めることになる。不易を真に知る者、流行も自ら知る……という論理である。この論理を「國文学者として私は心に据ゑたい」と蓮田は「後記」でいっているのだ。

月光に立ち濡れながら南太平洋戦の一進一退に一喜一憂していた蓮田は、はからずも「後記」に布石された島影に關連して、この「地に足をすま難く、一步自然に歩む理」さながらに、運命の島の方へ一步……足を据えたと思われぬこともあるまい。

昭和十八年「文芸文化」一月号には、蓮田は「迎年言志」と題して単なる編集言しか書いていない。その蓮田に代つたように、三島由紀夫は巻頭に「寿」と題して

松の木かげに立ちよれば  
千とせの緑は身にしめども  
松が枝かざしにさしつれば  
春の雪こそ降りかゝれ

という「梁塵口伝集」の作品から賀の境涯を論じている。この春の雪を歌つた今様は、か

### 新訳 ルバイヤット (六)

—オーマー・カイヤムの四行詩—

#### 森 亮

##### 第四十一歌

わたしは物の有る無しは尺と定規でさだめ  
たし、  
人の世の浮き沈みを量る事なら素手でやつ  
てのけた。

でも、知りたいとひとえにねがったもの  
うち  
深く達したのはお酒ぐらいかもしれない。

##### 第四十二歌

つい先頃、居酒屋の開いた戸口から  
薄暗がりにまぎれてこの世ならぬ神々しい  
姿が

わたしのそばに寄つて来た、肩に小瓶を載  
せて。  
飲めと言われて飲んでみたら、紛う方なき  
葡萄酒の味。

##### 第四十三歌

飽かずいさかひをつづけるかの七十二示を

絶対の論理をもつて黙らせるのがお酒。  
この腕たしかな錬金術師はえならぬ匂いと味  
で

##### 第四十四歌

人生の鉛をあつという間に黄金に変える。  
酒というものはまことに武勲輝くマームード  
王、  
彼が昔、か黒い異端の衆徒をなぎ倒したよう  
に、

##### 第四十五歌

賢い人たちには議論をさせておけがよい。  
三千世界のもめ事は勝手にもめさせておけ。  
わたしのようにながやがや騒ぎの片隅に身を置  
いて、  
あなたをからかう者に遣り返してやれよ。

##### 第四十六歌

うちとそと、うえした左右を見てあれば、  
この世はまこと不思議な走馬燈、  
太陽というともしを納めた箱に仕組まれ、  
その火の回りをわたしたち幻の姿が往き戻り  
する。

##### 第四十七歌

あなたが飲む酒も、あなたが触れるくちび  
るも  
すべての物のはてにある「無」に行き着くの  
なら、  
思つてもごらん、生きる身ながら今のあな  
たは  
しまいにほそなる空の空にはかならない  
と。

##### 第四十八歌

水のはとりの花園に薔薇が咲きつづく今、  
老いたるカイヤムと酌み交わせよ、紅に輝  
く葡萄酒を。  
天の使いがどすぐらい酒を勧めに近づくと  
き、  
あなたはそれを受けて、ためらつてはなら  
ぬ。

##### 第四十九歌

昼と夜とが交互に並びひしめく盤の上で  
運命が人間を駒にして将棋を染しむ。  
彼はあちらこちらへ駒を動かし、玉手で詰  
め、  
たおした駒は一つずつ小箱の中に仕舞い込  
む。

つて由紀夫の静雄挑戦に関して筆者がとりあげた静雄の「春の雪」へみさきぎにふるはるの雪の原典をあばいて見せたようなものである。

その当の静雄が、この号に「淀の河辺」を発表しているが、これまた先の蓮田の順徳天皇七百年忌にかかわる水無瀬宮への遠足の所産であることを思うと、由紀夫・静雄・善明はまさにニイチエ的な運命の円環 (Kreis) ないし輪環 (Ring) のなかにある。

### 淀の河辺

伊東 静雄

秋は来て夏過ぎがての  
つよき陽の水のひかりに遊びてし  
大淀のほとりのひと日 その日わが  
君と見しもの なべて忘れず

「ことかか ふうたつの岸の  
高草に 風は立てれど  
川波の しろきもあらず  
かがよへる 雲のすがたを  
水深く ひたす流は  
ただ黙し 疾く逝きにしか

その日しも 水を掬びて多むひとに

言はでやみける わが思  
逝きにしは月日のみにて  
大淀の河辺はなどかわれの忘れむ

この詩は昨年の九月二十四日、教え子だった九大生庄野潤三を伴っての遠足に発想を得たものだった。その状況は「文芸文化」同人の池田勉に詳細：手紙でしらせていた。

「明日の祭日には、水無瀬や交野にゆく」とにきめ、いまおどろの下をよんだところ  
です。明日は文学の方のお弟子さんの大学  
生と一緒に、淀川のところウキスキーを  
のむ用意があるので、たのしみです。」

「昨日は水無瀬に行きました。橋本の遊女は、あそこが遊廓だけの町なので人に気がねなき態度でゆったりしてました。それに、家の下の流れや、二階屋の高さの土堤の夏草など情趣がありました。淀の渡しはこのごろ六銭、水無瀬神宮で宝物拝観したら、うす茶とお菓子出てい、気持、その書庫には保田君の著も並んでました、境内でべんとうたべ、ウキスキーのんでねたら、二時間もぐうぐうねてしまひました。七草の天井見ましたか。今年の十月は順徳院六百年祭の由」

この伊東がいう順徳院六百年は蓮田の七百

## 武州宿場考

萩本 家義

「武州百子宿、江戸より四里半。村内川越街道の入口にあり。」そんな行文が古書に見えるが、村が町にかわり、宿場のおもかげをしるばせるのは、もはや、この店だ。

旧道の曲角で、道にのそんだ戸口には、いまだに古い腰高障子。それをあけて中へ入ると、昔のままの土間の奥に、縁台みたいなテーブルと腰かけ……。それでも客がたてこんだ時の用意に、土間からすぐにあがれる座敷もあって、使い古した茶ぶ台が置いてある。

店のあるじは、もう六十すぎの老婆だった。その老婆のほかに手つだいの近所のみさんが一人。味のよい手打ちうどんが通っている割に、少ない人手だが、売れるだけ売って品が切れると、時刻にかまわず店をしめてしまふ気楽さだ。

それにもまして珍らしいのは、戸口近くの片隅にある内井戸。町外れの崖に湧く泉から引いた清水がみちあふれて、下の水ために流れ落ち、日夜、さわやかな水音が絶えなかった。水ためは食器の洗い場も兼ねていて、皿や小皿やどんぶりが重なり合って、底に沈んでいたりした。

垢のついたのれんを境に、土間と隣り合った勝手もとから運ばれてくるうどんは、かけうどん、狐うどん。それから、いかの足や野菜の揚げ物を入れた天ぷらうどん。頼めば酒も飲ませてくれるが、酒は土間の腰かけよりも、小さな池のある裏庭の前にして、座敷の方で飲むのがよろしい。

「この宿、天正の末より置きしと見ゆ。人家、軒を並べて立てり。毎月、五、十の日を以て市をなす。」この店も古くは、旅人相手の茶店だったにちがいない。ことによると、この店なのかも知れない。あの小林一茶が、文化五年、帰郷の道すがら、昼食をとったという店は――。

## 四季復刊第一号

- 樹と少女……………丸山 薫
- 鯛・汽船……………田中 冬二
- 物 語……………神保光太郎
- セクストクス・プロベルティウス
- ヴァレリーの「消えた葡萄酒」……………呉 茂一訳
- 長明の散文詩……………河盛 好蔵
- 一昼夜……………小高根二郎
- 近 況……………竹中 郁
- 樹のしたで……………大木 克己
- 青春の絆・廻転ドア……………阪本 越郎
- 「四季」と辰雄……………堀 多恵子
- 女らしく……………萩原 葉子
- 四季の犀星の詩のひとつ……………室生 朝子
- 傾 斜……………杉山 平一
- 波と蜩……………伊藤 桂一
- 銀 河……………山岸 外史
- 渦……………塚山 勇三
- 四重奏……………小山 正孝
- 残部あり

¥350円  
70円

東京都中央区日本橋兜町三ノ五三  
振替東京九一三七五番

潮流社

年と二世紀の相違がある。伊東の誤である。彼は一世紀ぐらいは頓着していない。しかし遠足に先立って「増鏡」第一章「おどろの下」を読んで心の準備はしている。又、水無瀬宮の書庫に保田与重郎の「後鳥羽院」を発見して、思い出を新たにしたのであろう。保田の説くところは、へわれこそは新島もりよおきの海のあらかみ風ころろしてふけの院の至尊調が、丈夫ぶりの源流として芭蕉に回帰し、さらに維新の志士達に国風として伝わるという血統の回想であった。伊東は「淀の河辺」で「われ」と「君」との交情を主題にしているが、これは伊東と庄野の間のそれと見るよりも、静雄と水無瀬宮に合祀されている後鳥羽院ないし順徳院との間のそれとみるべきであらう。後鳥羽院の八おく山のおどろの下もふみわけて道ある世そと人にしらせむ。蓮田が三調四調千調してもなお足りぬとする八百歌や古き軒端のしのぶにもなほ余りある昔なりけり。このおどろの下の道も、軒端のしのぶ草でもなお量りきれぬ昔も、共に埋もれ果てて誰かえりみぬ伝統と系譜の比喩である。その伝統と系譜を、伊東は八かがよへる雲のすがたを水深くひたす流と歌って、後鳥羽・順徳両院の悲願に答えたのだ……と見るべきであらう。

四季第2号 (三月下旬刊)

羅馬哀歌... 吳茂一訳
冬支度・他二篇... 杉山平一
目撃者... 大木実
詩と小説の間... 田中正孝
流を測る... 伊藤桂一
音・他一篇... 塚山勇三
長明の散文詩... 小高根二郎
春宵雑話(対談)...

一月一日、旧暦三十日に拙宅の増築工事が完成したの
念願だった書斎の壁面作りつきの書棚もできて、年来の
部屋を蚕食していた本を一ヶ所に收容したのだ。
参考の本が必要になるつど、各部屋をガサゴソと探して題
り、家族の安眠を妨げない。その苦情から免責されるこ
号を越えた拙誌のバックナンバーだ。ガラクタと同屋とい
毎年卒論の主題がまるまる頃になると僕は幾度か憂鬱に襲わ
れていた。地方の大学生から必ず資料としてバックナンバ
に要請されるから、申し訳ないことだが中二階のバック
ナンバーの山を思うと、うれいような悲しいような気が
た。その申訳なきからもこれで放棄されることとなつ
一月五日、「ポリタイプ」創刊号をいただいた。執筆者
保田与重郎、富士正晴、浅野芳賀、横一雄、E・T
十馬調としてはこれで結構調和している。要は薄くてもい
い永く続くことである。
一月十二日、会員である静岡大の学生大久保敏明君から
卒論「伊東静雄」を無事提出した旨連絡があった。愛知県
下の高校に赴任することも決まっている由で今後伊東研究
を続けるという...、うれしいことである。
一月十三、四日、会員である大阪女子大学生の辻本暢子
に認め、各号の残りを包装して書棚に整理してもらった。
九二日を要し作業が終わった時は彼女の咽喉がカラカラに
かっていた。お蔭で前述した僕の宿願が果たされた。深謝申し
上げる。
一月十九日、小島吉雄氏から福井についていた由で遅い
賀状をいただいた。A嬢の書を床にかけ終え書かずす
た。その歌で思い出したが、福井の城南緑町は妙歌寺にあ
る晴童先生の娘の墓である。戦災に見舞われたが「智
遊童女霊」は無事であった。ただ八かしのみのひりは「智
遊童女霊」は雪のなまらべて交も...ひとくち割れていた。
今冬の北陸は特に雪が多い。智遊童女霊とこの悼歌がいた
わしくてならぬ。
一月二十六日、福地邦樹君と久しぶりに元市印刷で出会
つて一四四号の校正をした。このところ多忙であったた
めに、初校と三校はもっぱら福地君にお預けしていたから

編集後記

複製版「四季」

★全八十三冊原寸大、布装映入
★頒価参万八千五百円(別に送料五〇〇円)
★三百部限定

東京都目黒区駒場町八六一
日本近代文学館事務局

果樹園 第一四五号(毎月一回一日発行)

昭和四十三年三月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集者 小高根二郎
大坂市東住吉区桑津町五ノ八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所 果樹園社
定価 四十円 送料 二十円

果樹園

第146号

蓮田善明とその死 小高根二郎
市 場 福地邦樹
田中克己

意味 吉本青司
伊東静雄論(二) 石川勝之
新訳「ルバイヤット」(七) 森 亮
英訳「野の極」 伊東静雄
宮城 賢

に雪が積ってゐるやうに見えたので、起
て窓に進んでみると、今冬初めての雪らし
い雪が夜の中に積ってゐるのであった。そ
れは美しい静かな眺めであった。清めの雪
だと話し合ひ、若い人に暫く後を頼んで、
私もは庭に下りて行った。校庭の雪を一
巡りして帰って洗面し、拍手奉拝して室に
戻り開場の準備をしてゐると、早々図書館
の土井氏が真福寺本を入れた鞆を掲げて来
られた。そこで陳列前にかねくは是非見た
いと思つてゐた事を立合の上で調べさせて
もらった。

蓮田善明とその死(四十八)

小高根 二郎

一月三十・三十一日の両日、古事記撰録一
二〇〇年を記念して、東大講堂で「古事記
展」が開催されたが、蓮田は文学報国会の委
員として立会った。もとも「古事記」は蓮
田の国文学研究の出発点であったので、「言
霊のさきはひをさながらに招き致すべき年」
(昭和十八年「文芸」)と自ら高揚し昂奮したので
ある。

「一月三十、三十一両日帝大講堂で開かれ
た古事記展覧会には、役員の一員としてあ
つたため、三十日の夜は会場で警備に
夜を明したりもして、殊に思ひ出深いもの

があった。陳列に夜を徹した石井氏等に代
つて今夜は藤森、高崎氏及び文学報国会の
若い人と四人で、殆どまどろむ暇もなく、
兎角しつ、夜を明したのであった。特別の
貴重本はすべて夜間は図書館に運んであ
つたが、半数以上は陳列のまゝになってゐる
ので、雑談を交してゐても一刻も心はゆる
せなかつた。しかしこの戦争さ中に古事記
撰録一千二百三十年を記念して開かれ且つ
貴重文献の殆どすべてをこれだけ網羅した
展覧会は恐らくは今後開かれまいと思は
れるこの催しに、かうやって守りについて
ゐるといふことは他の人の味はひ知ること
のできない喜びであつた。

それは中巻にある四葉の貼紙のことであ
る。もう十年前になるが、私も同人四人
で出した「国文学試験」の創刊号に、私は
「真福寺本古事記書写の研究」といふ百二
十枚ばかりの論文を書いたが、私は古典保
存会のコロタイプ複製本で研究して、本文
に關し三人の筆がこの書写に与つてゐるこ
とを検知し、賢諭は或る人(三筆の中の一人)
の依幅に依つてこの書写を為したもので
あるとの推定を種々の徴証によつて立て
たのである。(詳しくは何れ近く刊行する
本に補訂再録する筈)そして賢諭以外にも
一人手伝つたらしいそれが四葉の貼紙の中
の第一葉であつた。他の三葉はその依幅者

の筆で、賢瑜筆とは別である。然るにこの四葉を、複製本の解説をされた山田孝雄博士も、又書入の研究をされた石井庄司氏も、同紙同筆として居られるのである。私は明らかに第一葉の筆は異ると見、或は紙も異なるのではないかと思つたが、複製本で明らかにし難く問題として残しておいたのである。私はこの最古の写本の書写については絶えず念頭を去り難く是非一度実見して知りたいと望んでゐたので、それを調べさせてもらったのである。時間の関係などで石井氏にも立会ってもらへなかつたのは残念であつたが、私は、そして立合つた土井、高崎氏、及び久松博士も、第一葉の筆が明らかに異筆であること、及び紙質が異なることを認められた。急いだから第四葉を見落したのは残念であつたが、他の三葉は一葉毎にさへ異つてゐると認められた。私は第一葉と第三葉はかなり似た紙だとも思つたが、それも異ると認める人の方が多かつた。(「文芸文化」三月号、「古事記展」)

余白を以てこれだけをしるし少々報告とする。」

ある安田講堂の警備に當つたのである。晏家大山の砲座どころではない、激戦を繰り返している南太平洋の要塞を守つてゐるような緊迫感で、身が包まれていたであらう。いや、いや、まさに神國の宝庫を守護してゐるような責任のある選ばれた光栄で、胸の鼓動がいくぶん高鳴つてゐたに相違ない。雑談を交しながらも、時に燃えた眼を周囲の闇へ放つて、見えない敵の所在を窺つただろう。その闇がだんだんと白んでくると、いつのまにやら降り込んでいた初雪……。「これは清めの雪だ！」と、蓮田は藤森・高崎をうながして校庭を一巡すると、宮城に向つて拍手奉拝をしたのである。そこに司書であらう土井某が国宝・真福寺古写本を鞆に提げて会場に現れた。蓮田の感激と歓喜はまさにこの瞬間に極まつたといつていい。なぜならその「真福寺本古事記書写の研究」こそが、蓮田の処女作だからである。この論文は清水文雄の「和泉式部正集の形態に関する研究」、栗山理一の「中世文学の一観点」、池田勉「源氏物語の背景」論と共に「国文学試論」第一輯に収録し、昭和八年九月に発行してゐた。蓮田が広島文理大二回生の時である。

論点は書写本上・中・下の三巻中の中巻にある四葉の貼紙に関する考証である。南北朝の頃、名古屋の真福寺に在任した青年僧賢瑜が誰かの依頼で筆写した古事記。その貼紙四葉の中の第一葉は他の三葉とは違つてゐるといふのが蓮田の説である。それに對し山田孝雄博士は「形態の一般的解説」で四葉は同紙同筆だと論じていた。展覧を主管したらしいお茶水高等師範の石井庄司も「書入の研究」で山田博士と同じく同紙同筆論だ。この兩人は原書に接してそう論じてゐるのであらうが、蓮田は山田博士が解説してゐる古典保存会複製本であるコロタイプ版で異説を立ててゐるのである。まさに彼岸に近い自信といつていい。しかも、この展覧会を機に、異説者石井と対決を待ち構えていたような気迫さえ感じられる。武蔵に對する小次郎のそれである。が、残念ながら陳列を主管した彼は徹夜明けで交替していたので、あいまみえる好機を逸したのである。やむをえず蓮田は居合せた土井司書・高崎正秀、早々と来場した東大の久松澄一博士の立合いで原書を検分したのである。その結果は同紙同筆という山田・石井説とも違つてゐた。又、一葉異筆の蓮田説とも違つてゐた。蓮田の論述はいささか明確ではないが、三葉異紙異筆説が今日の多数説のようである。十年前に蓮田は「私の遂に敗けるであらう困難と破綻とは他日熟達の眼識

者と、科学的方法とによって訂正されることをおもう」といつていたから、当日久松博士を混えた結論が、蓮田説と違つてゐたことに異議はなかつたであらう。ただ山田・石井説

が当初の蓮田の鑑識どおり正當でないことを再確認するだけでよかつたのである。「余白を以てこれだけをしるし少々報告とする」といふ結論には、その報告というより、むしろ

## 市場

福地邦樹

早朝の市場は  
次々に荷物が入ってくる  
緑色のビニールに包まれて  
鮮度をかくした野菜の山  
牛か豚かの足を  
むごたらしく積んだトラック  
青や赤の魚は一樣に口をあけて  
静かな合唱をしながら  
運びこまれる  
その作業は毎朝根気よく続けられて  
まるで市場は  
巨人の食堂に通ずる厨房のようだ  
そして十時すぎになると  
女たちが  
小さな買い物籠をさげて集まつてくる

蟻の群れのように

ぞくぞくと集まつてくる

そして肉の一片や野菜の一片を

魚を二三枚ずつ

といった具合に選びはじめ

市場はキラキラと

色どりに満ち匂いに満ち

女の蟻たちはその中をせわしそうに

うろつきまわる

それは喜劇でも悲劇でもなく

言つてみれば

楽しいスポーツのようだ

そして女たちはみな

ひと試合のあとのように

いくらかの昂奮と

さらりとした満足を経て

小さな買い物籠を満たして

市場を出て行く

### 「 勇進の古道

神風の 伊勢の海の 大石に 這ひ廻る  
ふ細螺の い這ひ廻り うちてし止まむ  
みつみつし 久米の子等が 粟生には  
葦一本 其根が本 其根芽繁ぎて うち  
てし止まむ

みつみつし 久米の子等が 垣下に 植  
ゑし置 口疼く 我は忘れじ うちてし  
止まむ —— 古事記、神武天皇記

今年の戦ひに於て、いくさびとも、うたよみ文つくる者も、さやかに定めねばならぬことが、少くとも三つある。戦ひ討ち貫く雄ごころ、妙な人道主義を清くはらひ去つて、あたま余すことなくゆるさず討つ鋭心、そして「うちてしやまむ」と詠み入れ

だけでなく、右の諸歌のやうに、さかんなるかゝり、なすらへの詞、枕詞などさき起つてよみいたる神韻の発想を受けて言立つること。これ大やまと国の勇進の古道である。神武の古道である。」

これは神武天皇作の軍歌である。兄イツセノ命が戦傷死をしたトミノナガスネヒコとの一戦に、軍兵の士気を鼓舞するために歌われた軍歌である。「真福寺古事記書写の研究」の翌年にもした蓮田の口語訳があるので参考までに掲げる。

神の風吹く伊勢の海の

石に執り着く細螺貝

取り付き伺ひつきじりじりと

囲み撃て撃て撃ち果せ

若々しい久米の子が

つくる粟畑の葦草を、一莖抜けば根から

皆

つゞいてそつくり抜けてくる

つゞきて撃て撃ち果せ

若々しい久米の子が  
根根に植ゑた生薑を  
かめばびりりと口疼く、亡兄思へば胸疼

く  
おのれ撃て撃ち果せ

いかにも軍歌らしく生動した名訳だ。この軍歌を蓮田は「勇進の古道」と名づけている。そしてこの古道に従い、今年の戦いに、戦い抜く雄心、敵を容赦なく討ち果す銳心、神韻の言立ての三点を、軍人に、詩歌人に、文学者に要請している。それにしても神武の軍歌が、いずれもゼゼ貝とかニラとかショウガのやうに、岩にへばりつき地中にもぐっている動植物に結びついているのは面白い。蓮田がこの文章を書いた頃、筆者は応召して中国戦線にあつたが、弾丸を避けるため、まさにこのゼゼ貝・ニラ・ショウガになる体験をしていたのである。地に身を伏せて草の根を嗅ぎ、微塵の花を凝視している間に、敵状を窺い活路をみつけたのだ。ゼゼ貝・ニラ・ショウガの軍歌が成つた神武の戦が、いかに容易ならぬ苦戦であつたかという事実を実証している。蓮田はこのゼゼ貝・ニラ・ショウガの追真的な比喩や、「神風の：伊勢」「みつみつし：久米」の枕言葉の天来のひびきや、「這い廻ろふ：い這ひ廻り」「葦一本 そ根が本その根芽繁きて」の執念のリフレインに、「神韻」を靈感し「勇進」の心緒を体得している。

## 鷗外の友田中正平(一)

田中克己

「憤りつつ」から「ころ」をはらふことを言挙げしたのは正に去年であつた。本年は「やまとたましひをかたむる」上に何としても神ながらの古伝のころころとはを振るひおこし言葉のさきはひをさながらに招き致すべき年である。この尊い最要の一事を明らむることは国文学に心をおいてきたもののみのしる事でもある。私はさう信ずる上で本年は古事記一途に考へるやうになつた。古事記の絶大さが今まで知らないほどの光耀を発して仰がれてくるのを感じる。国学者では本居宣長よりも加茂真淵。」

田中正平博士は文久二年(一八六二)五月(日時不明)淡路島で生まれた。文豪鷗外と同年の生まれであるが、年譜(註一)によれば、鷗外が石見の津和野に生まれたのは、正月十九日であるから、鷗外よりは四、五月おくれで生まれたのである。父は田中六左衛門といひ、洲本の総年寄岡忠右衛門重威の弟で、犀二といつたが三代田中六左衛門が嘉永

## 意味

吉本青司

小鳥たちはくる どこからとなく  
巣箱がひとつしかけられた  
裸木の枝々に

きのう 天使のように  
脳を思つて池におちた 不犯の少年の  
痺いをすましたばかりの村に

小鳥たちはくる 雪をかぶつた  
裸木の枝々に  
かるやかな姿態 可憐な囁り

村は貧しく あらそいが絶えなくとも  
遅い日は正権に時を告げ  
風は浅春のひかりを泊める

小鳥たちは 木の実をついばみ  
白い地面に脱糞する その  
おくめんもない排泄の意味よ

## 昭和批評大系(第二巻)

昭和10年代

¥ 1800

### 第一部

三木清、中村光夫、中野重治、河上徹太郎、保田與重郎、広津和郎、本多秋五、浅野晃、芳賀樞、戸坂潤、藤原明太郎、窪川鶴次郎、平野謙、長谷川如是閑、亀井勝一郎、小林秀雄、岩上順一、岡崎義恵、山室静、西田幾多郎、宮本百合子、林房雄、福田恒存、坂口安吾、石川洋三、武田泰淳、山本健吉、中村光夫、唐木順三、竹内好

### 第二部

武田麟太郎、村山知義、高見順、菊池寛、池田勉、今村太平、真船豊、川端康成、西村孝次、北原武夫、正宗白鳥、青野季吉、織田作之助、蓮田善明、青柳優、小田切秀雄、桑原武夫、伊藤、浅見淵、矢崎弾、神保光太郎、三島由紀夫、他

東京都中央区京橋三ノ五

## 番町書房

まさに言霊で神国を伺いえた人と言わねばなるまい。蓮田はその覚悟をさらに後記で次のやうに結んでいる。

二年(一八四九)に亡くなると、その子権平(四代六郎)が幼少なので、後家の美代(本家四代万兵衛長女)の婿となり、財産を見ることとなつた。これを看防養子といふが、権平が成長すると隠居して、はじめの名をなおり、字を改めて才二、別号を菜菔といつた。明治十一年(一八七八)、数へ年五十五歳で亡くなつた。この才二の長男はまた権平の死後、その子一郎が幼少なので、家を継ぎ五代六郎となつたが、一郎が成長すると隠居して大正十五年(一九二六)に亡くなつた。

正平博士はこの六郎の弟で、継ぐべき家もなかつたのであるが、幼少から天才の名が高かつたのであらう。三原郡賀集村五四六番屋敷を出て、大阪外国語学校をへて、めでたく明治十五年(一八八二)七月には東京大学理学部物理学科を首席で卒業した。時に数へ年二十一才であつた。同級には安政三年(一八五六)生まれの岩手県人田中館愛橋博士がゐた。六歳年上ではあつたが、両者の仲は良かったといふ。卒業の翌月には東京大学予備門教諭に任ぜられ、年俸六百円を給せられた。任命の辞令、卒業証書ともに記録されてゐて、卒業証書を写してみると

田中正平

物理学科ヲ修メ毎学年ノ試問ヲ完ウシ正二

其業ヲ卒ヘリ仍テ之ヲ証ス

物理学 東京大学理学部教師

J・A・Ewing B・S・C

応用数学 東京大学教授正六位

菊池大麓

星学 東京大学理学部講師

H・M・Paul

明治十五年七月八日

東京大学理学部長正六位 菊池大麓

右田中正平ノ物理学科ノ卒業ヲ認了ス

東京大学総理正五位 加藤弘之

いまの卒業証書と同じく東京大学といつて東京帝国大学といはないのが目立つてはないか。

この間、同年生まれの隅外は明治七年（一八七四）東京医学校予科（のち東京大学予備門）に入學し、九年からは陸軍よりの官費生となつて、明治十年（一八七七）東京大学医学部本科生となり、明治十四年にはこれを卒業した。田中正平に先だつこと一年で、数へ年二十歳であつたが、正平とは異り、この年十二月には陸軍軍医副に任じられた。この二人の大学在学中の交友關係は明らかでない。おそらく面識はあつたらうが、話すこともなかつたのではないかと思ふ。

（註一）改造社、現代日本文学全集の森脇

外集に附する森脇三郎氏編の年譜。

正平博士の幼少年時代は明らかでないが、温暖な淡路の山川草木、とりわけこの地方で流行した浄瑠璃のたくひは、子供ながら博士の心を動かしたに相違ない。趣味であり、かつ生涯の仕事となつた和楽の楽譜は、エンハルモニウム（後述）とともに、いまも残つてゐるからである。

もう一度はなしを生地にもどすと、賀集は和名類聚抄にすでに「加之乎」と出てをり、淳仁天皇の御陵のある、古い村である。洲本から鳴門海峡にのぞむ福良までの街道に沿つた村で、名主の本家も分家もみなこの街道に面してゐる（本家の万米家はいい庭をもつてゐるので知られてゐる）。兎追ひしかの山、小鮎釣りしかの川といひたげな平和な場所である。正平博士の少年はここにすぎたが、永いドイツ留学や東京暮らしで、この村がその夢に出たかどうか、故人となつた今、和楽愛好のみがただ一つの故郷のなまりとしか考へやうがない。

（つづく）

### 伊東静雄論

——礼と堪へ（ころ）——

石川勝之

二

に例をひいた処女作の「空の浴槽」という題名にしても、ゆあみしてまどろむことの許されぬ、詩人の渴き飢えた精神状況を示すものとも言えよう。

あ、雲の何処かで弓弦の切れる音がする  
これは昭和六年の作であるが、詩人の体の中につよく堪えられてあるものが、痛いまでの孤独感についに堪えきれずに切れる音でもあろうか。

「到底まつ青な果実しかのぞまれぬ  
種の林檎樹」（「晴れた日に」）  
「逃げ後れつつ逆しまに 氷りし魚」。  
（「氷れる谷間」）

「夕べの来るまで洞むことを知らず咲きつづけ」ている「一莖の朝顔」（「朝顔」）  
「冬のあひだ中 かれ枯れた櫛の樹に その一所だけ青んでゐたやどり木」（「宿木」）  
これらの表象やイメージは、「目の発明」を強いられた自己の造形化であり、くすれの意識を内部に秘めて持つ自己の中の詩人に寄せるイロニーでもある。

このくすれの意識と死の意識に傷つきながら、なおそれに堪えている姿勢の造形は、「自然に、充分自然に」に見事に定着されて

くすれの意識とは何か。それは詩人の心の中に生への意志と同時に存在している死への意志といつてもよい。静雄自身の言葉で言う「意識の暗黒部」（桑原武夫宛書簡）である。

先に言及した静雄の「同時代の友」中村武三郎の詩「Sea-Flower」に次のような詩句がある。

回想のつばさに海の花のほひがながれる  
むくろのやうに忘却の波まにゆら  
れたいが 海の花のほひがあわたりしをはばたかせる

詩人としての存在の悲劇性を、これほど正確に造形した詩はすくない。「ねむりたいのに踊らねばならぬ」というトニオ・クレイゲルの憂愁に通ずるものであろう。

伊東静雄にも、詩人としての造形への意志を捨てて「むくろのやうに忘却の波まにゆられたい」気持が、絶えず頭をもたげていたようである。

……真実いふと私は詩句など要らぬので  
す また書くこともないのです  
（「四興」——「稚の木」十年四月号）  
という吐息のような詩句も、造形への意志を捨てたのに、捨てることができるのできぬ詩人としての自己への自嘲とも考えられる。又、先

草むらに子供は腕く小鳥を見つけた。  
子供のはがしはしなかつた。  
けれど何か瀕死に傷ついた小鳥の方でも  
はげしくその手の指に噛みついた。

子供はハットその愛撫を裏切られて  
小鳥を力まかせに投げつけた。  
小鳥は奇妙につよく空を蹴り  
織り 自然にかたへの枝をえらんだ。

自然に？ 左様 充分自然に！  
——やがて子供は見たのであった、  
磯のやうにそれが地上に落ちるのを。  
そこに小鳥はらくらくと仰けにね転んだ  
（「コギト」十二年一月号）

「瀕死に傷ついた小鳥」が「自然に」「充分自然に」「かたへの枝をえらんだ」とは、一休何ということであろうか。ここには、故意に、詩人の体の中で不自然に、デフォルメされているものがある。

「瀕死に傷ついた小鳥」はそのまま「痛き夢」を背負う詩人自身の象徴であろう。  
「充分自然に」という一見なめらかな優雅な姿勢は、外面の形の上でのことで、内面には波うつばかりの叫びがあり、反抗があり、無

### 風

浅野 晃

風はつめたい  
土はかたく凍る  
けれど ムクよ  
おまへにきこえてゐる あれは  
海が鳴るのでない  
山が鳴るのでない  
あれは おまへの  
記憶の扉が鳴ってゐるのだ  
ああ いま その扉がひらき  
かなたにつづく古い道は乾く  
乾きつつ鳴る  
もどかしげに鳴る  
けれど待て 夜が明ければ  
みんなはなほも敬虔に希ふだらう  
子供たちは手をつなぎ  
天のかなたに巨きな風をあげるだらう  
ムクよ そんなきびしい眼で  
おれを見るな



我夢中の、必死の、狂わんばかりの格闘があり抵抗があるのだ。何に対する反抗？ 痛みを背負う詩人の宿命への抵抗、たえず「逃げ後れつつ逆しまに水」つてしまおう自己の生存形式に対する反抗か、あるいは避けられぬ死への反逆か？

——やがて子供は見たのであった、磯のやうにそれが地上に落ちるのを。

そこに小鳥はらくらくと仰けにね転んだ苦悩の中の典雅が、ついにくずれその瞬間を、これほどまでに抑えた言葉で造形できるものなのだろうか。「らくらくと仰けにね転んだ」このことばには重い重い抵抗感がある。「らくらくと」のもつ屈折感。

これらのことばは詩人の内部を切り裂きながら生まれ出てきたに違いない。ここでは、死の痛みとくずれの意識に堪える内心の反抗が、詩人の内部で奇妙に屈折し、自嘲を通りこしてフォームに近いものにまでなっている。避けられぬ死の傷みを自己の中でデフォルメしてフォームと化し、そうすることによって死の優位に立とうとしているのである。フォームにまでゆきついたイロニーがここにはある。イロニーとは弱者の武器である。この小鳥の、死の痛みの中の典雅を「礼」と呼んでもよいだろうか。レーナウの詩の中

の旅人の姿勢に通ずるものが確かにここにはある。

三

伊東静雄は、昭和十四年六月に次の詩を発表している。

柳

やま吹の吹きふる垣ねのへに、やなぎは幾日  
ちりにし種状花ぞ。

葉をもるしろきひかりに交はりて、わが取りおとす、堪へころ ひとに知られず。

春をよろこぶもの目に、朝かげと夕陽のひかり目立たぬ季節なれ、

山吹はいつか移りし、卯の花のいましろき垣へを

柳はおのれさ揺れつつ、青くかすかに照らすなり。

かかるとき、かかるころの、玉ゆらの青きかげに

誰れか驚きて見入らざらん。ながきとし月、過計の心われより奪ひにし

かの奇しくあかるきおもかげぞそこに立

てれば。 (「コギト」十四年六月号)

しろい春の光の中にかすかにゆれる柳の葉を見つめながら、詩人のふと「取り落とす堪へころ」とは何か。昭和十四年九月一日の日記の中に次の言葉が見られる。「家庭はいやだ。しかし家庭を離れてひとりて生かれる自信もない。日光よく、後頭部いたみ、めまひを覚える。いくぶんの吐気と。」

又昭和十五年には池田純宛に次のように書いている。「何だか詩の書き方も忘れました。忘れたといふより外部が大きくすぎつつあると云った気持であります。——略——合歓や、アカシヤの対生葉のゆらぎを眺めてをります。私は人間の没落の過程が少しわかったやうに思ひます。」

こう見てくると「柳」で歌われているのは一種の脱落感であることがわかる。充盈、素朴な夏の日の喪失感と言ってもよい。

「堪へころ」とは、この脱落感に堪えて「過計の心」を支え持続させているものである。生活への意志と生活からの脱落感の間を揺れ動く詩人の心のゆれが、「柳はおのれさ揺れつつ 青くかすかに照らすなり」という句によってイメージとして定着されているのである。

新訳 ルバイヤット (七)

——オマー・カイヤムの四行詩——  
森 亮

第五十歌

どうせ打毬の球だから否も応も言わない  
右にも左にも打つ者まかせて転がってゆく  
わたしたちを遊びの場に投げ込まれたあの  
お方が、  
あの方こそ何もかも心得ていらっしゃる、  
何もかも。

第五十一歌

動く指がうごいて文字を書く。書いてしま  
えは  
手は移る。半行でも消させようと真心を尽  
しても  
知恵を働かせても、その手は誘い戻せない  
あなたの溢れる涙も一つの文字さえ洗い落  
せぬ。

第五十二歌

わたしたちが大空と呼ぶ逆しまに置かれた  
鉢  
その下に閉じこめられて人は這うように暮

らして死ぬ。

それに手をさしのべて救いを求めても無駄な

こと、  
大空だってどうしようもなくぐるぐる回って  
いるだけさ。

第五十三歌

大地の初めの土で世の終りの人のからだを作  
られ、  
最終の取り入れのためにもしよばなに種は  
詩かれる。

そうとも、創世のあしたともう書いている、  
終末の曙が精算しようと読み取る文字を。

第五十四歌

出発点を立ったばかりの造化の神々が  
炎を吐いて燃える日の駒の肩越しに  
昂や木屋をそれぞれの座へと投げあげたとき  
それと決められたわたしの霊肉の苗床、

第五十五歌

葡萄の樹はその時早くもわたしの苗床に根を  
下していた。  
それゆえ、わたしの体が葡萄の蔓ともつれ  
合っても——  
こちこちのスプリーには何とでも言わせ  
ておけ。

彼等では開けられぬ扉の鍵をわたしは体を  
張って作る。

第五十六歌

真実の燭火が愛に夢中になるまでわたしを  
燃やそうと、  
或はわたしを怒りに駆り立てようとも、  
居酒屋でちらと見たそのまことの閃きは  
暗闇のお堂にいる覚束なさにどれだけ勝る  
ことか。

第五十七歌

わたしが足を踏み入れるにきまっている路  
を任掛け、落し穴をこさえたあなたは、  
未生以前に立ててあった予定でわたしをし  
身を墮したからと言って罪だと責めるので  
すか。

第五十八歌

品劣る土で人間をこしらえたあなた。  
エデンの園に蛇をもぐり込ませたあなた。  
世の人の顔は犯した罪ですっかりよこれて  
いるが、  
罪の人を赦して、御自身も罪の赦しを人か  
ら受けられよ。

水い水い夏

わが服の紺色あせ

人生と和解出来ぬ男

というつやけしをほどこしたようなアンニュイの色濃い作がある。「紺色あせ」とは服の色であると共に、詩人の内部の色のことをも象徴しているように見えてよいであろう。色あせた青春、自己の中の遠い青春への悔恨を含み表現である。服の紺色があせる頃になっても、なお「人生と和解できぬ男」とは、「わがひと」の影のために堪え「ころを取り落とし「過計の心」を失ってしまう自己への自嘲であり、人生に対して和解の手をさしのべるのだが、いつも疎外感しか感じとることのできぬ静雄自身の自画像であろう。

この試論の立場から、「柳」の詩で、私が最も注目したい箇所は「わが取りおとす堪へ「ころひと知られず」の一行である。「ひとに知られず」というのは、内心の脱落感を支える外面のさりげない風のことであり、前述の苦悩の中で典雅に関連がある。

「堪へころ」が「礼」の感覚につながるのはこの点においてである。

しかし、この期に、「人生」とか「過計の心」とかいう語が、静雄の詩の中で或る位置

を占めているということは、彼の目が絶えずそれらにそがれていることを意味する。転機に立つ詩人の目がそこには感じられる。十四年の日記中の「思索ばかりで行動なきものは発狂す」とか「自分の詩の発想法はゆきづまってゐる。いやゆきづまってゐるというより、ゆきづまったところからやっとしほり出されるやうな詩である。自分はそれを改めるやう努力したい」等のことは、その転生の意図を示すものであろう。

ではその転生は何への転生か。それを示すのは、同じ十四年の日記中に記された「そんなに凝視めるな」の草稿であろう。

そんなにみつむるな若い友、ふかい瞳に自然が与へる暗示は、それがいかに光耀にみちてゐるものであっても、つまるところ（それは）悲しみだ。自然は、変化だからだ、そして又僕らも変化だ。

そんなにみつむるな若い友、自らを停めることによって、自然へのまどはしの暗示をうくるな、歩きつつ道の花をつめ、多様のよろこびにはほほ多め、ほほ多みは、自然と汝とを支える唯一つのものだ。

この「ほほ多み」こそ、静雄がこの期において「堪へころ」を通して得ようとした精神

的生存形式であろう。ここには凝視（目の発明）を拒んでの生への歩み寄りの決意が見られる。「立ちどまり」を否定しての「歩み」への意志。同年十月大山定一宛書簡ではリルケの「マルテの手記」に言及して、「生命の讃歌はこのネガティヴの、立ちどまりを通さずには果して出来ないものか」と問うているが、そうした言葉を念頭に置けば、静雄の転生の意図とそのめざす方向とが明らかに成るであろう。

この精神的転回を「哀歌」への訣別として、あるいは、「意識の暗黒部との必死な格闘」の放棄として低く評価する論者もいるが、私はここで、それらの論に対しては、ただ苦闘の現場だけが価値あるものではない、とだけ言っておきたい。

礼の姿勢に言及した散文「レーナウの詩」と同時に発表された作品が「燕」であることは意味深い。「いく夜渡ける夜の闇と羽うちたたきし繁き海波を物語らず」に、ただ「単調にするどく鬱なく」鳴く一羽の燕。この燕の鳴き声中に静雄は立ちどまりを知らぬ「生の讃歌」を聞いたのかも知れない。蓮田善明宛の十四年五月の書簡に、この一羽の燕に言及した箇所がある。

「燕を二、三日前一羽みつけました。家の

前の電線で、かんだかい、単調な声で数声なくと、ついと矢のやうに飛んで行きましたが、わたしは、それを見て、近来にないすこやかな新しい心持を味ひました。

汝、この国に至り着きし最初の燕、

静雄は一羽の燕がついと飛び去るのを見て、「すこやかな新しい心持」を味わったと言っている。静雄は日本に到りついたらばかりの燕の、傷みの痕跡を見せぬ「すこやかさ」に美を見出したのであろう。そして、そこに自己の傷をいやすものを見つけていたのである。詩集「夏花」刊行直後に書かれた散文の中で、静雄は次のように書いている。

「この間に、立原道造、中原中也、辻野久憲、中村武三郎、松下武雄の諸氏が死んでゐる。これらの人々は、現実に深い交を結んだ友とは言ひ難いが、その詩精神は、私の最深部に強く作用したものである。人にはそれぞれ口には言ひ難い微妙な友情を感じる「同時代の友」があつて、その友情は、その人の後半生をも支配する力をもつものと思ふ。上記の人々は、私にとってそんな友ではなかつたであらうか。そして「友ら去」った後に、各自は、自己流に、「楽しみてさざめく術」を體得して、生きに行くのであらう。そして私も永生きをし

## The Oak Tree in the Field

Shizuo Itoh

An oak tree stands in the field,

Its trunk and branches, which looked aged

on wintry days,

Now wrapping themselves in glittering green,

It stands by the path in the field.

When you pass by it going to and from,

You have a bright sorrow

And a calm courage

Ringin in your olden thoughts.

Translated by Ken Miyagi

四季第2号 (三月下旬刊)

- 羅馬哀歌... 吳 茂一訳
問 い... 杉山平一
冬の支度・他二篇... 大木 実
目撃者... 小山正孝
詩と小説の間... 田宮虎彦
滝を溯る... 伊藤桂一
音・他一篇... 塚山勇三
長明の散文詩... 小高根二郎
春宵雑話(対談)... 田中冬二
井上 靖
禽獸・虫魚・草木... 山岸外史
雪... 室生朝子
胸を張る... 萩原葉子
水郷柳河・他一篇... 阪本越郎
城址の夜桜... 田中冬二
別 世 界... 竹中 郁
S 船 長... 丸山 薫
河井醉茗の散文詩・他... 杉山平一
座談会・中原中也... 河上徹太郎・久保 田正文・神保光太
郷 友 会... 郷 友 会
同人近況・その他... 郷 友 会

東京都中央区日本橋兜町三ノ五三
振替 東京 九一三七五番
潮流社

果樹園 一四六号 昭和四十三年四月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

たいと思ふ。」

ここで、私が注目したいのは「そして私も永生きをしたいと思ふ」という言葉である。

私はこの言葉を、静雄が「礼」と「堪へ」ころを媒介とし、詩集「夏花」の全詩作を通して獲得した一つの力であるとみたい。極端な言い方かも知れないが、夏花期の到達点と言ってもよい。「燕」で見せた「すこやかさ」への志向が、日常的な実感として吐露されること、こいう「永生きをしたい」ということばになるのである。

信ずるものが何もなくなったような時代にあつて(池田勉宛書簡)、なおも永生きをしたいと言わしめたものは、詩人の中にある勁さへの意志、礼の感覚であつたと言つてもよい。夏花期としては最後の詩の中で

花とみづからをささへつつ歩みを運べ

と歌い得ているということは、自己の内部の暗黒部をみつめながらも、静雄の目を前を見ていたのだということ私達に教えてくれる。

編集後記

二月二日・母校の大府立高津高校で講演をさせられた。「凡才の歩んだ道」と題して、僕が私前高校に進学したので大谷治や榎方志功のような天才に出会ふ、東北大を出て役人にならずコッピライターになつたので伊東静雄

伊東静雄の幻の名詩集

『わがひとに与ふる哀歌』

複製版

米限定五〇〇部 米定価一〇〇〇円

東京都中央区上高田五一二三

冬 至 書 房

にもめぐり会え、お蔭で伝記作者になれた話をした。河野正先生からの後日の便りでは、生徒がガヤ／＼していた割に面白かつたという評判の由で喜んだ。

二月六日、岡保生氏より、香町書房から出た「昭和批評大系」に、蓮田善明の「預言」と題した「昭和批評」の、連絡をいただいた。新潮社から週日刊行された「日本文学小辞典」からは、蓮田も「文芸文化」も「完全に抹殺されて、なんとも遺憾至極であつたが、現在としてはこの程度で満足せねばならぬかと思ふ。心が晴れたのは「月報」巻頭の三島由紀夫氏の「文芸文化のころ」に現れた蓮田顕彰の志だつた。拙稿「蓮田善明とその死」は今年一杯で完結する目安があつたので、その後には於ける研究家に、さらに蓮田顕彰に助力をいただかねばなるまい。二月十二日、謙早の上村肇氏が読売新聞九州版を送つてくれた。「ふるさと文学抄」として、四島雄造記者が「有明海の思い出」を、大きな写真版と共に一頁を費して執筆をしている。僕は前述した蓮田の非運を想ひ、うたた感慨なきをえなかつた。世の中は妙なるもので、非運ですら運にかかわりえたことを有難がる人があるし、恵まれすぎた幸運にすらふくむところもある。(〇)

果樹園 第一四六号 (毎月一回一日発行)

昭和四十三年四月一日発行

池田市石橋二丁目六ノ五

編集者 小高根二郎

印刷所 元市印刷株式会社

池田市石橋二丁目六ノ五

発行所 果樹園社

定価四十円 送料二十円

果樹園

第147号

蓮田善明とその死 小高根二郎
帰ってきた死者 浅野 晃
老夫 婦 田中克己

続パンツの歌 福地邦樹
雲 梯 吉本青司
子 亀 誕生 美堂正義
四月の風 伊東静雄
宮城 賢
第四回菜花忌の記 上村 肇
長明の散文詩 小高根二郎

果樹園 一四七号 昭和四十三年五月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五

果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

蓮田善明とその死(四十九)

小高根 二郎

蓮田は「文芸文化」三月号の後記で、古事記の絶大さが今まで知らないほどの光輝を発して仰がれるようになったといっていた。今年「本居宣長より加茂真淵」と宣揚していた。「もののははれ」の信奉者である宣長より、「ますらをぶり」の真淵の方が、「うちてしやまむ」の勇進が緊急事である今日、ふさわしいといっているのである。

「勇進」といえば、伊東静雄もその頃の言葉に、非常に感銘していた。その由は蓮田宛の書簡に現れている。「勇進」といふお言葉このころもっとも肝銘したものでござい

ます。日本の詩歌のもっとも大切な、発想の唯一の地盤がそこにあること、十年の詩作の後やつとわかつて来たのであります。私は段々立派になれさうに考へてみます。少くとも後退する気つかひはない自信を得ました。それが、「勇進」といふお言葉をきいたのと、全く時を同じうしてゐたことをうれしく、有難く考へてをります(昭和十八年四月)。詩人の伊東も、まさしく蓮田と同じ思いを致しているわけである。

この「勇進」の典拠は、東郷平八郎の日本海々戦の戦闘詳報であると、拙著「詩人、その生涯と運命」で触れておいた。つまり、「此の対戦に於ける敵の兵力我と大差あるにあらず、敵の将卒も亦祖国の為に極力奮闘したるを認む。しかも我が連合艦隊が、よく勝

を制して前記の如き奇蹟を収め得たるものは、一に、天皇陛下御稜威の致す所にして固より人為の能くすべしにあらざり。特に我が軍の損失死傷の僅少なりしは歴史神靈の加護に由るものと信仰するの外なく、曩に敵に対し勇進敢戦したる鷹下将卒も皆此成果を見るに及んで唯感激の極言ふ所を知らざるもの如し」の傍点を付けた箇所である。

しかし蓮田は平八郎の戦闘詳報以外からも「勇進」という言葉を教えられていた。それは父慈善からである。昭和十二年日中戦争が始まった時、慈善は植木町から二十二名の応召者が出たニュースを台中の善明に知らすと共に、応召に際しての心得を三ヶ條書き送っていた。その一ヶ條に「勇進」の言葉が現れる。

「当地へ令状ノ来ル時ハ直ニ電報ヲ以テ報知スベシ。何方ニシテモ出発ノ際ハ勇進ハ予テノ覚悟ナレトモ敏子初メ品一太ニ至ル勇シク東望遙指シテ万歳三唱涼シク出発ヲ送ル可シ」。傍点を付けた箇所である。

西南戦役の勇士だった慈善の「勇進」は、日露戦争における平八郎の「勇進」よりも歴史は遙かに古い。慈善は陸軍教導団での教育と西南戦役の体験とに基いて「兵士要文」なる著をあらわしていた。(他に昇平餘音詩集五冊がある。)序を陸軍歩兵中尉・子爵米津

政敏と慈善自らも書き、内容は今は詳にしえないが、一種の歩兵操典のようなものであつたらう。初年兵訓練にでも用つたらしく、現に歩兵第八聯隊本部からの代金送り状が残っている。恐らくこの「兵士要文」中に「兵士ハヨロシク事ニ臨ンデ勇進スベシ」といった用例があつたに相違ない。又、慈善はこの「兵士要文」を「家庭教育要文」に利用したこと必定である。読者は、善明が小学三年生の時、全校の男生徒が参加した試験会で、唯一人：合格したことを記憶しておられるだろうか？ 午後十一時半に校庭を出発、二キロあまりある新墓地に花を捧げて帰ってくる企画だった。ところが高学年生は尽く失格。わが善明だけが一人、任務を果たしてゆうゆうと帰来して、湖上先生を吃驚させたことがあつた。あの試験会に参加する際も、父慈善は「家庭教育要文」によって教えるところがあつたであらう。

「善明！もし迷うとる幽霊がおるなら、うち（金蓮寺）へ連れてこい！勇進せえ。臆病だすな……」

蓮田がいう「大やまと国の勇進の古道」「神武の古道」も、このいきさつに想到せねば、いささか味わいが浅い。

蓮田は「文芸文化」三月号後記で「本居宣長より賀茂真淵」といつていたが、四月号の後記を書く場所に「古言古意」と題して、さらにその主旨を布衍している。

「本居宣長は神は善神もあり悪神もあるといつて儒仏意の神・聖の観念を打ちやぶつたが、宣長の見た神は尚ほせいぜい平安時代風のもののはれの心くらゐしか映つてゐない。今日我々は全くあの古事記の神々の荒ぶるばかりのさかんさを想ひ、全く神はかくの如くいさみ荒ぶりたまふのだと信じる。善とか悪とか正とか邪とかと神の御いきほひを事分けて解釈つけ初めたところから、実は神のおもかげを見喪つて来だしてゐるのである。」

即ち、蓮田にとっては、神を善神と悪神とに分類した宣長でさえ「からこころ」の一種であると論断しただけである。神には善も悪もない。正も邪もない。あるがままに勇み、あるがままに荒ぶりたまつたのである。おらびたいだけおらび、泣きたいだけ泣いたのだ。つまり、意の欲するところを行い、ことわりである果は敢えて問わなかつた。静雄のいわゆる八誘はるる清らかさを信じたVののだ。ところで蓮田の「本居宣長」(新潮社刊、日本文学思想叢書)はこの同じ四月に刊行されたのである。そ

た。三十三才の時書いた「紫文要領」にもすでに、「師伝のおもむきにあらず、(中略)見む人あやしむ事なかれ、云々」と後書きしてゐる。

と區別してその特質を考へ独自性を考へるといふ傾きのある、真淵流の考へ方(屢々いふやうに、荷田春満から継いでゐる思想の残滓)には、宣長のやまとたましひに納得できない強い一点があつたからである。

### 帰ってきた死者

浅野 晃

終着駅についた深夜の列車から最終列車の最後尾の車輦から乗客がみんなおりてしまつた一番あとからおまへはひとり降りてきた両手におもさうな靴をさげてあのとときおなじドレスを着てフォームの人波はとつくにひいてゐたおまへを迎へに出てゐるものはなかつた電気時計の針は二十四時を指した二つの靴を下におろしておまへは息をついた

それからふたたび両手にもたげ急ぎ足にフォームを歩いてゆき脚の方からすこしづつおまへは階段へ消えていつた

おまへはどうやつて帰つてきたのだ どうしておれがわからなかつたのだ おまへはあのとのおまへへ

黒いドレスも黒い帽子も黒い靴も歩き方もどこもちつとも変つてゐないではないか それなのににおまへにおれが どうしておれがわからなかつたのだ

おれはいそいで地下道へおりた おまへへ追つて走つた 改札口を出た

けれどおまへの姿はなかつた

おまへのあとにはがらんとした空白しか無言で無表情な空白しかなかつた

おまへはどこへいつたのだ どこにゐるのだ おまへはほんとに帰つてきたのか

おまへにはもう二度と会へないのか

おれは呼ぶ おまへの名前を呼ぶ

おまへにそれがとどかないわけがどこにある

### 伊藤桂一詩集 定本 竹の思想

小説家として井上靖と共に詩の世界に於ても特異な地位を占める。読者はここにゆうゆうたる東洋の郷愁を満喫するであらう。「溶けた詩集」「夜の記」「悼詩」など詩界では容易に得られぬ絶作である。

¥1,200

東京都千代田区須田町一―二六  
南北社

では、これと反対に「賀茂真淵より本居宣長」である。真淵にはまだ荷田春満の思想の残滓が残っていると論じていた。

「師の真淵は、『伊勢物語』や『源氏物語』を実は愛読しつゝ、次第にその尚古の頑なさにすゝんだ心から、平安時代以降の所謂「手弱女ぶり」を劣し、万葉以前の「丈夫ぶり」を固くとして、宣長に屢々きつゝ苦言を送つてゐる。しかし宣長は、勿論古代に汚れない清らかなやまとたましひや雅びを認めつゝ、しかし古代だけに日本の姿を認めるといふことは納得できなかつた。

蓮田はこの境地から百八十度転回して、真淵に軍配をあげ、彼の「ますらをぶり」に加担したのは、彼の信念であるというより、やむにやまれぬ時勢のせいだといつた方が適切だろう。月光に立ち濡れて南太平洋の戦況ニュースを聞いて以来、わが軍はガダルカナルから撤退しつづけていたからである。その状況は、「勇進」とはおよそ反対の、「転進」という言葉を使って、カモフラージュされていた。そのカモフラージュを破るやうに、四月十八日には、国民の輿望を担った聯合艦隊司令長官・山本五十六元帥がラバウルからブイン基地に向う途中、暗号を傍受してガダルカナル基地を進発した米機の邀撃にあつて、ブイン西方の空に散華した(岩波新書、高木惣吉)もはや古事記の荒ぶる神々にでもうつつに登場を願わねば、いかんともしがたい退勢が見えだしてゐたのである。

この山本元帥の死に関しては逸話がある。これも誤伝されて蓮田をノトリアスにした逸話である。当時中学一年生だった晶一君の記憶によると真相は次のようなことであつた「学校での父を覚えてゐる事件が、一つある。それは連合艦隊司令長官山本五十六元帥の戦死が発表された朝だつた。

登校すると、私のいる尋常科(中学部)

も、高等科(旧制)も、全生徒が横門横の広場へ集められた。教師達も集まり、生徒は学年別に整列し、さわめきながら山本元帥追悼の儀式が始まるのを待っていた。厳肅な、沈痛な空気がその場を支配していた。なかには、ふだんと変らぬ平気な顔の生徒も、教師もいた。しかし式はなかなか始まらなかった。

高等科生徒が揃わず、遅刻した彼等が校門からぼつりぼつりと入ってくるからであった。校門の前は、見通しのいい道路が五十米程真直に伸び、それから駅通りへ左に折れていた。その曲り角から、次々と高等科生徒が現われ、広場で参集している私達が見守る中を、暢気に歩いてくるのだった。私達はぶつぶつ言いながらも、教師達も含めて皆大人しく、彼等を待っていた。突然、バチ、バチ。バチ、バチ。と小気味のいい音がして、振り向くと、父が伸び上がるようにしながら、校門の前で遅れて来た背の高い高等科生徒の頬を張っていた。怯んで横に逃げかけた生徒も横面を張られた。

その場の空気は、肅然となり、気不味いものとなった。私の傍の高等科教師のなかには、白眼がちに父の逆上ぶりを見る人が

あった。私を息子と知らずに、父を非難する人があった。私の学校は、教師が生徒に手を振り上げる事の全くない、当時としては例外の学校であった。

その時、私は父と血の繋がりを、身体中に感じた。私も血が煮えたぎり、父と共にそこら中を殴り廻りたい気がした。

山本元帥を喪った遺場のない鬱鬱と焦燥感、その事に平気で居られる人種への違和感、そんな感情が錯綜して、父の手を走らせたのではなからうか。

やがて、長い黙禱に続く式が始まった。  
(昭和四十二年「バルカノン」二十二号)  
蓮田晶一 父・蓮田善明

さすがに善明の長男の筆である。小児外科医である晶一君の筆はメスのように鋭く正確である。それにしても、くうだらなのか、レジスタンスのつもりなのか、くだんの高等科生からピンタをとった蓮田は、古事記の荒ぶる神々のほんの片鱗を見せたまでにすぎまい。それにしても、父善明と共に「そこら中を殴り廻りたい」と共感した息晶一君の同資質を当時蓮田を訪問した富士正晴が看破しているのは、さすが……といわなくてはなるまい。

長男の蓮田晶一君が、父善明との血のつながりを如実に感じたのは、山本元帥追悼式の日のピンタ事件であったが、その直後、蓮田

小久保実編

### 戦後文学

：展望と課題：

戦後文学を歴史の中にはめこむのではなく、あくまでも現在形で考えようとする。戦後作家二十氏と取組む新進評論家のエッセイの集積。

¥ 850

東京都南区吉祥院四丁目

真興社出版

の家を訪問した富士正晴は、晶一君に道案内をしてもらっただけで、父善明との同資質を看破しているのは、さすが……である。

「昨夜伊東氏門下の林(富士馬)、貴志(武彦)両君とお訪ねいたしました。御留守で何とも残念の次第でありました。

池田(勉)氏のお宅まで坊ちゃんに御案内していただきましたがその方からあなたを何となく感じ得るやうな気がいたしました。

御親切心よりお礼申し上げる次第です。  
(昭和十八年四月二十八日付、東京都神田区淡路町廿二番一書房宛付富士正晴より世田谷区宇奈根蓮田宛)  
蓮田から留守をしていて残念……といった

### 老夫婦

田中克己

子どもののびなくなつたあと

二人はだまつて同じことを考へてゐる

遠くにゐる孫たち 死んだ子や友だちを

生きてゐるひとのことは忘れてゐるが

ふしぎとそっちが思ひ出す時には思ひ出す

——その証拠は山ほどある

夫婦の片一方が元氣な時は相手をなくさめ

なくさめやうのない時は黙つてゐる

両方とも参る時はまあないので

われなべととぢぶたとで満足してゐる

返事が折返しし出されたのであろう。富士はさらに次の葉書を蓮田に送っている。

「おはがき有難く拝見いたしました。わたくしは七日頃信州へ向けて立つつもりで居りますが、一度是非あなたとお逢ひいたしたく存じます。大抵午前は神田二三五三の石書房に顔を出します。夜は一寸あてがつかせません。併し事によれば父、林富士馬君に先導していただいて、御宅へお邪魔いたしますかも判りません。文芸文化に新しく入られた三島氏(?)、大藁面白く存じました。拝眉の上、万々々。」  
(五月三日付、石書房宛付富士正晴より)  
宇奈根蓮田宛

富士は先の葉書で善明・晶一同資質であると先見していたが、ここでもまた三島由紀夫推賞で先見ぶりを発揮している。三島は「文芸文化」三月号から「世々に残さん」を連載していたのである。この間の事情を富士は次のように語っている。

「わたしは時々「文芸文化」にものを書かせてもらつたが、「文芸文化」と直接につき合っているという感じではなく、伊東静雄を通じてつき合っているという感じであった。

昭和十八年頃、わたしは東京の石書房と七丈書院という二つの小出版社の出版顧問

(といえれば体裁いいが、関西駐在の原稿取り)をしていて、月に一回東京へ行った。その頃、伊東静雄が「文芸文化」の天才小説家にひどく感心して、しきりにわたしにその少年の小説を出版するように、幾分強要気味ですらあった。

わたしはどういう順序でか今は忘れたが東京で三島由紀夫を呼び出して会い、そのイガ栗頭の幾分かは意地悪そうな目をした色の青い長い顔のひどく礼儀正しい学習院高等部の生徒の短編集を七丈書院より出版することにし、知り合の伊東静雄の弟子の林富士馬のところへ三島由紀夫をつれて行った。林富士馬は忽ち三島に熱中して、その後しきりと三島に会っていたようだ。

季節も、どういふ訳でも判らないが、林富士馬と三島由紀夫と三人で、成城町の蓮田善明のところへ行つたことがある。何の話をしたのやら、何があったのかもおぼろ気だが、電車の駅まで送って来た蓮田善明が何とも離れるのがつらいというような感情を三島由紀夫に対して示したことを思い出す。蓮田善明も丸刈り頭であった。」  
(昭和四十二年「バルカノン」二十二号)  
富士正晴「文芸文化」とわたし)

その愛情を、当時蓮田は次のように述懐している。

「三島君の小説はもちろん成熟してゐるとはいへないが、決定的な文学である。読者も非常に気をつけて大事に読んで下さってゐるやうで、さういふ言葉をいたゞいてゐる。」（『文芸文化』六月号、）

富士の葉書では「三島氏(?)」と疑問符付きになっており、右の文章ではその三島を連れ林と一緒に蓮田を訪れている。富士の記憶で或いは時間が重複しているのかもしれない。しかし、三島を「われわれ自身の年少者」と呼んだ蓮田の別れがたしとする愛情がよく現れている。その当の三島が、蓮田を次のように懐旧している。

「私はこれ(筆者註・「花ざかりの森」連載)が機縁になって、たびたび寄稿を許され、のちには同人の集りにも出席するやうになった。清水氏の純粹、蓮田善明氏の烈火の如き談論風発ぶり、池田勉氏の温和、栗山理一氏の大人のシニリズムが、それぞれ、相映じて、たのしい一団を成してゐた。文壇的なことは一向わからなかつたが、私は、自分の青くさい発言にまともに耳を傾けてくれる大人たちを得たことがうれしかった。ほとんど政治的な話の出なかつたやうに思ふ。国文学のもつともあえかな(こんな言葉も当時流行してゐた)、もつとも優

## 続パンツの歌

福地邦樹

今年の春卒業したばかりの女生徒から百貨店を通じて贈物がとどいた。あけてみると驚いた事にはパンツが一枚でてきた

そして

「閉静にして

住みごちのよい

家一軒 進呈」

というカードが入っている

過日 学校の雑誌に

劉伶のそれのように

私の家はさわがしいパンツだ

と書いたのに対するいたずらである

美な魂が、ここでは何ものよりも大切にされてゐる、といふ印象を私は強く抱いた。外側から見ても戦闘的に見えるかもしれないぬ集団が、内部にやさしさを充満させてゐる例は多々あることで、私はそのやさしさだけに触れて育つたのである。又、少年の私は

この子は 女子の首席で  
ながし目が魅惑的な美少女で  
特に国語は抜群であつた  
お茶目で いつも何かたくらんでおり  
型にはまった事の嫌いな子であつた  
二年生のとき 体操の時間をさぼつて  
本を読んでいて  
大そう叱られた事もある

風呂から出て さっそく

贈呈のものにはきかえてみると

なるほど このL寸のパンツは

ゆつたりとして具合がいい

私は礼状をしたため

次の歌を一首かきそえた

劉伶の古屋はせまくむさければ

まこと新屋は住みごちよきかな

礼儀を守つてゐたと思はれるから、ひどく叱責されることもなかつた。

今、「文芸文化」を繕いて興味があるのは、同人たちの折に触れた編集後記の発言である。なかんづく、後年はげしい右翼イデオログの汚名を着た蓮田善明氏の、多

少せつかわな、一本気な、しかし志すところの明白な「優美な」発言である。

その一例

「いよいよ皇国思想について熱烈の論が燃え立っている。しかし、思想としての漢意排斥及び日本論は、なお未だ漢意と目される。文学としてのやまとこころの大事さ

に思い至る時が其の皇国古意の開蕾である。私どもの用意してゐるのは、世上の思想論でなく、その文学のためである。」(昭和四十三年刊「昭和批評大系」月刊、三島由紀夫「文芸文化」のころ、)

ここに引用されてゐる蓮田の後記は「文芸文化」五月号のそれである。思想としての攘夷や日本論ではまだ漢意を脱していないときめ

## 雲梯

吉本青司

小さな赤い屋根の発電所をよぎり雲梯みたいな吊橋をわたり

息子がやってきた

自炊生活者の父は

カラスの足跡ほどの菜園から

やせた人參をぬいて山莊料理をつくる

山夫子

このことばはほとんど聴かれなくなつた

た

孤高を負負する山夫子は

昼は山のこどもに学び

夕べは櫻の実をもとめて淀にあつまる鴨と

話し

夜は虚空の星々にあそぶ

まったく動乱の世の中を知らない

△生得ころにうけた傷の癒えることはない

いが▽

ひさかたの息子と少量のウイスキーをのみ

マチの友人たちの伝言をきく

医師と

大学教授と

△老胡の詩人▽などとあだ名して呼ぶ

それらの詩人は

離れていてもなおそこにいるように

なつかしい人生を語る

△インドにわたる詩人の奉加の癖もやつてく

る

山莊の夜はたけて

窓外を

あたたかく空気の河が流れる

この意とするところを、蓮田は次のように解説している。

「文学に心置き文学になりをへる思想言論でなければならぬ。さまざまのことを為し、さまざまのことを思ひ、そのはてにうち上げて歌になることが大事である。文学とは又そのやうな類のものであらねばならぬ。国を興すとき詩歌文学を大事にしたのは日本だけで、ギリシヤも支那も同じぶる時、符を合する如く文学を開放して上面つ

くつた政教論がさかえてゐる。今日も一時の便乗の功者が文学などの時代ではないと述べたりしてゐる。しかも貴ばるべき文学については時人の尚ほ目をひらかざることが多い」(『文芸文化』六月号巻頭言)

蓮田が窮極に意図するところは文学である。巷間伝えるような俗悪な右翼イデオログではなかつたのだ。

蓮田が皇國古意の開書を説いてから一ヶ月ならずして、北海の守護であったアツツ島が陥落した。即ち、米國はソロモン群島での反攻に呼応して、有力な艦隊の援護の下、五月十二日に逆上陸を敢行したのである。死闘二週間余：二十九日に山崎大佐以下二千のわが守備隊は玉碎をしたのである。

この悲報に關連して、NHKラジオの朝の時間に蓮田は鎮魂の放送をしている。

「けさは食卓につきながら蓮田の放送を聞いた。昨夜来、アツツ島の悲報によって心も重くなつてゐた私は、慷慨にや、もつれがちな蓮田の声に、ふたたび昨夜の生々しい感動がよみがへつてゐた。何といふ嚴肅な事案であらうか。ただ声を呑んで悲憤の思ひを熱くしながら、あの七時からのラジオ報道を胸に繰り返し、通した一夜であつた。

二十九日の夜暗を期し、生き残つた僅かの手兵をひきさげ、敵の主力に対して最後の大鉄槌を下さんとした山崎部隊長が、この攻撃に参加し得ない傷病兵たちはすでにことごとく枕を並べて自決した旨を上司に報告するあたりは、聞きながら涙があふれて仕方がなかつた。「他に策なきにあらざるも、万一を僥倖し、武人の名を汚すべき

にあらざり覺悟し、部下一同も莞爾として俱に死に邁く」これが死の突撃をす前にした武將の毅然たる最後の報告文であつたのだ。」(「文芸文化」七月号後記)

この栗山が伝える蓮田のNHKでの放送とは、恐らく「文芸文化」七月号の巻頭言である次の文章であつたらう。

「忠靈にたてまつる  
また勅りたまひしく、朕が東人に刀を授けて侍へしむることは、汝の近き護として護らしめよと念ひてなもある。この東人は常にいはく、額には箭を立つとも背には箭は立たじ、といひて、君を一つ心をもちて護るものぞ

右 神護景雲三年十月一日 称徳天皇宣明の中——続日本紀

称徳天皇の宣明の中に於て、聖武天皇の称徳天皇にのたまへる勅語の一部である。山崎大佐は東人。遠き上つ代に掛けまくも畏き 天皇の大御言もちて宣へるこの忠勇御嘉信のちかひを、ここにまたあまりにも明かに現じられたのである。この東人の常にいへる言葉は大伴氏の言立とともに、詔勅の中にうつつして、いくさびとの必死の忠を

## 大山定一 訳編 ドイツ抒情詩集

ジレーヴス、ゲーテ、ヘルゲリーレン、  
ブレンターノ、アイヒェンドルフ、ゲーリ  
ケ、シュトルム、マイエル、ニイサニ、ゲ  
オルゲ、ホーフマンスタール、リルケの定  
譯ある名訳。

¥ 360

京都中下京区仏光寺高倉西

人文書院

大御言もちてのたまへるもの。大御言ぶりの御高さと、猛きもののふの揺がぬ覺悟と、それをゆるびゆるみなく伝へませる宣明である。

畏けれど、この古き大御言のまま、忠魂二千の英靈にたてまつる。」

アツツに玉碎した東人・山崎大佐以下二千の將兵は、神武天皇の軍歌のゼ貝・ニラ・シヨウガのように、石根にとりつき這い廻り、土を穿ちその穴を抜け、「額に矢は立つとも背には矢は立たじ」の大伴氏の言立のまま、敵陣に殺到し玉碎したのである。この

一文を読む蓮田の声は、「慷慨にや、もつれがち」だったと栗山は伝えている。恐らく、応召の日遠からじ……と予感している蓮田は、この言葉を自らにも言い聞かせていたからであらう。後日蓮田は次の悼歌をアツツの英靈に捧げている。

北の海霧たちわたる鬼神とたふれしひと  
がいまはの息か

## 子亀誕生

美堂正義

海亀が砂のなかから  
つきつきと産れてくる  
手足をばたつかせながら  
這ひ出して海に向つて動き出す  
波に打ち寄せられながらも  
海へ 海へと懸命に動いてやまない  
はては波にもまれながら  
姿を消してゆく

いつか母亀が卵を産みに  
海浜にやつてくる

## 第四回 菜花忌の記

上村 肇

今年は何年にもなく寒く、これでは三月十日に捧ぐる菜の花も、どうかと危ぶまれたが、前日、花屋から届けられた花の姿を見ると、全てを忘れてほつとした思いであつた。当日も昼近くになって、相不変の、説経をやつてく

産んだ卵に砂をかけ  
后にすだりながら海へ消へていつた  
筋となつた砂が  
画面にいつまでも残されていた  
あの情景が思ひ出された

海にいつた子亀たちの  
大亀に成長するのは幾匹であらうか  
それでも海を目差して泳いでゆく  
元気で 生れ出たものの歡びで  
本能といふにはいぢらしく  
見終つたあとも  
すがすがしい明るさの心で  
あれは一体なんであらう  
生れて 生きるといふことは

れる、松本無存が、ゆっくりと店に姿を現わす、相次いで、河の同人である木下和郎が、珍しく菜の花を手にしてやつてくる。近くの酒屋からビールの空瓶を四本借用して、午後一時公園の碑前に行く。すでに五、六人の人が登つていて、定刻二時をすぎること十分、出席者は相次ぎ約八〇名の参列者を得て、私は例年の如く開会の挨拶をした。会を重ねる年毎に、こうして出席者が増していくことは、伊東作品の声価の高からしめることでもあるが、この盛大な出席率は、不毛に近い諫早文化の上に、輝しい明日が約束されるよう特殊の外欣赏到に堪えないと、私は心から謝意をのべた。次いで説経が済まされ、次に九州文学同人である風木雲太郎が立つて、詩の朗読、続いて木下和郎が、河同人、原子朗の、「菜花忌によせる」の長詩を読み、代つて私が、小高根二郎氏の「菜花忌メッセイジ」を謹んで代読した。毎朝午前五時に起床して、丸十五年間、伊東静雄の幻影と対座しつつ、かの膨大な研究をなし遂げた、この小高根氏の努力を、ひしひしと私は身近く感じながら「今や貴方はその母国からも溢れ流れ出ようとしている。宮城賢君の英訳によって、やがて貴方はアジアのものとなり、アメリカのものとなり、さらに欧州の空まで漂い流れて

## April Wind

Shizuo Itoh

Sitting at the window  
I am looking at April wind blowing outside.  
I remember many orphan secondary school boys  
Whom I came to know in various provincial towns;  
Really they were no orphan,  
But willfully believing themselves orphan!  
And feeling as freed as could be,  
They played pranks and vices with abandon,  
All those crooked slanders and pleasures!  
Then they suddenly became sad,  
Now entranced with their casual benefactions.  
April wind is blowing just in the way  
Those secondary school boys were:

Unwitting from great blessing,  
Feeling easy halfway of its way,  
It's doing mischiefs on the roads everywhere it goes.  
The part of it which is, in bright torrent sized as a belt,  
Running at full speed toward the winter  
It has left behind,  
Makes fun of me who am now much too old.  
Where have gone the many bonds of family  
That once tightened me?  
And another part,  
Luring me like that  
With the sweet s-sound  
Which I become jaundiced to take for ostensible,  
You can make me so perverse  
Who am still too young for some thing--  
If so doing only helps me to seek out  
Another bond in time.

Translated by Ken Miyagi

の心に、ちかちかに触れ、それをよく理解する人々の心の波動であった。その静かなざわめきを、制止しつ、持続しつ、諫早中学音楽部女生徒四〇名の合唱が、指揮者のタクトによって、高雅なメロデーと化した。次いで諫早市長代理として助役の野田次三氏が挨拶、友人代表として、佐賀高校時代伊東の一級上にあつた一ノ瀬春駒氏が挨拶、それが済み各地河内人からの祝電がよまれ、そのあと令姉江川ミキさんが立って今年の盛大な、菜花忌出席者その外の人々に対して心からなる謝意をのべられた。相次いで再び「手にふる、野花はそれを摘み……」の合唱がなされ、私がこれをもって第四回の菜花忌の式を閉じるとのべて閉会した。懇親会は午後四時より、福田屋にて開催、年一回の文学人を中心としての集りだけに、和気あいあいとしての時間であった。菜花忌当日の主な出席者は左記の人々であった。松本無存、鈴木忠次、風木雲太郎、木下和郎、山田かん、轟龍造、小林松太郎、中島修、毎能慈、深江福吉、植木孟、山本寿子、一ノ瀬春駒、市川一郎、森長之、藤山高音、八戸正吉、外。総数八二名の多数であった。

中央に読経しているのは松本無存師。  
座像の背後に立っているのが司会の上村肇氏。  
す。「私はこのメッセイジの最後を力強くよみ終えた。私の身近に、この早春の清浄な空気をさわめかすぎたものは、単なる季節の山上の風ばかりではなかった。「花と自らを支えつ、歩みをはこべ」と歌った詩人の心



ゆくでしょう。伊東静雄兄よ。この喜びを、今日ここに集まられた方々と共に分かちあいま



四季第2号

羅馬哀歌... 吳 茂一訳
問... 杉山平一
冬の支度・他二篇... 大木 実
目撃者... 小山正孝
詩と小説の間... 田宮虎彦
滝を溯る... 伊藤桂一
音・他一篇... 塚山勇三
長明の散文詩... 田中冬二
春宵雑話(対談)... 井上 靖
禽獸・虫魚・草木... 山岸外史
雪... 室生朝子
胸を張る... 萩原葉子
水郷柳河・他一篇... 阪本越郎
城址の夜桜... 田中冬二
別世界... 竹中 郁
S 船 長... 丸山 薫
河井醉茗の散文詩・他... 杉山平一
座談会・中原中也... 河上徹太郎・久保 田正文・神保光太
同人近況・その他... 郎・阪本越郎

¥ 360 70

東京部中央区日本橋兜町三ノ五三
振替 東京 九一三七五番
潮流社

長明の散文詩

小高根 二郎

天聰に達した鼻唄

平安のころ堀河院の笙の師匠をしていた時光という名手がおった。彼はヒチリキ師の茂光と暮を打ちながら、声をあわせて鼻唄を唱っておった。あちらの音楽である。そこに院から、「すぐこい」とのお召しがあった。使者が催促しても時光はいつこうに立ち上る気配がなく、茂光と膝を揺って唄いながら、返事もなかった。あきれはてて使者は帰ると、院にありのままを申し上げた。どんなお怒りがえらうかと想っていると、「さすがに見上げた連中じゃなア。それほど音楽に打ち込んで、何もかも忘れられるとはえらいもんじゃ。王位なんてつまらんもんよのウ。こちらから出向いて聴くわけにはいかんじやないか……」と、院は涙ぐまれた。使者はこの御言葉に空いた口がふさがらなんだが、スキも徹すると、結構：世を捨てて道になる。

注・右の一篇は鴨長明「発心抄」に拠つた。原題は「時光茂光教書及「天聰」事」である。

編集後記

三月二日。会員内海塚氏から「四季」「ボリタイア」の創刊を祝う……とたいよりのたいだいた。今日世界に愛想ずかしをした國が次第に頭を化しつづつあるように、ヒョウセツも敢て詩さぬ今日の売文待来を信用せぬ層も頭を化しつづつあるのだ。一見：異端のように見えるこの政・文界は実は同種のガンであることは知る人ぞ知つてゐる。三月五日。伊藤桂一氏から定本「竹の思想」を頂戴した。一説、今日の詩界に一番缺けてゐるものをそこに発見した。それは何であるか？ それは魂であることを覚知させた。

三月十日。静雄の忌日よりは二日早い、丁度日曜なので、この日曜早で十六回忌・第四回葉花忌が催された。上村肇氏の努力もあつて毎年盛大になつてうれし。僕もメツセウを寄せて饗けた。もう静雄は肉身縁者や交友知己だけのものではな。日本全部のもの、いや、静雄の詩魂を真に知る者のものだ。そうした意味のメツセウであつた。忌日の十一日に、菅原の織田喜久子さんから「航海表」という詩誌に昔発表した追悼記をみつけてだして寄せられた。

三月二十五日。村田書店から送られてきたカタログを見てびっくりした。拙誌の創刊号から一一号までで四七〇〇円の相場がついてゐる。しかし一冊当り四三圓強の値段である。別にびっくりするにあたらなんだ。(O)

果樹園第一四七号(毎月一回一日発行)
昭和四十三年五月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集者 小高根 二郎
印刷所 元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所 果樹園社
定価 四十円 送料 二十円

果樹園 一四七号 昭和四十三年五月一日発行

(毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

果樹園

第148号

蓮田善明とその死 小高根 二郎
砂 福地 邦 樹
柿 の 木 浅田 二三男

新訳ルビヤット(Ⅷ) 森 亮
病院患者の歌 伊 東 静 雄
部 落 萩 本 家 義
山 莊 詩 評 吉 本 青 司
編集後記

蓮田善明とその死(五十)

小高根 二郎

蓮田は「文芸文化」昭和十八年九月号に短歌を発表している。

いで行く人の面輪を仰ぎつつおごそかなりし事をいたれる
サマツの山のとりではかたくともくだかむ君がいまはの雄たけび
止めあへず音哭くますらをのををしき最期神をも泣かしむ
みんなみの八十島かけていで征きし人へ折りて年なけば経き
かりそのの別れならねばつ、しみて袴き

たることもすべなきものか

あたのたま肩をくたくと聞く時し一時に胸にせき来りけり

蓮田が短歌を作るなんて珍らしいことである。先号に掲載したアツツ追悼の歌も、実はこの号の先の歌と一緒に発表されたものであった。ここにいう「いで行く人」、「サマツの背にとりつく君」、「雄々しい最期をとげたますらを」、「南の八十島かけて征つた人」E・T・C……は、応召した教師仲間か、文友か、それとも特定の個人をさすのだろうか？ 冒頭の「いで行く人の面輪を仰ぎつつおごそかなりし事をいたれる」や、第三首目の「八止めあへず音哭くますらをのををしき最期神をも泣かしむ」などは、一ヶ

月後に蓮田自らを待ち受けている召集、二年後に彼自らを招いた他・自殺という最期を、運命と知らずに歌って了つてゐる……という気がしてならない。

蓮田の日本における最後の文学的行事は、九月中旬かに開催された大東亜文学者大会に出席したことであった。昨年開催された第一回大会では、平野謙が島崎藤村の結びの万歳に妙な感銘をうけていた。その感銘を、場違いな蓮田の大声叱咤に因縁つけていた事実には、まだ読者の耳に新たなことだろう。その当の蓮田が、第二回大会で「皇道精神の渗透」の講演をした佐藤春夫の姿に、「かたくなにみやびたるひと」という感銘をうけたのである。「紋付の黒っぽい和服の、背のある瘦身だが稜々たる恰幅の氏の、額は霜髪がやや深く被さり、尖つた愛想気のない長顔、胸間には代議員章の紫のきれが、この人だけに美しい一片のリボンと、離れた私の席からは見える、冴えた姿であった」。平野が感銘した、袖口から青色の襦袢をちらつかせ、白い両腕を挙げて、小学生のように稚醇な万歳を唱えた藤村とは、だいぶ違つてゐる。しかも春夫の方は、万歳の音頭という簡単なことではなく、訥辯ながら……と辯じたのであ

——まず、大東亜共栄圏という言葉は、上滑りした政治経済用語だから嫌いで、ぜひ皇道文化圏という言葉を用いたいと提唱している。その皇道の精神には柔らげ調和しようという和魂と、時と場合によっては一戦を辞さぬという荒魂とがある。しかしその本質は「すめら」、つまり「すべら」、力を以て納得さすのでなく、喜んで従うようにすることにある。従ってわが国は皇御国であり、一天万乗の君は「すめらぎ」であらせられる。そうして総ゆるものが調和を保った状態、喜んで所を得ている楽しい状態が「みやび」という境涯である。文学芸術もこの「みやび」であって、その中心は政治経済と同じく皇室にあることがわが国の特長である。今日のお客様である諸君も、この精神を理解し体得して、ぜひ精神上の血族になつてほしい……という論旨だった。

まことに当時としてまっとうすぎるほどまっとうな論旨であった。「これは近來類のない言論であることに読者も気付かれるであらう。一般の協調論や、気焰も亦協調であるといふやうな低調な発言の中にひとり、此の一事よりほか日本一の文学者の今語ることは外にないといふ第一のことを、ゆるがせにせぬきびしさを

以て、殆ど身ぶりといふものの感じられぬ静かにして自若、訥々と併し諄々とのべられたものであった。恐らく異国の文学者も、また国内の文学者もこの論の真意はとらへ得なかつたようである。しかもひとり感に打たれて聞いてゐるのはもったいないほどであった。私は、

かたくなにみやびたるひと

と何となし胸中に思ひ、ふとまた太宰師大納言大伴旅人卿を想ひ出したりした。」

（昭和十八年「文学文化」十一月号）  
（かたくなにみやびたるひと）

蓮田は春夫の「皇道精神の滲透」という論旨の唯一人の理解者であると自負している。これを裏返せば、「異国の文学者も、また国内の文学者もこの論の真意はとらへ得なかつた」という信念にもつらなっている。このことは大会に出席するまでに、蓮田がすでに予感していたことであつた。「日本人の間で思ふ事の一事も喋言れば一向通らないばかりか随分紛糾を生ずるといふ、世馴れない私どもには全く膽のつぶれるやうなことが多いので、まして異国の人と何か心にある事（心にならぬ事の反対）を話し合ふなどといふ事は思ひもつかぬことであつた。たゞ私には、異国人をも一堂に会して大いに文学の道を談ずるなどといふさういふ舞台は、たしかに興味あ

## 浅野晃詩碑建設

趣意書

果樹園が誇る詩人浅野晃が逍遙した勇払の原始林から原始の岩を掘りだし、はまなすの花の下の砂を集め、名詩集「寒色」「天と地」の中の愛国の句を刻みだしたい。

### 要領

- 一、建設場所 北海道苫小牧市勇払まきば遊園地（国策バルブ社有地）
- 二、建設費 募金目標、二五〇万円
- 三、建設時期 昭和四十三年十月
- 四、募金方法
  - 1 一口千円
  - 2 送金先
    - (イ) 東京都千代田区有楽町一の八 国策バルブ工業株式会社気付
    - (ロ) 浅野晃詩碑建設世話人会宛
    - 北海道苫小牧市表町一八 門脇松次郎宛
  - 3 募金〆切・昭和四三年九月中旬 建碑完成後世話人から提金名簿を作成し、会計報告をする

世話人	
飯島 正	大宅 壯一 岡松成太郎
門脇松次郎	中谷 孝雄 瀧尾 弘吉 佐山 勘一
南 喜一	米田 一男 水野 成夫

る見物に思はれ、そんなことの出来る人たちの活潑な発言応酬ぶりといふものは、何か絵本で見るやうな空想をそえられるのであつた。ただし実際は絵になる場面は殆ど無かつた」（河野）。つまり、予想どおり結果もむなむなしさを痛感したのである。ただ「かたくなにみやびたる」春夫の講演だけが、絵であり、見物だったのである。しかし、異国の文

学者の誰一人、国内の文学者も誰一人：関心を示さなかつた絵であり、見物だったのである。ここに蓮田の心境の内に、今までと違つて重大な変化が起つてゐることを見逃がすことができない。戦運に恵まれていた昨年の春、シンガポール帰りという一人の談話の録音放送で、馬来人の使用人が「なぜ私どもには天皇陛下が

## 砂

福地 邦樹

娘が砂場で遊んでいる間  
つきそいの私は  
退屈して 砂をまさぐる  
公園の砂は  
荒くて不ぞろいな砂を入れてある  
しかしそんな粗悪な砂の中にも  
よくみると 豆粒ぐらゐの  
寶石のようになめらかな  
青や茶色の粒がまぎっているのだ  
子供たちに下の方からかきまわされて  
適当な湿りをおびた小石は  
つやつやと渋味をもって美しい

普通の白色の角ばつた砂の中にまぎってそれはえもいわれぬ円満な輝きを持つてゐるのだ

この砂の一粒一粒は

大きな岩が何億年もかかつて

砕け磨りきれて来たことであらう

大気の湿度を日毎に反映して

乾いたりぬれたりしたことであろう

私の娘は

何億年前の岩のかけらどもを

ポリバケツに無造作にすくっては

コンクリートの腰かけの上に

あきもせず

砂まんじゅうを並べてゆく

いらつしやらないのでせうか？」といつていた由を聞いて、蓮田は感激のあまり嗚咽とどめがたく文字さえ見えなくなつたのである。（昭和十七年「文学文化」三月号一後記）

又、神風連の源流である肥後国学の祖は、朝鮮の帰化人・高本順に発していることに興味を示していたのである。「神風連の国学は、学問的中心たる林桜園（河野通有を祖とす）

に出で、桜園は本居宣長の学統をひく長瀬真幸に出でるが、桜園も真幸も根本的には高本順の門人である。而して高本順は、阿蘇に隠棲し、阿蘇家の古文書や阿蘇靈峰によつて、独自に既に国学精神を覚り得たのである。面白いのは高本順は自らその祖は朝鮮人であると言つてゐることである。それが、どうしても日本人となるのでなければならぬ精神といふものを得たのである。」（昭和十七年「文学文化」三月号）高本順の祖先は李氏。清正が朝鮮遠征の帰りに連れて戻り、そのまま熊本に住みついたのである。その子孫である高本順は李順と号して詩歌もよくした。特に日本の桜を愛し、伊勢神宮参拜のみぎり松坂に宣長を訪れ、次の歌を贈答している。

みよしのの花を分ても問米つる君が枝を  
りのみちのまにまに 順  
わけみけむ花のよしのの山よりもふかき

この天皇を希求する馬来人。桜の花を愛し、「やまとだましひ」を血肉化した李順。こうした期待は、すでに蓮田の心から消え去っているようである。消え去っていないまでも、もはや「異国の文学者も、また国内の文学者も……真意はとらへ得なかつた」として、己一人に願いを閉じこめて、それを悲願にして死んでいるようである。春夫を「かたくなにみやびたるひと」といつているが、自分もまた「かたくなにみやび」ることを念願としていようである。蓮田にとっては、もはや救いがたい戦況も、国情も、共に見え透いてい

たからであらう。  
この蓮田に対し、大東亜文学者大会の模様を風の便りに聞き、実戦というものを知らぬ伊東静雄はまだ呑気である。

「この頃、大東亜文学者大会あつてゐた。夏の蕪鬱たる樹蔭。人をして憩はしむべし。わが国の文運もまた夏樹のごときかんならん。」  
「大樹の下の神語り」。(伊東静雄日記、昭和十八年九月二十日)

丁度このころ伊東には長男夏樹が誕生していたので、この呑気さも、或いはその喜びのせいであつたかもしれない。

十月十八日蓮田に再度の召集令状がきた。実はその予告は、すでに二週間前に熊本から届いていた。その際の長男晶一の記録がある。

「丁度、父は庭で草花の手入れをしていたが、手を洗って家へ入った。

近々、召集するかもしれないぬから、居所を明らかにし、内々、準備をしておくように、という意味のものだと、聞かされた。

私は非常に不安になり、心配でならなかった。登校中も、帰宅してからも、父は行って終うのではないかという予感で、おどおどしながら私は過した。

それから、二週目の未明に、

「電報！」の声と共に玄関の硝子戸が叩かれた。私は瞬間、もう駄目だ、と観念し、とたんに涙が留め度もなく溢れ出た。しかし父に気附かれぬやう、背をむけてじっと臥っていた。母が起って電報を受取った。

父は低い平静な声で、明日発たぬば間に合ぬ事、その為には今からすぐ準備にからねばならぬ事などを、母に話し、身仕舞をした。明るくなってから、私は何気ない顔で起き、冷たい水で目を冷した。」  
(昭和四十二年「バルカノン」)  
(十三号蓮田品一「父・蓮田善明」)

その夜の壮行の宴については栗山理一の記録がある。

### 太宰治と 無頼派の作家たち

三枝康高著

戦後文学史に光芒を光つ織田作之助、坂口安吾、太宰治の愛の諸相を通して、内面に深く分け入り、文学と精神を抉出した問題の書。  
¥ 580

東京都千代田区神田須田町一十二六

南北社

「前夜は慌しい身仕度の中を雨をついて集つた数人の友と壮行の小宴を開いたが、蓮田は軒昂と郷党神風連の歌を高吟し、はては酔衷を憤って熱涙を流してゐた。私は長い交友の間に、はじめて蓮田が男泣きに泣くのを見た」  
(昭和十八年「芸文」)  
(「化」十二月号「後記」)

さらに清水文雄の記憶によって補足すると、蓮田は「あのアメリカの奴メ等が……アメリカの奴メ等が……」と、激昂を繰返して泣いたというのである。召集電報で枕を濡らした品一少年も、父の男泣きを聞いて、襖の蔭で頬を濡らしていたであろう。それにしても蓮田が高吟した神風連の歌とは誰の作で

あつたか？ 恐らく盟主太田黒伴雄の

天照す神をいはひて現身の世の長人と吾れは成りなむ

であつたに相違ない。「現身の世の長人」「現

## 柿の木

浅田 二三男

柿の木の蔭になって  
茶の木が近年元気がない  
少しばかりの柿を  
手間ひまかけて干柿にしても  
今日びの子どもの  
ほうせきにもなりはせん  
ひと思いにバッサリやろうと  
やにわにとつておきの  
ノコを持ちだした

ノコは亡父のかたみの逸品  
死んだとき  
寄ってきた親類たちが  
まず訊ねた  
「上等のノコがある筈や」  
まるで呉れといわんばかり  
それくらい評判の

神」になるという伴雄の悲願を、蓮田は自らの

のそれとして高吟し、嗚咽したのであらう。その涙を拭った後に胸に浮んだのは、大海に昇る太陽の讃歌だったのである。

ノコもノコだが

父は在所での  
ちよいとした柿師だった  
七十を越して  
六尺廻る檜をかるく倒した  
しんしょうはつぶしても

この種道具は大事にした  
雨降りの日はかならず  
聞いていると鳥肌になる  
目立の音がした

そんなノコギリだが  
さほど太いとは思わなんだ  
大したことはない  
たかをくくった柿の木が

ノコを当てたとたんに太くなり  
コブだらけの株まわりで  
こちらは息ぎれがし  
半分ほど切ったとき  
ビキンと音がして

ノコの歯を一枚欠いてしまった

### 門出に

勅題のころを

大海原

破れ茶碗よろしく  
ついでみるかけらも見当らない仕末  
不覚とより申しようがない  
そばで見物の家内が  
「何とかと道具は使いようで……」  
とわらうが  
しかし  
半ぎりの柿の木はどうなるだろう

このまま半ば枯れ  
細々と生きながらえるか  
それとも台風くらつて  
どうーと倒れるか  
いずれにしろ  
わらうどころか  
全くあと味のよくないことになったものだ  
わたしにとつても  
柿の木にとつても

豊栄 昇る  
朝日 影  
天足らしたり  
国足らしたり

臣善明

蓮田は東京駅から乗車前に妻子と一緒に宮城を参拝した。

「夜来の雨に洗はれた大前はひとしほ浄らかで、水をふくんでかぎろふ玉砂利はまるで海底を歩むやうに碧く煙って見えた。陸軍中尉の武装に身を固めた蓮田は見送りの幼い子供たちを傍に並べて、二重橋はるか

に恭しく伏し拝んでゐるが、いつまでも

く面を上げようとはしなかつた」(昭和十八年文芸)

栗山理一後記)

そう：見送りにいった栗山は述懐している。長男晶一の記憶によると、「着古した軍服に正装した父に従って、母が末弟(新夫)を抱き、私は小学一年の次弟(太二)の手をひいて宮城に詣でた」のである。

参拝を終えた蓮田はどうしたことか玉砂利に魅了されていたのである。

皇居を拝してかへるさ

妻よ この大前に敷かれたる  
さゞれ石のうるはしからずや  
汝が手に一にぎり  
拾ひて

われと汝と分たん  
汝が手なるは稚子らにも分てよ  
さゞれ石

あ、大前のさゞれ石

円らかに 静かに

わがいたゞきもちて  
行く 三粒四粒

蓮田は最敬礼をしているうちに、浄らかな玉砂利の円らかで静かな美しさに魅了されたのである。四年前中国の川瀬で色とりどりの玉石に魅了されたあの衝動だ。蓮田は深々と下げていた頭を上げしなに、つい：掴み取ろうとした。が、掌には純白な手套をしていたことに気付いた。彼は白に対しては特別に敬虔な嗜好を持っていた。玉砂利は夜来の雨で濡れている。とっさに彼は、参拝を終え再び新夫を抱こうと腰をかがめた妻に、声をかけた。

「敏子。その玉砂利を掬っておくれ！」

彼女は言われたまま右掌に一と掬いの玉砂利

を掴み取った。なめらかで粒々の集積。頃合いな重量。しかし濡れた冷たさはハッ！とするほどだった。身内の温い血汐が引き汐のように、掌から粒々へ移行するのが感じられた。それは昨夜来一睡もしていない彼女の頭脳を正気づけた。夫はこの玉石を形見に持ってゆくのだ。母国日本の形見にするのだ。そう気付くと、彼女は袂からハンカチを取り出すと、粒々の水気を吸わせるように拭いていた。せっかちな夫は手套を脱いだ左掌を差し出した。彼の暖い掌へ粒々を移した。が、彼はその三、四粒だけを薬指・小指で保留すると、人差・中指で余分の粒を彼女の掌へ押し戻した。粒々を介して彼女の血汐が彼へ移行し、また彼女に戻ってきたように感じた。彼は眼の中で笑っていた。「敏子は僕のものだ」。幾度も聞いた親愛の言葉だ。若い頃別居していた時、きつとそう手紙に書いてあった。彼女も眼の中でうなずくと、掌の中の粒々を握りしめていた。「そう：永遠にネ」。浄らかな最後の交歓。大前でする契い。形見分け……。八女が手なるは稚子らにも分てよ。彼女には、そう語っている彼の眼の中の言葉が判った。彼女は掌の中の粒々をハンカチに包むと、懐中ふかく：乳房の脇へ差し込んだ。

東京駅のプラットホームまで見送ったのは

### 新訳 ルバイヤット (八)

一 オーマー・カイヤムの四行詩一

森 亮

#### 酒壺の巻

#### 第五十九歌

或る夕べ、ラマダーンの苦行のひと月が終り、  
新月の美しい影が待たれる頃、聞いてください、  
あの陶工の店にわたしは独りぼつんと立ち  
ていた――  
幾列もの土の器の面々にぐるりと取り囲ま  
れて。

#### 第六十歌

言うも不思議のことながら、土の器の数あ  
るうち  
或る者は物が言え、或る者は言われぬだん  
まり。  
さて、じっとしておれぬ壺が出し抜けに口  
を切った、  
「一体どっちが陶工で、どっちが陶物だい。」

#### 第六十一歌

すかさず別の壺が言う「無駄と知ったら誰も  
おれのこのからだを土塊からこささなかつた  
ろう。  
手際よく壺にまで作り上げておきながら  
どうしておれをぶっ叩いて元の土に戻すとい  
うのか。」

#### 第六十二歌

続いて別のがこう言った「幾ら怒りっぽい人  
でも  
おれが喜んで傾けるさかすきは砕くまい。  
愛情こめて作った器を、その作り手は  
後で腹が立ったからと言ってこわせるもの  
か。」

#### 第六十三歌

これに答える者が無かつたが、暫くして  
余り上出来でない顔の壺が言った、  
「おれの形がすっかりいびつなを誰もが笑  
う。  
陶工はあのとき手がふるえたのだらうか。」

#### 第六十四歌

又誰かが言う「世間では気難かしい酒売り翁

の噂をして、

地獄の煙で翁の顔を黒々と塗りつぶすが、  
おれたちが受ける面倒なお裁きがあるとも  
言うが、  
なに、翁は根が正直で、悪いようにはなさ  
るまいぞ。」

#### 第六十五歌

暫くして又別な壺がため息をついて言う、  
「置きっ放しで忘れられておれの体は乾上  
がってしまう。  
おれの口から懐かしいあいつをとくとくと  
注いでくれ、  
そうすりゃきつと、もとの元気が戻って来  
よう。」

#### 第六十六歌

そういう風に壺たちが次々に話していると、  
ひとつの壺が皆の待ちのぞんだ三日月を見  
付けた。  
彼等はずからだをつつき合って言う「おい、  
みんな、  
喜べよ、酒を運ぶ担夫の肩当てがきしみ始  
めた。」

「酒壺の巻」終り

## Song of a Hospital Patient

Shizuo Itoh

It was blind of me to try to cure my T. B.

At a kind of detached room of my friend

Located in that hillside so commanding.

The friend, that is my dead father who is alive.

There was only a plan there

But lacked training.

Come and see

The hospital in town I entered this time.

Like there in the profound book

I can here get free, first of all,

From the trouble to cut out the scenery myself.

And a regular walking hour we have.

In a narrow courtyard, on curving paths

Shaped like lightning and various cursive letters

So that a glance can get a full view of the course,

and suddenly coming close together,

It's a humble joy to exchange a smile with other patients.

To tell the patients the start and end

Of the walking hour—instead of ringing a bell or the like

The hospital lets bark a dog well trained like an actor,

And we know gloatingly

For that dog we do go out for a walk.

Isn't there in this hospital the clock that had

So importunately disturbed my sleep, you wonder?

Oh yes, there is one, but use is quite different.

In a canoe, with sporting gun in my hand,

I can land at will and at any time

On any one of the twelve islands.

Translated by Ken Miyagi

長男の晶一だけであった。

「戦時規制の為に、家族として私一人しか許されなかった。汽車の窓越しに見る父は、それ迄の厳しさが全身からすっかり消えて、静かに私に微笑んでいた。私は、そんな父を始めて見た。汽車は間もなく動き出し、父は席から立ち上るでもなく、手を振るでもなく、眸に微笑を湛えて私を見詰めたまゝ、行って終った」(同前)

蓮田は惜別の情をあらわに表現することを何故か避けている。いつもの謹厳な表情とちがい微笑さえ湛えている。これは明らかに思うところがあるからである。

もう十年一と昔になるが、大学時代たまたかに帰郷した際の妻子との別れは、こうはいかなかった。蓮田は身悶え泣き濡れたのである。たとえ表面に現わさずとも、心の中ではよよ……と嗚咽していたのである。

「逢ったり、別れたり、それに馴れてきてゐながら、別れることに、心に泌みるものがある。それが殊更今度はひどかった。この前の前のやうに、発車間際に駆けつけられて、胸が一杯になつて、乱れて、涙がほろ／＼出たのなどちがって、何事もなげに坐つてゐながら、心がしーんとして、それが却つて我ながら、そは／＼して、さび

しい、つらい感じが胸をつまらせた。晶一が、手をひろげて、こんなにたくさんおみやげを、といつてゐるやうなあの姿や、いつていらつしやいとやつてゐる元気のいい透る声、それかと思ふと別れてゆく父の方は忘れて、向ふ側の人か何かを見とれてゐる子供らしさが、目の底にやきつく。そしておまへの——、汽車が遠ざかつてゆく……だん／＼顔の形もかすかになり、わづかに白い点となって引きはなれてゆく、あのひきはなれてゆく時、いろ／＼言ひあつたことが、だん／＼一つ一つと吹きちらされて、最後のもの——二人の間に何かある、或は二人の間にしかない或るものが、他の一切が吹きとばされたあとに、ほつりと残つて、それが我ながら、いとしくてならぬい……かう今想ひ回す眼底に、小さくなつたプラットフォームを、晶一の手を引いて、階段の方へ動き出したおまへの姿がかが。——さやうなら。」(推定、昭和八年四月、蓮田敏子宛書簡)

この書簡にいう「この前の前」の別れとは、互いに「送るな」「送りません」という約束を裏切つて、発車間際に駅頭に走せつた妻子をみつけた時の激情の別れだった。

来ぬ筈だったのに、時間近くに駆つてきた妻と子を暗い駅に、すかしみつ、出

### る汽車

乗り降りの人ごみの中で、母の背から、いつしんに、さよならと声あげてみる子  
柿をつなげてやらうと思ふけれどかけつけたばかりの子は改札口で見送つてゐる。

こんな歌を、感極まった別れの後で窪田は「ココロ」の箱に書きつけた。

その夜の別れと先の白昼の別れ……。この二つの別れと、今度の朝の別れとは違つてゐる。第一に朝の別れだ。それに未決の予感か溢れすぎるほど溢れている。晶一は電報という声を聞いただけで、もう駄目だと観念してゐた。未決の運命を直感したのだ。それだからこそ、こっそり涙を枕にしみこませたのだ。ところが父は車窓で微笑んでゐる。自若として「微笑」……。この別れがまるで楽しいかのよに……。

## 山荘詩評

吉本青司

山荘の道を、ひとます下りて、海辺に近い町に移り住むことになる。昨年大切に育てた山荘の庭のすみれを、なつかしみ想う日々で

ある。

しかし、松林から見はるかす海上の道は、茫洋として、相人の歩いた跡にふさわしく、天球のふるさとを望ませる。すぐそこに、竜馬像のあることも、モダリティのかなしみを誘うに十分である。

「詩宴」・61（岐阜市）伊藤勝行の「太陽に還える」には、いくらかの甘さもあるが、コスミックなモチーフにひかれる。表現にもっと緊密度があれば、藤村幸親の「夏の終わりに」も表現に厳格がない。でも、モチーフには、本質にふれたものがある。このグループのひとつは、創造律における転部の隠匿に、陶工的技法を学んでほしい。

「歴史」・11（東京市）楡山末吉の「テストビド」神交二は、賛別なころの韻律が、「蛙」茶漬ケ、塩カラサを伝える。この「歴史」・1の「野上彰未発表詩篇」は、歯ごたえのない詩人であったようだ。「望郷」ラチをたない詩人であったようだ。「望郷」「吹雪」など、この人のなつめた木音がきこえる。「歴史」は傑出した詩である。

「歴史」・12（東京市）「洲の崎物語」は、小説風な長い詩である。最後まで読ませるのは、稚拙な愛の伝説であり、その典型的なテーマは、現代の稀難であるからだろう。

日の果のジュット機の中にある。そこで詩人は「天空の果の木魂」に聴きこえる。本来的な詩人である種は、音楽の秘儀を知る数少ないひとである。

「若い人」・十二月（東京市）の、荏原照子の「沙丘噴泉」は、騎馬民族の郷愁なのか、爽快な沙丘の古代が、自分のコトバで描かれている。しかも壮大に。

## 部落

萩本家義

秩父路 処花の部落  
どんな花の思くべき  
ところかと思つたら  
道はたの崖に山吹――

木々の茂みが

淡いみどりに包まれて  
やわらかけぶり初めた  
山をうしろに  
人家は四・五軒

部落外れの溪流の橋を

「VICKING」・203（青森市）の、たにらけんいちの「水路は、ずいぶんノチュラルな発想で、詩壇的な流行など、すこしもとろけがない、ド根柢さがよい。これはVICKINGゼンたいの性格のようでもある。

「限給林」・14（四日市市）の、岡田通夫の「ハコベラのための未完の詩」は、野性

まだ、ねんねこで  
幼な子を背負つた  
老婆が渡る

橋の向うの  
だんごん嶺の麦の中――  
もくもくと春をたがやす  
あねさんかぶりに  
もんべの女は  
どうやら、背の子の母親らしい。

秩父路 処花の部落  
ここまでくると、正丸の峠は  
もう、そんなにな  
遠くはなかつた

## ホーフマン

### スタール詩集

板倉頼音 訳編

ケストナー、リンゲルナッツの訳者として定評のある氏が新たにホーフマンスタールと取組んだ名訳「外部生活の譚詩」他五十六篇 羊600

東京都文京区西片一四一〇一〇三

## 思潮社

「ボリタイヤ」創刊号（東京市）は、いろいろな意味の注目を集めてゐる。そんな人々が、名を連ねている。保田重郎の美術論は、その美観の原理から、並ぶものがないと思ふ。山荘の秋の眺めを教した、この随想「時雨のころ」は、たくまぬ文明論であるが、変化する池水の生写には、激しいものがある。笠井剛の詩篇は、至純なエスナリを極めてゐる。「僕の位置」「斜面」などは、ころころ自然に溶けこんでいる。詩の発生の秘密を、ついでここで見せよう。種一雄の「わが鎮魂歌」は、レクイエム的な、タマシジメのうたである。汀の砂上には無い錨が、落

のエネルギーをもった詩である。自然発生的な風の長さか、液流に読ませる。コトバがコトバを生んでいく詩法は、野草の根にちがいない。

「骨」・29（京都市）の、天野忠の「舞台劇」は、

大文豪トルストイは  
大きな手くじやらの手を差出し  
頌文な百姓の言葉で云つた。

という挿話の部分に、効果をもりあげようとしてゐる。その挿話のもつレアリテに、今日の詩のフアンチエゼをみる。

「鬼」・51（浜浜市）の、宗昇の「荒野」は、習習的な詩風に、きびしいものを観ている。極限に燃えるのは、落日だけではない。瘦身をそここに横たえるひを見つめる眼も、また燃えているのであろう。

「北國帯」・5（高岡市）の、石崎眞人の「民話の笑い」は、表現に密度が乏しい。しかし、案内の音が凍つて雪の中に埋つていたという話は、詩のエコーと命運を比喩した、民俗の歡智である。

「日本談義」・206（熊本市）の、緒方昇の「駭怪」は、老胡の詩である。詩人の眼を激越なびきで表出する。こころざしの高い詩である。

# 四季第2号

- 羅馬哀歌………興茂一訳  
 問 隙………杉山平一  
 冬の支度………大木実  
 目撃者………小山正孝  
 詩と小説の間………田宮虎彦  
 音………伊藤桂一  
 春………塚山勇三  
 長門の散文詩………小高根二郎  
 春宵雑話(其七)………田中冬二  
 鳥獣………井上靖  
 禽獣………山岸外史  
 胸を張る………室生朝子  
 大鷲御河………萩原素子  
 城址の夜桜………坂本越郎  
 S 船長………田中冬二  
 別世界………丸中 都  
 河井弁若の散文詩………丸山 薫  
 座談会・中原中也………河上徹太郎、久保田正文、神保光太郎、阪本種郎

## 潮流社

東京中央区日本橋區町三ノ五三  
 振替 東京九一三十五番  
 〒 380 70  
 果樹園 一四八号 昭和四十二年六月一日発行 (毎月一回一発行) 池田市石橋丁目六五五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

「二ころの借景ということ考えたのは、『四季』第2号(東京都)の、杉山平一の「問い」を読んだ印象からである。

問いはそのまゝ、答えであり、一と伊東静雄の言葉借り、そこに独自の志操を感ずることは、きわめて古典的な様式である。

しかしそれが、光って眺められるのは、生得の土壌に、もの種を植えることが、「まな」の道につながる創設の儀にあらば、やはり古典的な様式は、斬しきの可能性であるからである。

もっともシンプルでありながら、無限の變化をもたらす創造律は、詩人の革命の原理である。

そこに、「四季」復刊の意義も、前衛派と並びつたことの意味もあるのである。「四季」という誌名の寓意も、たんに花鳥風雪でなく、むしろレポルションの古意に近づくものでなければならぬ。

「季刊芸術」・第五号の、島尾雄雄の「伊東静雄との通交」は、文学形成の非特をおしえる。詩人のタールな出会いを、きびく人間を拒絶し、やがて天上的でさある。静雄の「意識の暗黒部との必死の格闘」という言葉が、「死の刻」を理想させても、ふしぎで

はない。  
 来月は、詩集と詩論について書きたい。

### 編集後記

四月五日、浅野克己の詩集が北海道の書札に送られてきたことになった。浅野君のようにはこんなふうな氏の詩集、戦後そのこの戦野で培られたものであり、まことに所を得た金庫である。雑誌は前掲の広告のおまじりであるから志の方々の努力を願ひあげ。

四月七日、福岡市人氏から昭和四十八年の古事記撰に、文学部国史の一員としてアチチしたてられた方が、はたしき書に裏面を保持していられたことが、お返事か返るなどの書名を、いただいた。昭和十九年、上

四月二十一日、私立大分大学改組の地方自治会、柳屋教育者としての通風資料として、バツ、バツ、バツ、柳屋要領があった。悲運の人、蓮田清明に帰して、四年か…つとこの曙光が見えだしたのである。(〇)

果樹園第一四八号(毎月一回一発行)  
 昭和四十二年六月一日発行

編集 池田市石橋丁目六五五  
 発行所 元市印刷株式会社  
 印刷所 元市印刷株式会社  
 池田市石橋丁目六五五  
 発行所 果樹園社  
 定価 四十円 送料 二十円

# 果樹園

第149号

書簡 二通 伊東静雄  
 蓮田清明とその死 小高根二郎  
 足について 浅野 晃

詩人の墓 田中克己  
 新訳ルバイヤット 同 森 亮  
 河辺の歌 伊東静雄  
 都会生活 宮城 賢  
 五 月 美堂正義  
 山 莊 詩 評 吉本青司

## 書簡(桑原武夫宛二通)

伊東静雄

昭和十九年五月二十二日、堺市北三  
 國ヶ丘町一四〇伊東静雄より、(仙  
 台市北五番丁四桑原武夫宛「封書」)

昨日は「回想の山山」お送り下さいまして大へん有難うございました。

うかつに御本拝見しまして始めて登山家としての御一面が、甚だ重要な御一面であることを知れたわけでございます。そしてそれがごく自然なことに理解されたのであります。大阪に於いての折に、こちらから聞きさへした、きつとその方面の面白いお話を直接、何かご出来たであらうと残念さを感じます。それにしても、わたくしどもには一

向そんな話を、御自分から下さりなかつたことが、いかにも桑原さんらしいとなつて存じます。又御本に示された御見識が、全く正反対な方向へまわしたの内面的性格に非常に厚くお礼を申し上げます。

富士君が二、三日前ひよっこり二等兵の姿で帰郷、いよいよ大陸に行くらしいと云つて暇乞に見えまして、大へんまるまると肥つてゐて、うそのやうでありました。桑原さんによろしく申上げてくれと言つてみました。

そして、先頭無心して、うつくしい葉書送つていただいたことをうれしく活して感謝しております。

皆様のお健勝を祈ります  
 二二二日

伊東静雄

昭和二十二年六月十日、大阪府南河内郡黒山村北条部伊東静雄より、(仙台市北五番丁四桑原武夫宛「封書」)

拝啓、先日は御高著現代日本文化の反省」いただきましてまことに有難うございました。すでに雑誌で拝見したものでございしたが、再読し、三説いたしました。現代日本文化に対する最低限の忠告として、私は素直に理解出来ました。殊に国文学者がこの、明せざる問題提出に、はばからず態度をとることせず、自らに問うてみるものが、かへつてわが国伝統の性格と意味をはつきりし得る唯一の方法であらうかと存じました。私は局外者らしい高見からの言葉こぼしも感じ直せませんでした。それにしても私の理解を素直にしました日本の変化をしみじみ感じたわけでございます。感謝いたします。

私は又、戦前と同じやうに乏しい小使錢を持つては毎日町をぶらぶらする生活をしております。それにしても大阪にはもう殆ど友人もなく、あつてもひとり気が安心持がしま

す。野田さんは京都に引越され、中島君はまた帰らなせ。田中君はいろいろ困つたことがあるらしく、先日会ひました時は、ずいぶんいらいらしてゐました。

奥様始め、皆々様お元氣でせうか。奥様は、なつかしくよく思出します。どうぞそよしくお伝へ下さい。

六月十日  
桑原武夫様

伊東静雄

### 蓮田善明とその死(五十二)

小高根 二郎

品一はこんなやさしい顔をした父を今まで見たことがなかった。いつも秋霜のように厳しい父だった。もっとも中学一年の今日まで同居したのは半年間にすぎない。六才から小学二年までの二年と、宍石解除になってから今日までの二年との、計六年間……。特に父の大学時代など、夏休になると帰ってくる彼を、伯父一人と思ひ込んでいた。子の祖からすれば馴染も深かつたわけだ。日頃、祖父母に甘やかされて我慢強固になつてる品一に對し、たまさかに帰つた父のシツクは厳しかった。正坐した膝の上に品一を腹這いさせ

すと、右手で容赦なく膝を叩いた。強情な品一は悲鳴をあげなかつた。悲鳴どころか、悪いと思ひながらも「ご免なさい」ともいわなかつた。そうし品一の強情に對して、父は「どうしてもわからんか！とどきしりをして叩きやめると、ポロポロと泪をこぼすことさであつた。

この禮數一点張りだった父が、にこやかに品一に微笑みつけたのだ。ま、蓮田は日常的な父性愛の貴族から解かれて、水蓮の父性愛の肖像を、息子の胸に焼き付けておきたかつたのだ。それは氷沢の朝の覺悟だったのだ。

ところが大阪駅での伊東静雄との別れは、東京駅での品一の別れと、人が違ひたいに趣きを異にしてゐる。その蓮田を伊東の側から見ると、次のようである。

「九時四十分の汽車で蓮田善明君大阪通過（昨日電報で通知があつたもの。応召）。黄菊一杖と、本わたす。身体どうですといふと、神経痛があるのです、といふ。前に現場の経験ある上に、學徒出陣で自分は前より一自軍隊生活に期待と乘しみがあつたといふ。自分「この前の禮數からいふ話難しましたね」。蓮田「大へんなことです。私はこのころ断つてしました、大へんなこ

相別れぬ。汽車やがて駅をはなれて闇に出

### 足について

浅野 晃

1 のがれゆく足について  
ひそかにのがれゆく足について  
足音を盗んで去る足について  
あるひは髪かめくもの  
すでに赤く凍りついた足  
地に生えたそれら足、足、足

2 ふたたびのがれゆく足  
すべてのがれゆく足について  
泣きじやくる足について  
地に凍り泣きじやくる足  
いかに小さな童子の足よ

3 つめたい靴ひのなかで  
あるひはむしろ平和のなかで

づるや不図思ひいでしは君にたてまつらむ

うしろに悲しう見ひらいた眼を羨し  
まつすぐにこの道をゆく  
私は、ふり返らな

4 涙をためた眼をうしろに  
私の足は速くなく  
この一本の道をゆく自分  
私は祈る、誰も「ご免私と  
すれちがふものがないことを

5 くり返し足について  
すべてのがれゆく足について  
泣きじやくつてゐる足よ  
地をいやくるものよ  
かくしきれない炎の足よ

6 なんべんでも足について  
道を失つた足について  
いつまでも見ひらかれた眼  
誰にもとどくことのない叫び  
おお、子よ――

とでした。「さうでしたらう。私もさう思つてゐました。丁度いい時でしたね。さつき京都駅で、白井からうけ取つたといふ「神韻の文学」といふのに、「門出に 海上日出 大高原 豊稔のぼる朝日影 天足らし」の國足らしたり」とかいてゐる。自分又神樂に「再びみち」に於て「征途に上らんとて先づ家鄉に急ぐなるわが友蓮田善明さまを昭和十八年十月二十六日東京車站求めて見す 伊東静雄」と書いて渡す。蒼い顔と例の微笑。万歳を二唱し、深く敬礼して別れる。」（伊東静雄日記）

この伊東との別れを、蓮田は次のように自ら持している。

「大阪駅頭夜十時に近く、下り立つ我に伊東さまを迎へ寄り、君が新著「春のいそぎ」出来ぬとてたまひ、また秋のいそぎをまわす黄菊一輪、白き紙にすめ、めをそへてわたさる。われは出だすも恥けれど、たまたま君が序文をこひ得たるをのみほこりとせし一冊の此も今しがた京都駅にて書肆主の特に二部のみ急ぎ本作りせとてあたらしきと被されたるがへなさいだし、語らふことも多きは暇さへなく再び車に乗り立てば君は高倉、万歳を二かへり唱へたまひ、我は君がたびし花をしまふりつ

とてポケットに秘しありし、こは冬のさかりにはいまだ早き背き香箱の、せんすも今はなければその二つの実をとりいでて深き夜の闇に投ぐ。きみゆかりあらばこのことのはに其をうけ玉へかし。

雲を闇になくればおとなくしてしづけ  
き君がおもかげ立つ

また

よき人のたびし黄菊を水筒のくちになし  
しつつかざしとぞする

まさに劇的な別れである。蓮田は静韻で黄菊を贈り、それを伊東の土産しようとして上友のポケットにしまつていた。京都駅では一条書房主の白井善之介から、できたばかりの自著「神韻の文学」二冊を受けとつた。この著には伊東から序文を貰つていた。「古典と古道とをそひ、今の世の素と風俗とをいって、感動となげきを以て、君が心熱くこゝに示してくれたこの道の標に、自分も従ひゆかと思ふ」と伊東は信徒の意志を表明し、又「わが知る君は、その笑む時のまことに美しいひとである」と讃美の思も併せて述べていた。

伊東はまた蓮田の四下を知るや、朝から帰省中の浅野調三を誘つて京都の弘文堂へ出向き、できあがつたばかりの第三神樂「春のい



そぎを用意したのである。それに、別れをさらに匂い高くするために、黄菊一輪を白紙に包んで添え、プラットフォームで待ちうけていたのだ。午後九時四十分。歯噛みし滑り込んで来た汽車から降り立った軍装の蓮田に、羽織・袴に威風凛々していたらう伊東は駆け寄った。微笑の交換と堅い握手。「その笑ひ癖はとくに美しい」と感銘していた蓮田の善い顔に浮べた微笑は、伊東はいささか狂倒を感じたであろう。というのは、この四月には「末呂良長」(註)を貰い、ほんの六日前にも「鴨長明」(註)を買ったばかりだったからだ。それにアツツ島玉砕の時のNHK朝の放送も静聴の耳に新しかった。蓮田の篤篤名福しながら、他方彼の健康を気にした。善い顔色が気になった。

「身体はどうです。」と伊東は訊ねた。「持病のギョツリ脚があります。だが中国の山嶽岩でも充分に耐えたのです。自信はあります」と蓮田は眉を上げた。さらに語をついで

「それによいよ学徒動員です。やがて戦場も学校の続きとしてみよう。それが前に溜った期待と楽しみです」といった。彼兵検査で丁種かであった伊東は、蓮田の衿章の二つの星を、とうとうい迷せられぬ希望

と畏敬で凝視したろう。そして風のたよりに聞いた日本文学報国会での奮戦を思い出した。「古典の精神による皇国文学理念の確立」という旗の下で、精進文学と便乗文学をやつてけた獅子吼……この勇士だからこそやってのけたのだと思つた。

「この前の懇話から大変な活躍でしたな。『鴨長明』から『末呂良長』……」

「それは大変なことでした。このところ断つていたのです。この『神韻の文』に次いでやがて子文書房から『古家紀事抄』、日本放送出版協会から『忠誠心とみやび』が出る予定です。全く大変なことでした」

「そうでしたらう。私もそう思っていました。応召がきりならず、丁度いい時でしたね。」この伊東の言葉が結びとなった。停車時間は残り少なかった。蓮田と伊東は互いに見送りの群々からは、万歳の歓声と「勝つてくるぞ」と「車輪は滑出す蒸気が目覚めた。蓮田はすかさず車に跳び乗って昇降口に立つた。にっこり笑った。その顔は伊東には浸い

と畏敬で凝視したろう。そして風のたよりに聞いた日本文学報国会での奮戦を思い出した。「古典の精神による皇国文学理念の確立」という旗の下で、精進文学と便乗文学をやつてけた獅子吼……この勇士だからこそやってのけたのだと思つた。

### 詩人の墓

田中克己

「わが草木とならん日に  
誰かは知らん敗亡の  
歴史を墓に刻むべき」

かう歌った人が亡くなって二十六年め  
わたしは小雨の中をおそるおそる

お墓のまへに立ってみた  
敗亡の歴史など書いてない  
市ちゆうの尊厳の的となつてゐて  
いま講演会が開かれてゐるのだ  
悲観症の先生、こはがりの先生  
わたしは同じ病氣なので

——朝太郎追悼——

ほど香白く見えた。伊東は誰かを挙げて「万歳」「万歳」と叫んだ。袖口から覗いた腕が蓮田には凄いほど香白く見えた。蓮田は買った黄菊を振つて見せた。彼を励ました。また我を励ました。それから、その影は見送りの群に連れられて、すぐ見えなくなった。それでもまだ黄菊を振り続けていた蓮田は、この花の見返りとして、蜜柑を伊東に贈るのを忘れたことに気付いた。しまった！速力を加えりとした間にしていた。彼はポケットから蜜柑袋を摸みだした。細い指を裂くと善い粒を取り出した。彼の網膜にはまた伊東の面影が残っている。そのアファ・イメージを前をると、その投影に向つて一粒を投げた。

続いてまた一粒……投げ続けた彼は「ゆかりあらばうけ給え」とつぶやいたが、その顔は伊東が見た香きよりも香極めていた。蓮田が西部第十六部隊に入隊すると同時に、濠北派遣第四十六部隊(第一一九六一部隊)の編成が開始された。御田長は若松只一中將だった。蓮田は歩兵第二三連隊に配属され、その第三中隊第一小隊長を命じられた。連隊長は上村栄人中将だった。

この連隊は熊本県人で構成され、現役兵を主幹とし、それに日中戦争の応召者を加えた精鋭部隊だった。たまたま中国戦線が蓮田の上宮だった人吉の島越春時大尉も一緒だった。彼は編成に當つて第三中隊長に據せられると、ついでに要請をして、すでに他隊に配属が予定されていた蓮田を、自隊の第一小隊長に貰い上げたのだ。と、いうのは、教育者である蓮田の人格と該博な國学の知識は、兵隊の精神教育にみなみなならぬ効果を發揮した実績を知っていたからである。今度も教育關係は挙げて蓮田に一任しようとの腹づもりだった。

部隊はオーストラリアの北西、東部シンド列島の警備に當ることが内定した。動員は十月三十日に完了。いよいよ十一月一日に門司から乗船する手筈になった。熊本から門司までの間、蓮田は弾丸か懐剣かの貨車輸送の監督を命じられた。彼はのろのろと鈍行する貨車の車掌室で、内地における最後の文学活動をしたのである。

「作者は今再びの御召しをうけ、漸くこの『むすび』を書く時を得た。すべての便りらしいものは絶つて行くあとにこれが、作者の消息を遺るであらう。幸ひる任務を与へられて貨車に投じ一人それこそ停車する

る駅では三十分以上つつもいろいろしてゆく貨車の穴倉めく車掌室で、一日これをよみ返し、このむすびをした、めることができたのは、なかくにたぬしいことであつた。もう自ら書く文字も見えない(七首止)蓮田は穴倉みたいな車掌室の小机の上で、第一次応召解除後にすぐ執筆をした小説を読み返えし、訂正の筆を入れたのである。ます冒頭

#### 形式(小説)

——各、分冊の中に千悟の人生があった(リネガトナツル)——

と書いてあったのを朱鉛筆で抹消し、初めて「有心」(今ものがたり)という題名を決定して書き込んだ。さらに「野中一次郎」としていた主人公と代名詞「彼」を「自分」と変える決心をした。つまり、主人公は「野中一次郎」とか「彼」とかいう空々しい第三者ではなく、誰かもう蓮田自らであるという宣言をしたのである。

夜明けたら許嫁殿死という不吉が待ちうけて  
いととは、予想だにしないことであつた。  
彼女はそれこそ天眞爛漫な無心さで放恣で  
自らの生を楽しんだ。蓮田はたまゆらであれ  
その顔やくばかりの美をうつつの眼で鑑賞し  
た。この虚を突然に無常が襲つたのである。  
彼女は「この世もあらぬ悲味の淵に突き落さ  
れた。彼には忘れようとしても忘れられない  
罪の意識が焼き付けられた。彼に新堀川畔で  
の、身を烈く激痛の体験が蘇つた。焦げつく  
湯きを見た。見知らぬ彼女の許嫁の死に、  
自らの体験を通して移入した。蓮田は彼の悶  
絶の苦しみを苦しみとして味わって反転した  
のである。熱渡で枕を濡らして唸鳴したので  
ある。その夜の明けに大同蘇の火口を求めて  
音楽をした。その果てにみつめたのは、すで  
に先に投身をしていた彼女の屍だつた。

蓮田は校筆を執りながら、車掌室の窓から  
容赦なく侵入してくる露煙に、火口から湧き  
上る噴煙とエナをまさまじと想起した。再読  
する小説「有心」は、改めて現実として彼に  
決心を強いるかのようであつた。

「死を覚悟して征で立てばいいといふも  
ではない。それは一度死線を過ぎると命が  
惜しくなるといふのではない。一度死線を

通ると、次に別な心持の、も一つ死を決す  
るものが求められるのである。何か死を決  
してかかるものを「生」が求めてでもみる  
やうな、そのくせ、「生」にひたきつた  
心持で、次第に放恣になつて行き、それと  
共に又物事ではあるが深刻に、死じいふ  
ことを知り、勝つ（か負けるからといふ  
ことは考へられないけれど）、か負けるかの  
勝負を瞬間に競つてゐる（一六六）  
蓮田は若びの筆を運びながら、火口へ攀じ  
つづき「さうだ」「世のつねのけむりならぬと  
はのけむり」といふ片歌みたいな句を、吟味  
するうちに口ずさんでいたのであつた。

蓮田は「有心」の補正を終ると、残す少い  
時間で、軍隊用頼信紙に敏子宛に手紙した  
ためだ。それは事務連絡であり、遺言の簡潔  
さである。

- 一、スペテ申す故、後ノ事モ、オ前デ  
分ル程度デ処置セヨ
- 一、俸給ハ十二月分ヨリソチテ行ク
- 一、コチラニ、トランキヤ風呂敷包ミヲオ  
ク。（城戸さんが、一丁目か、二丁目か  
以下不明）
- 一、本ト夏物シャツ等ノ他、殆ド不用ナ  
デ、残シテオイタ
- 一、送ル原箱ハ、文芸文化同人ニ渡セ

### 新訳 ルバイヤツト(九)

一 オーバー・カヤムの四行詩一  
森 亮

第六十七歌  
消えようとするわたしの生に葡萄酒を与え  
いのち去つたむくろもまたそれで洗え  
葡萄の葉をこのからだにくぐる巻き付け  
て

いすこか麗しい園の片陰にうすめて欲しい  
第六十八歌  
そうすればわたしの亡骸まで匂わしい  
酒の香の輪索をふわりと空中に投げ上げよ  
う。

風流に深くはまり込んだ人が通りかかれば  
不覚にもひっかかるのが理の当然というも  
の。

第六十九歌  
いとおい葡萄をそれはとて惹き込んで  
たが、おし葡萄をそれはとて惹き込んで  
人の目に映るわたしの信用をこれがひどく  
落した。  
さかすきの浅い底にわたしの善れを沈めた  
のも奴、

この身に積もる名望を捨て絶つたのも奴  
である。

第七十歌  
毎い改めると今まで何度誓つたことか。  
でも本気でわたしはそう言たのだらうか。  
年毎に訪れる春が善微の花をちらちらさせな  
がら

第七十一歌  
葡萄酒はすいぶんわたしに不信を働き、  
美々しい善れの袂を剥ぎ取つた。  
でも思うに、酒商人といふのは担お人、  
酒の半値ぐらゐの物しか人からは買えないの  
だから。

第七十二歌  
ああ春さえも善微と一掃に消えてゆくのか。  
香を薫さこめた青春の巻き物も閉じてしまふ  
か。

第七十三歌  
枝に来て初音を聞かせたあのさ夜暮も  
どこから来て、どこへ飛んで行つたのやら。  
いとしい人よ、あなたとわたしが運命と語ら  
つて、

本ニスルニシテモ、三人モ忙シイカラ、  
僕ノヲ急テ要ハナシ、

○国文学と文学（講談社）完成  
○歌草抄（放送協会が受クナレバ、日  
井書房デモヨシ）

○古典文学の栞（仮名、古枝の花 第一  
書房）十分完成シテハ居ナイ

序文ハ夫々適当ニ書イテ貰ヒナナイ  
一、別送ハガキハ、表裏ヨクミテ、書  
キカクノモノハヤメヨ

コチラハ  
留守宅 東京都世田谷区宇奈根八二四  
トスル 蓮田善明

学校関係ハ出来ルダケマテ直接渡ス  
他モ直接渡セルモノハ渡セ

他モ書キカクテキタガ間ニ合ハヌ故学校  
ナドデ、父兄ニモソノコト、伝ヘテモ  
ヒナナイ

一、郷里デハ、植木、熊本の親戚、皆大家  
世話ニオツタ

一、植木ニ一度帰ツテ見タカッタガソノ余  
裕ナシ

「夏物シャツ等ノ他、殆ド不用」というく  
だりで、征々先は北方ではなく南方である事  
実を疑かに明かしている。

何もかもが入り組んで哀しい世の仕組みが  
出来ればそれを二人してばらばらに打ちく  
だき、

組み立て直してみたいもの、心の願ひによ  
り近く  
第七十四歌  
欠けることを知らぬあなた地上のお月様に  
物申す――

空なる月は今宵また姿を現わして昇りはじ  
めた。  
これから先どんなにしばしばそれは空を渡  
つて  
この庭を眺め渡し、甲斐もなくわたしを求  
めることか。

第七十五歌  
さてそのあなたが白銀の光に足を輝かせ  
変生の上にはらびやかに群がる賓客の間を  
いそいそとお酒を運がとき、今は昔のわた  
しの座に

歩みを進めたなら、主のない杯を伏せるが  
よい。

## Song of the Riverside

Shizuo Itoh

I lie down on the riverside.  
(I am again back here.)  
This pose I often made before,  
Weeds that feel my shoulders,  
If you laugh it away  
As one of old familiar significance,  
Then perhaps you are wrong.  
After long years of absence  
I am again back here,  
Neither hurt  
Nor enriched, at all.  
  
Far, far from repentance,  
The water runs garrulously.  
Real nature of time that's been left for me!

Accuracy of solitude.

With its precise calculation

A wild morning-glory,

I find,

Already beginning to destroy itself

In the prime of the sunshine.

When I lie down in this way,

Why, almost funny are the going and coming of clouds;

Encompassing my sky,

Having the names of celestial bodies each,

Unchanged frolics of the mountains.

Early did I forsake the wings, too,

Which were like the idleness of the fountain,

But never was I forsaken

By the dream of flight

Cherished in my boyhood.

Translated by Ken Miyagi

## 山荘詩評

吉本青司

表現の彼方に、すがたの見えない何者かの  
軌音が聴こえなければ、詩とはいえない。  
服部隆幸の詩集「返信」(黒潮社)は、モ  
ノレルのように走りすぎる詩が多い。「I  
N TOKYO」には、新鮮に詠えてくるも  
のがある。

西川治男の詩集「形影の空」(ブラクックパ  
ン社)は、たとえば「屋根瓦」のような、即  
物的な詩が多い。心持戻り返った軒瓦でたど  
りついて「空はそこから始まるのだ」と無  
限空間への接近を試みている。だが「塗上」  
にも通じるヒューマニズムの道程で、階段の  
限りにあるモノへのリアリテが、まだ渴望の  
傾城にとどまっている。

中浜勝子の詩集「ちえの輪」(黒潮社)は、  
「歩く」「おはよう」「問う」などに、しお  
りを置いて読んでいった。「前菜」に至って  
この人への期待と失望を重ねた。言葉への  
信頼が言葉によって裏切れることは、詩人の  
宿命かも知れない。

木村三千子詩集「歳月」(文章社)は、ひ  
とくちちによって、女性らしさの愛の詩集であ

る。「夏の終りに」の

若さを奪い気ままに振舞って去って行く

ものへの

かなしい愛の跡となる

という詩句など、それを示している。「初  
冬」では、自然に託された愛が、都会の風に  
さらされている。いまひとつ、厳しさを望み  
たい。

天野隆一詩集「山」(文章社)は、山の  
絵に配された叙事風詩篇からなっている。曲  
切れのわるさが無限空間にこだまするものを  
とらえていない。だが「春信」のシャープ  
な切りこみは、山の印象を明るく伝えている。

今井光枝の詩集「孤独の匂い」(木犀書  
房)は、はじらいつつ語る愛のテーマである。  
「私」「五月の食卓」「孤独」など、リアリ  
ズムの佳いものは、こんな風にもあるのだ  
ろう。だが、生活記録的なものは単調に終っ  
ている。

宮城賢の詩集「亡郷歌」(開隆堂)は、少  
し以前の出版だが取りあける。伊東静雄に魅  
された詩人の中の一人である。ひたすら脱出  
を試みながら、初期に疑念をみせているが、  
「椅子」「形象」などは、独自の主張に達し  
ている。「幸福の条件」は、静雄からの脱出  
の条件でもあろう。

三節田紀夫や島尾敏雄の、静雄への拒絶は、その宿命的なめぐりあいから始まっている。すこし誇張して言えば、秋風の天体間の引力と斥力とに似ている。それは互いに激しい光芒を放つための因果なのだ。

「嵐山暗子詩集」(神田秀夫発行)は、黒真珠のかがやきを持ち、稀にみる風格である。初期詩集には、自然との交わりの美しさがある。若の風になつた、太陽の娘になつたりしている。小鳥たちと会話したり、野花の親戚になつたりもする。

春に手引かれてわたしのする  
着しに服立ちのたまために

などという言葉さえ見つかふ。「冠軍」は激烈で、また流麗な生命の記録である。

後半の大陸の詩は、異土に根ざさぬ草木のかなしみに色彩られて、むしろ日めましい。「秋風」「懐郷」は、遠の日の挽歌であり、むじろ哀情である。後の詩は安倍仲麻呂の離郷の歌を思い出させる。

待胸に移る。

中井清の「丸山瀛の世界」(冬至書房)はつつましく熱心な論評である。作品「離愁」の生成の経路にせまる心象分析はりっぱである。「抱暈」については「夢い原形」という言葉をもっと究明したい。そこには、蕙の原

### 都会生活

福地邦樹

僕らの夢の人間は

コーヒーを飲みセロリを食べるように  
毎日ふんだんに

テレビの冒険と善悪の中の恋愛を  
安心して食べてしまふ

そして次第に

わずかに残っている勇氣や冒險心や  
無邪気な夢やらが

すっかり去勢されていくのだ  
あけの果に

仕事の不平を言っているほかは  
食事の楽しみと

やや頻繁なセックスと  
自衛な遊びに日を過ごすのだ

体験の秘密がありはしまいか。

評者が「上昇と下降の心象」を、蕙の世界に擬したのはいい。だが「根柢的な憂愁」を感ずる「物象の核である『海』」の、象徴的な意義がほしかった。

それは鈍い刺らされた動物園のけもの遊がいつの間にか同じように無表情な弛緩した顔立ちになり  
変りばえもしない献立に満足し  
時に恥ずかしくもなく交尾し  
そして、なにも仕事などしなくせに  
疲れてけだるそうに歩き廻っているのと  
まるで同じだ

僕らの心に不熱心な虚無が宿り  
檻の中の虎はあくびを噛みころし  
僕らはくたたらぬおしゅべりをし  
あしかは汚れた池でゼイゼイと喘息をし  
僕らの子供は  
狭い公園でプランコをし金切り声をあげ  
崖山では小娘どもが  
コンクリートの岩場で  
飽きもせず喧嘩をしつつけるのだ

そして詩集「点滅鳴るところ」は、現実と想像の結合がはじまり、創造後の瞬間の時期に属する。即物的詩法への志向である。その意味から世評に別れて、私は「北国」以後の蕙を高く評価している。

### 前川知賢の「蕙多恵子小説」(原稿林1)

4・四日市市は、結構的なものを急ぎすぎたきらいはあるが、「無意味の詩学」に「崇高な精神」のないことを指摘したのに注目した。前川が「美」というものは位の高さなのであって、物さの強さではない。」といっているのを感じた。

能村深の「詩について」(若い人十二月号

・東京都)は、蕙原定家の歌を引いて、エッセントリックな現代の抵抗をこらみている。「大宇宙の内奥に入りこみ、それと一つになって、湧く源を、詩というのだ。」とい

っている。

温実育子の「ディラン・トマスの空間感

覚」(詩誌第十五号、東京都)は、イギリスの近ごろ最も注目すべき詩人であったトマス論として、いくら直覚的な感受に欠けるが尊重したい学究である。今後が期待される。

林富士馬の「凡光」(ポリティヤ創刊号・

東京都)は、詩の巨匠と交わることで「蕙」に一時の光輝をとどめた春門の個性に向けた評眼は、さすがである。文中、太宰治と三島由紀夫との評価は、林のかまさない姿勢の、つつまじさと自信とを想わせる。彼の「モン

緑にむせながら  
山のほうから降りてくる

緑の季節  
つぎつぎと絶へ間なく

新しい生命は生れ  
脱びが心に沁みこくる

空に一片のちぎれ雲

鮮やかに青く空に浮んでゐる

まがしすぎる若々しい風景

失はれた日々の備な毎いの季節

なつかしき」の論は、即物的な発想の中に秘めている愛とロマンの美学である。

広田善樹の「ハビキ」の定着(詩誌23・東京市)、「ピロ」の詩論をもつには、津田和論は興味深いものがあった。「天秤」のこのコスミックな画家の特集は、注目される。大岡信の津田論もさすがだ。

浅野晃の「ニューギニア感記」(民間伝承279・東京都)は、中谷孝雄の小説「のどかな劇場」の紹介である。引用されたフォークロアの世界には、むしろその詩のカメラモンが健在している。

荒木精之の「なぜ現代詩といふか」(日本談話208・熊本市)は、「詩をどうして現代詩とわざわざ現代をくっつけるのか」と、問いかけている。ちいさい問題のようにでなかなかそうではない。誰か答えなければならぬ。

岡野純の「ある生涯」(浮城64・西宮市)は、精神教育に献身しながら、なぜか命を絶つた詩人近藤雄雄を紹介し、「至難なのは、詩と生活とをひとつにすることであり、詩と生活とが相互にきびし文え合うことである。」といっている。

松本徹の「今の世」の歌(集団55・大阪府)は、はじめの研究である。宣長の、

### 五月

美堂正義

五月

薫る風が吹き渡る季節

山にせくくまれた土地を

空から、また海から吹き抜けてゆく

木々は新しい衣を  
つぎつぎとひらがへしながら  
いつせいに、ささめきは歌と交り



る。六年前の日もそうであった。台湾の基隆港から神戸港間の航路も、高野夏行に参加する情熱の面には短かった。日中戦争が勃発したばかりだった。いつ召集令状がくるかも知れぬ運命下だった。厳格な父慈善には内緒の密航だった。将校としての装備である軍刀・背囊・双銃・ピストルもまだ準備していなかった。熊本の家から台中の留守宅に、やいのやいの……いつてきた。その返事に困った敏子から、父宛ての返事の電文の文案が高野山まで進々と飛んできた。

イ、ミナゲンキ シンバイ イラス  
トシ

ロ、ゼンメイ ルス ミナゲンキ ト  
シ

ハ、〇〇〇〇〇〇シユツチヨウクタク ミ  
ナゲンキ

この敏子の苦慮におんぶして、夜の食事に般若湯をとり、清水・栗山・池田とメイトルをあげ、上代から現代までの覚えてるほどの詩歌を尽く朗誦する暢気だった。あの日戦争はまだ文字の下に汲しえた。

四年半前、第一次応召で上海への渡航のときも、さして変らなかつた。戦勝の思いに酔って甲板に立つと、ふと和魂が思い出され、山田長政の勢威が偲ばれた。

### 存在万才

浅野 晃

キツネ 君は存在する  
タヌキ 君は存在する  
イタチ 君は存在する  
ヤマネコ 君も存在する  
マダラカは夜行性で、存在する  
ハマダラカはマラリヤを運び、存在する  
ツエツエバエは臍り病を運び、存在する  
アメリカシロヒトリはヒトリガ科に属し、存在する  
コクモリ ヨタカ サソリ  
ノミ シラムミ ナンキンムシ  
君も君も存在し、存在する。消滅するその日まで  
わたしらはめいめいのいのちのしるしをつけ  
た同時代者  
君はクラゲでありイソギンチャクであり

ナメジクラでありサダムンであり  
ダニムカデ、そして存在する  
かくわたしが存在するとき誰が知らう  
いかにわたしが偉大であり卑小であるか  
を  
わたしらはその勝利をいくたの敗北で贖つ  
た  
その光盛をいくたの貧困で贖つた  
創造とは、その創造王の大火焔  
いなむしろ火焔のなかの色や色  
転生、転生、転生して  
いまここにわたしが相会するとき  
存在することはおれたちの不朽の盛事だ  
われらは次の生でも、うれいことに  
またまたこのやうに出会ふであらうよ  
出会ふことで存在の秘義に到るであらうよ  
存在万才！  
すべての種と個に光栄のあれ。

彼らは物ねた、徳の民なき。  
彼らは誇りなき純潔の彼方と  
大いなる空と陸とを望み見て、  
船楫へがたかりければ

「八幡大菩薩」の旗書き立て、  
「三浦しづめ國々へ遠く征で行きぬ。  
……」  
この第一次応召の日には、遠征にまだ茫洋

### 往診

浅田 二三男

近所の秀やんがギョクリ腰をやった  
人一倍のさばり者だが  
なんにもせずに家でごろごろし  
もっぱら子どもの守ばかり  
ギョクリ腰なら  
こちらも先年経験すみ  
知人にきいた何とかの法で  
このごろ毎日秀やんの素人療法だ  
患者をねかせて  
足をひいたり背中をおさえたり  
五反の田畑と土方仕事で  
一家五人を養つてる秀やんの  
やせ小がならならは  
押さえつげるとポキポキという音をたて  
足をひくるときは  
そのくまに閉口するけど  
いつのまにやろ力が入り

得た。  
その日と同じように隅は群れ飛んでいる。  
しかしその日と違って輸送船はジグザグの油  
こちらはびっしり汗をかき  
それでも家内  
——もう往診の時間どっせ  
などといわれてみると  
まんなら悪い気持はしない  
籠車をポケットへ入れ  
——往診で  
——往診や  
という  
とたんに秀やんごろんと横になる  
まるでサーカスの動物みたい  
そのくせせんだったのは  
治療のやりかたの順序をまちがえ  
患者の秀やんに教えられた  
——人助けどすがな  
——家内はいうが  
困ったことには  
とっくに治ったはずのこちらの腰が  
なんだかまたまた痛みだした  
さてこの治療はどうしたものか

航をしている。潜水艦の喫撃を避けるため  
だ。航路も遙か西方へ迂回して済州島沖にたか  
かった。ここで蓮田は輸送船にオキナガタラ  
シ姫——神功皇后を招き入れたのである。海  
の魚が新羅まで御船をかいて渡ったとい  
う、古事記の故事にあやかるためだ。  
遠つ祖、足姫神、神つ世に、連須佐之男  
の大神の、い渡りまして、尊き、たか  
らのたねを、蒔き生かし、治めたまへる  
栲布の、新羅の国を、女神、たわやめ  
ながら、生弓、弓腹振り立て、雄たけび  
言聞ひましし、天照、大御神の、荒御魂  
軸さきにまつり、わたつみの、魚の悉  
大御船、いたさきまつり、たちまちに  
陸をも乗れば、事逆の、国主どもがお  
ののきて、つかへまつりし、そのかみの  
これの破を、船並めて、〇に向ふ、いく  
さぶね、ここにもとほり、ぬき向けて  
いはひ行くらし、みはるかす新羅の沖の  
済の、名に負ふ島の、夕照の、浪に映ら  
ふ、山のさやけさ

蓮田はこのところ「古事記の神々の荒ぶる  
ばかりのさかんさ」を思い、「神ながらの古  
伝のころこばを振るおひおこし言葉のさき  
はひをさながらに招き致す」ことをひたぶる

に悲願して来た。和隨に代えて今回は神功皇后をお招きしたのは当然である。「軍を整へ、御船を雙めて、度りいでます時に、海原の魚ども、大きな小さな、悉く御船を負ひて渡りき。こゝに風浪盛りり吹きて、御船浪のまに／＼ゆきま。かれの御船の波、新羅の國に押し誇りて、既に國平らまで到りき」(「吉原」)。まさにこの調子で、東部スندگان列島に到り着くことを願ったのだ。この心根は神頼みに通つてゐる。しかし、それは小心からでなくて、すべて神のおほしめしのまま……という、一種荒涼の精神である。破れかがれの神風連のあれである。その心緒は、蓮田が話の合う若い推尉と皇國の歴史を語り合つた後でのもした、次の歌にもよく現れてゐる。

すめ神のしらせの國は思ふ毎に尊くうれしくおらび泣くべし

悲しくする勞泣には涙がある。しかしうれし泣きには反対に空虛が感じられる。この荒涼の境涯では、文學はすでに戦争の下に沈没してゐる。

蓮田の文學にかかわる思ひは、もはや僅かに妻子の思ひ出によって留められて……と

いってよかつた。

みやこの妹がおもかけあかねさす朝雲の雲に思はゆるかも  
こゝに出て凡には言はずしかれどもこゝろは深くにははざらめや

朝あけの雲で思ひ出される、東京に残してきた妻の面影……。それは楊ひび色の朝雲のように、広く、匂い貴い。夜來の雨で海の上りに印象された二重橋前。いま見はる海の大海岸。敏子はすでに抽象された面影になつてそこにひよびようびようと呼んでゐる。

妻よ、この大前に敷かれたる  
さざれ石のうるはしからずや  
汝が手に一にぎり  
拾ひて

われと汝と分たん

この言葉少い命令も、敏子は「ええ……」と万事が諒解できた。A汝が手なほは稚子らにあつてよという願ひには、もはや眼の色だけで応えれば、充分二人の胸に問ひと答えとが結びついた。Aことに可から言は言はずひである。そういえば門司で書き送つた内地最後の手紙にも「ステベ申サマ故……」と書きだしてゐたことを思い出す。

### 桶谷秀昭評論集

## 近代の奈落

#### I 北村透谷論

思想的動向の動向 / 情況の急落 / 内部生活 / 自然 / 死 / 詩的根柢

日本後發の八四種 / 明治の精神 / 美における實質 / 思想 / 民族の情勢 / 唯日本にこのころ

戦争の体験と戦後思想 / 越川信夫論 / 日本知識人の問題 / 四國天皇制状況下の文學 / 維新思想の文學的展開 / 日本維新 / 言語とつづ / 美とは何か I について / 美思想 / 尙向文學思想 / 島村雄雄断片 / 記述思想

¥ 980

東京朝野書局区南池袋一七七一三  
国文社

しかし速く思ひをやる海原も荒れ狂い、刃のように怒り立つ波は、匂わしい思ひ出を断ち切る情ない日もあった。

海原の火き波立ちあらぶりて泣かまくはしきますらをわれは

をはかみのごとくきくかも  
大いなるいささのどよみ思はへて見の林のゆらぐふなばた

原で摘んだ花枯れよとままよ  
やりたいあの娘のぬい袂

赤いエプロン映した池は  
水の中から火が燃える

そなたのくちは香敷の花、  
眼は夜のともし。

蝶に夜なりたやも、そなたを過うて。  
いっせ喉になり焦がれ死なう。

#### 六

いくらそなたが笑しくても  
花とき過ぎれば香は失せる  
さりながら  
おれの心に焼きつけられて  
一生変らぬ影がある

## ランダイ

— パシエトク語民謡集 —

森 亮

アフガニスタンの一部にパシエトク語といふイラン系やや古い形を伝へてゐる方言が行はれてゐる。「ランダイ」といふのはそのパシエトク語の二語の定形詩で、第一行が九音節、第二行は十三音節からできてゐる。「ランダイ」は作者の分らない民謡で、相当多数のものがあるが、採集されて書物の形にまとめられてゐるものは歌冊に過ぎない。

今その数少ない中の一冊、ペーワナー氏採集本(ペルシア語訳、英語訳付き)から興味を湧かすに民謡調を基調とする邦訳を試みたもの一部を発表する。原詩に近い味を出すためには余り癖のない口語で、し

いまわたるこの海原にしきつく海のい  
くさのいさましまかな  
あたのふねあまた沈めしむいさき

かも何らかの民謡らしさを匂はせる訳し方をしなければならぬが、その方が難事業なので、今回は易きに就いた。この民謡集を貸与された蓮田鉄男氏はパシエトク語に精しく、私の質した幾つかの疑問に答へて下さったが、拙訳の自覚した病弊である原語からの遊離・逸脱は英訳者(イブ・トラム、シャリー・フイー氏)や湖田氏の解釈と無関係のものであることを両氏の名譽のために断つておく。

アフガンの母の乳房で育つた吾子が  
胸振るはで何振るふ  
剣打ち合ふかくさら  
後れは取らぬが  
天命相手や負け戦

#### 二

三

しかしこの勝報は虚報だったのだ。蓮田が門司で乗船した十一月一日の戦開があったのだ。南太平洋はタロキナに大規模な上陸を敢行する米軍に痛撃を与えたため、延百二十機の空襲をかけ、第五戦隊以下四巡洋艦、十二駆逐艦は速上陸を執行するわが陸軍部隊九百三十名を護送してタロキナ湾に到着したが、敵の迎撃するところとなり、上陸を中止してババクルに引き揚げた。敵の電探射撃で川内、初風の二隻を失った。翌二日はわが艦七機百七機は米駆逐艦一隻を沈めて僅かに報復した。又ババクルに米襲した敵の二機をわが駆逐艦七機で迎え撃ち、奮戦し、敵の六割に当たる百二十機を撃墜して油空を下げた。しかし五日にはトランツからババクルに進航したが百二艦隊に二百の敵機が米襲、重巡四隻が相当の被害をこうむったので早々とトランツへ引揚げざるをえなかった(日本海軍歴史資料)

蓮田はこの真相を知る由なく、大いなるいささのどよみ思へて星の林のゆらくふなばたVと、まさに那須号一に送った船ばたの歓呼もどきの喜びを歌っているが、それはわが艦隊の船ばたに作製する敵の艦隊だったとは皮肉である。

この時最も安泰を約束されていぬ船上では

## パンツの歌

福地邦樹

ふる屋で 忘れ物の展示をしていた  
シャツやパンツや  
男のや女のや  
大きいや小さいのや  
セーターやら色とりどりの靴下や  
先年 少女たちに人気のある  
女の歌手が大阪の劇場へやって来たとき  
女の子がわんさと集まって  
階段からあふれて こぼれおち  
敵人が怪我までした  
そのときのニュースに  
それら熱狂的なファンが去ったあと

恒帯不変なものに特に心が寄るのであろうか。蓮田は古里に思いを走らせている。

ふるさとの駅に下りたちながめたるかの  
薄紅葉恋なりなく  
田に畑にみり足らへるふるさとの秋の  
けしきの恋らなく

## アオザイ

美堂正義

アオザイの裳が揺れながら  
走ってきた女は突然倒れた  
ニュースは暗転して華やかな酒場  
洋装の女達に突つてアオザイの女が  
男を相手にしながら嬉舞をあげてゐる  
倒れた女はどうしたのだらう  
弾丸に打たれて死んだのではないか  
酒場のコントラストが妙に落付かせない  
この土地を覆つてゐる青い空よりも  
なほ深い悲しみが  
淀みとなつて沈滞する

戦争とはなんだから  
人間とはなんだから

アオザイの女は倒れた

その後は知らない  
知らないからひどく気に掛る  
心にかかりながらどうすることもできない  
もどかしさ  
マンダロップの河岸に  
水を汲む女は

この古里の風物に寄せる思いは、さらに古里人にまで拡充され充溢する。はては古里に戦争の響りさへない  
また、日帯の本飯事か  
あきらめてゐるのか  
その眼は笑つてゐるが

私はアオザイの色を知らない  
その国の空のやうな色  
青く澄んだ藍色  
熱い太陽に向つて輝いてゐると  
そんなふりに想像する  
長い年月の間他国の侵略と支配を享受  
異民族との争ひに明け暮れる  
この国を歴史  
しかしアオザイは女を包み  
捨て去られることはなかつた

いま同族食み 憎しみあひ  
血を流し 傷つけあひ 殺しあひ  
信じることもさへも失つてしまつた  
愚かな人間罪業  
アオザイは血に深み  
泥にまみれ  
美しさを失はうとしてゐる  
歯車に巻き込まれ  
悲しみに深まりながら  
平和の方法を捉へられるだらうか

女のパンティが二つ三つ落ちてたという  
何故そんな物を忘れることが出来るのか  
私の高校でも  
毎年春に身体検査をするが  
シャツやらスリッパやら  
下着の忘れ物は  
きまつて女の子の方が多いのだ

女の方が物忘れがはげしいのだろうか  
それとも 女の方が  
些細な事に興奮しやすくて  
我を忘れるのだろうか  
女の心理の底に  
何かそういう要素があるのだろうか  
女は妙なところで  
不可解な面をもっているものである

忘れぬ古里は恒帯不変な姿としてある。  
それは心底に定着しているからだ。定着した  
薄紅葉は生淫色褪せない。羞らしいの色として  
いつまでも心に告いでいる。又、田や畑も  
思い出のなからこそ豊饒で実り足り  
田に畑にみり足らへるふるさとの秋の歌  
ふるさとの駅に下り立ち……Vの薄紅葉の歌

に血で連帯されている蓮田自らと、遠く距てた品一・太二・新天に寄せる愛憐の思いにも  
浸透する。これも恒帯不変を願う心の現れで  
なくてんであらう。

たまさかに船りしわれをなさげあるふる  
さとびとは迎へたまへり  
名もしらず歌も覚えぬ子どもらが我を送  
ると朝つとどへる  
この子らの中に幼き我も見ゆ遠くのこせ  
る子らもまじれる

見送りに来てくれた未知知らぬ古里の子等と  
いう「現在」の中に、幼年期の蓮田という  
「過去」をみつけ、遠く東京に渡ってきた子  
等という「未来」を展望していることは、時  
間的な血の連帯のなかに、己が生命を託すこ  
とからくる安心立命にほかならぬ。この思い  
はまた、やがて自決す前の蓮田の心懐にも通  
じるので、記憶にとどめおかれたい。  
しかし、この恒帯不変への願い、血の連帯  
による安心立命も、敵の潜水艦襲撃の報にも  
ろくも破られたのである。

某日午前四時頃にありけむ、敵潜水艦  
の襲へるとて総員配備につく、はじめての



## Watching the Light of the Lighthouse

Shizuo Itoh

Over the dark sea, what a tenderness

Of the green light of the lighthouse.

Flickering and circling

It wanders through my night,

All night.

And you give

My night

Many, many meanings,

Unspeakable,

Of grief and wishes.

Alas, grief and wishes, what a tenderness.

While nothing is there,

The green light of the lighthouse wanders

Through my night,

All night.

—Translated by Ken Miyagi

## 日本の詩歌 23

中原中也、伊東静雄  
八木重吉集

美しい真珠と適切な解説と正しい単語。直に愛されるにふさわしい詩集。

¥480

中央公論社

「こゝで島玉の間の中にてよきはひにまじ  
かか」<sup>1)</sup>とものありて、われも武者のい  
ち死すともいさぎよからむとて、殿をなす  
に託していでたちとのふるに、いかにせ  
るか我が水筒をもとめ得ず或は人のまがひ  
持て去にけるやとて、人の一つのこせ空  
のを浮袋にそへて附けたるを、事なくて復  
た船室に帰りにて装ひつけば、何事ぞわが水  
筒は早く腰によそひつけたり、さすがに  
うろたへたるよと笑ひて、

なかなか、<sup>2)</sup> 俄よそひの 老武者が 水  
足れる水筒、とりあまる 空の水筒は  
いかにか答へむ 死の大神に

「敵潜水襲<sup>1)</sup>」の聲に、艦内あけて周章襲  
撃するさまが眼に浮んでくる。幾段もある船  
倉の下積みには馬匹もいる。蓮田は將校であ  
るから、恐らく上部の船室が当てられていた  
であろう。甲板までの距離からいってもあわ  
てる必要はないのである。しかも八老武者の  
いのち死すとも……<sup>2)</sup>という自若とした覚悟  
が蓮田にあった。ゆうゆうと軍装をととのえ  
ていると水筒がない。よい話相手である歴史  
好きの准尉が、あわてて身に付けていったに  
相違ない。蓮田は眼があれは数に古事記の活  
をしてやっていた。八はめてはめてあなとお

どろけすめ神のしらせる園のおほきふること  
とVという歌までできていた。その歌のよう  
に、若い奴は八あなとおどろいてV蓮田の水  
筒を失敬していったのだ。見れば空の水筒が  
一個ころがっている。まさしく奴ヶきんの  
である。蓮田はそれを浮袋にくくりつけて甲  
板に整列した。ところが敵潜水襲が盛衰など  
ということがわかって、船室に戻って軍装を解  
いていると、自分の水筒はいち早く肩に掛け  
ていたことが判った。自若としていたつもり  
が狼狽していたのだ。もし水筒を二つも懸は  
って水死したとしたら、死神の前でなんと辯  
解したらよいのか？ 蓮田はこっそり照れ  
て突っただのである。

船はやがて台湾沖をジグザグに進み高雄に  
寄港した。青年の日三ヶ年をすこした懐しい  
島山である。

初駕のふるにかはりて高砂の島山のみど  
り真夏なすかも

蓮田の願裏に台中なるわが家の思い出が、  
縁も明るく蘇ったことは間違いない。当時彼  
は台中商業で「黒板に大きな文字で進め」と  
書いてから授業を始めた<sup>1)</sup>。昭和十一年、本田武蔵  
二郎<sup>2)</sup>（思）。内地から遠く距たつていても、額

に思をいたいだいたまうな希望溢れた日々であ  
った。大学時代の長い別居生活から久々に一  
つ屋根の下に結ばれて、困窮は無上に乗しか  
った。二児の母になって敏っちゃん(敏子の  
愛称)はいよいよ楽しかった。晶一は物心が  
つくに従い、善明自らとそっくりな気質を発  
揮しだして、恐ろしいだけに楽しさも深かつ  
た。太二の片言は理屈なしに可愛かった。  
笑ったり、叱ったり、たしなめたり、しゃべ  
ったりして食卓につく困窮……。それはこの  
世の存在の何にも増して輝やいていた。

銀も黄金も玉も何せむに妻子らと飯を食  
むし楽しき

## 村落

吉本青司

窓ききのサクラランボをついばむ  
小鳥たちと語しなから  
老いた村びとは 朝食の用意をした  
みどりの茶碗の中にある山莊に  
遅い太陽がかりを投げるまでには  
まだ、だいぶん闇があった

船上のつれづれのまま思い出している。

いでてゆく車の窓をや、さけて父を送り  
し子の顔忘れず  
子の母も知らぬ期までこれも彼も父に似  
たりし子をば忘れず  
頑ななわが性に似てわが父の性にまた似  
し子をば忘れず

品一が車窓をや、避けて立ったのは、いつ  
になく微笑む父が気味悪く、かつ面映ゆく感  
じられたからであらう。又、水泳の悲しみに

底が破れてしまったっているかのよう  
に  
深流はあわたたく走りま  
茶碗は いっまでも乾いていた

でも つねに溢れているのは  
透きとおった空であった。むなし  
ほどに遠く、そこには陶工がいた  
デイエス・コラルの狭い田んぼへ  
老いた村びとは出かけていく  
能が哲学者のようにのびていた

硬直して憐れんでいる自分を、凜然とした父か  
ら看破られるのが恐かったらだろう。蓮田  
には又その品一の心情がすべて読みとれて、  
それがうれしくて微笑んだわけだったろう。  
もし父慈善の西南戦役への従軍を自分が見送  
ったとしたら、品一と同じ姿、同じ表情、同  
じ眼差で駅頭に佇んでいたであらう。いや、  
生みの母の飯子さへ気付かない品一と純との  
相似……。それまた父慈善との相似にもつら  
なる。法衣をかなくり捨てて軍田に身を投  
じ、寺を省みること困難に走せ向った  
父。千余の兵を率いながらおめおめ他藩に降

明らかに八銀も金も何もせむにまされる  
宝子にしかめやもVの徳良を敬び歌ったので  
ある。徳良のこの歌は八風食めば 子でも思  
はゆ 粟食もぞ 眼突に もとん懸りて 安  
来りしものぞ 何処より  
寂しなぬVの反歌であった。この長・反商  
歌の心を蓮田は一つに結んだわけである。そ  
る二流詩人と断じていた。公宴の席で八徳  
良らは今は熊らむ子泣くらむその子の母も吾  
を得つらむぞVと歌つてのけたからであつ  
た。この徳良の體面のなすが、蓮田の個性と  
も、深婉ともいうべき「おほやけの精神」に  
触れ、反響されたからだ。そういえばこの  
「おほやけの精神」は東京駅頭での品一との  
別れにも如実に現れていた。彼は實際に立ち  
上るでもなく、手を振るでもなく、微笑を品  
一に振舞っただけで別れてきたのである。涙  
がなかったのではない。強いて微笑み続ける  
ことによって、それを眼差へ押えたのだ。父  
慈善は「万歳三喝強しく出発を送るべし」と  
教え道だったのである。涼しく送られるのもまた父の教  
育神一だったのである。

蓮田は東京駅頭で品一に与えた微笑の心を  
伏し、果ては斬首されたがゆえに、心及が  
かに武田耕雲を推挙しても、一般の輿論の  
士としての折檻を顔として付かなかった悔  
いかに折檻をしても、「悪いでした。」と免  
さいと謝ることなく、折檻を受けている純  
の方を泣かした品一。この氣質を惹きつめ  
ば「かたくな」の相似一点につきる。ともあ  
れ、蓮田が慈善・善明・品一の過・現・未三  
代の血の流れに相似性を疑視していること  
は、既述したが、恒常不変の願ひ、血の連帯  
による安心、つまり永世への生の祈りであ  
た……といっただいであらう。

## 朝

萩本家義

テレビの中で  
にわとりが鳴いた  
それをきいて目をさました  
夜明けの妻家のにわとりらしい  
総合テレビの朝の番組の  
この町裏に住みつては

かくて船はサイゴン港を経てシンガポール  
に寄港した。十二月十二日付で妻子に出され  
夜明けのにわとりも  
きくにきかれぬ  
あのさわやかな音階は いいな  
怠情なねむりをさます  
あのおんどりのうたは いいな  
ふたたび鳴くのを  
待っていたら  
こんどは わたしの頭の中  
とやの止り木で  
ふるさとのわが家の  
にわとりが鳴いた

ている次の手紙は、たぶんシンガポールから  
出されたものであらう。

「品一が読んできかせて下さい。

みんな元気ですか、寒いくといつてゐる  
ことですが、泣いたりしはだめです  
え。強い人になりなさい。お父さんのある  
近所の植物園にはお婆さんが勝手にあそ  
びます。おいしい果物があります。バナ  
ナ、パイナップル、パイナップル、マンゴー、  
マンゴースチン、ドラゴン、そのほかいろいろ  
、皆たべてみました。西瓜は日本のやう  
においしくありません。おまへたに山ほ  
ど送つてあげたいといつもお婆さんは思つ  
てますが、残念です。おまへたちも大き  
くなつてお父さんの行つてゐる所にきて下  
さい。品一は一番に来れるかもしれませ  
ね。体をしつかり鍛へて、勉強しなさい。  
日本がもつと強くなるために皆で頑張  
りませう。先日プールに行きました。海水  
プールで水がきれいです。お父さんも兵隊  
さんと高い所から飛び込みをしました。品一  
がめたらどんなに喜ぶだらうと思ひまし  
た。さやうなら、お母さんを大事になさい。  
十二月十二日  
（前年十一月九日）

「丸山君（注・丸山等）の方へ贈した前便  
（前年十一月九日）

刊「四季」第三号・発売中

評論 読書家と觀察者 桑原武夫  
 故木ノ魚……………杉浦明平  
 禽獣 虫ノ草……………山岸外史  
 ハンターの話……………丸山 薫

詩 山中冬……………山中冬二  
 生と死……………神保光太郎  
 死の網……………麻木越郎

夏草のなかに……………竹中 郁  
 そのとき……………塚山勇三  
 古い日の歌……………村中太郎

夜の歌……………小淵正孝  
 葉に種……………伊藤桂一  
 蛇……………長谷川 敬

小説 わが播磨よ……………高島川 二郎  
 座談会「立派道造」……………  
 中村真一郎・吉行理恵・他

附録 椎木の頂……………伊藤勢 康  
 随筆 萩原葉子・杉山一・丸山薫  
 会員作品 田中冬二・他

「四季」第一号・二号残部あり・  
 四季会員集巻中は編集部へ  
 発行所 東京市中央区日本橋三丁目三番五  
 株式会社 潮流社  
 「四季」編集部  
 電話東京九二七五番  
 〒千

果樹園 第一五〇号 昭和四十三年八月一日発行  
 毎月一回一日発行  
 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

は届いたのだろうか。栞装りはないか。ずいぶん分厚い。で不自出してゐることだらう。これは昼は大抵読、夜は何か一枚きつておれば寒くもない。休も元気が。毎朝体操と木刀振りや欠かさずやつてゐるし、食べものは十分ある。こまかい事に頭をつかふこともないので、肥えてゐる。脚走だといふのに、のどかなことだ。しかし、どこで正月を迎へるやら分らない。この便りがつてころは何時の頃かしらないが、そのころは行くべき所に落ちついて又便りも書けよう。それからの手紙はまだ駄目だから、次便を待つてからにしましなさい。くれぐれも体に気を付けなさい。隣組の方々へよろしく。  
 十二月十二日  
 (同明、敏子宛書)

この手紙によると、落ちつく先はまだ確定してゐない。それにしても、この日から一年八月後に、このシンガポールと眼と鼻のジョホールバルで、懇わぬ生涯の結着をつけることにならうとは予想もせず、蓮田は南方の珍果を賞味し、少年のように喜々と水しぶきをあけてゐる。  
 やがて船はシンガポールを抜離、ジャカルタを経てジャワのスタバヤ港に入ったのは、

果樹園 第一五〇号 毎月一回一日発行  
 昭和四十三年八月一日発行  
 毎月一回一日発行  
 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

# 果樹園

蓮田善明とその死  
 小高根 二郎  
 遠い友たちに  
 田中克己  
 木もれ日のように  
 吉本青司  
 くらい水 浅野 光

## 蓮田善明とその死(三)

小高根 二郎

佐藤春夫は次のように蓮田との邂逅を語つてゐる。  
 「その日も二三日前からマシンのホテルにゐた。山雨が降りたらんとして空ははくらく遠雷の音がつづいてゐた。これが僕には大禁物である。わけてもジャワの雷と来ては天地を響く勢で来るから閉門である。この前にも一度ひどいに出会つてゐるので、天候が怪しいと見ると、時刻が幸に適当な頃合いだから、雷を兼ねて敬儀のなかへもぐり込んだ。雷はだんだん近づいてゐるからとてもおちおちとは眠らぬが、それ

夢  
 タンダイ(二) 森 邦 亮  
 の海 伊 東 静 雄  
 記 憶 萩 本 家 義  
 書 眞 紋 中 野 信 子  
 簡 伊 東 静 雄

でもうつらうつらしてゐると、不意に入口の扉があげられ、明い外光を背景に誰やらつかつかと入つて来た。逆光線だから顔は見えないが、そのものごし服装どうして

知り合ひの誰とも思へない。それが遠慮なく闖入して来るのは益々不思議である。一瞬間夢ではあるまいかと思つたが、急にベッタから出て見ると黒い人である。インドネシアか印度人かそれともアラビア人か乃至はそれ等の混血である。それも互に鄭重に一札を交してのち、先方は佐藤先生でいらつしやいませうかと。言葉は顔に似合はぬはつきりした国語で、おや日本人であつたかと思はせた程である。この見慣れない男は僕が佐藤に相違ないと確めるとみどり色に近い國防色の

## 遠い友たちに

田中克己

わたしは今年の八月三十一日に満五十七歳となり、十月には三人めの孫が生まれる予定である。主ははむべきかな、若くして逝つた友たちよ。

毎日ねむりにつく前には祈りをとなへその直前にはきみたちをおもふわたしの左右には日々あたらしい人を見るが

もう友と呼びかはずにはおそ過ぎるしきみたちのことは日々忘れられてゆくわたしが忘れる日は王のみ知らせと祈りに近づくのみが、この文句は祈りには入らない。

高慢に近い者へとわたしも気がつくからだ。

防層屋の胸のかくしから一通のハトロン紙の封書を取り出して差出しした。封筒も用箋も大阪毎日新聞スラバヤ支局と刷り込んだもので、蓮田善明氏から僕に宛てたものである。僕はその封筒に蓮田氏の名を見出した時ふと蓮田氏が大塚の號誌で派遣された時ふと蓮田氏がお召しに召されたのだからと思つた。蓮田氏が陸軍士官であつたのを思ひ出さなかつたのは、まだ睡氣が本当に去つてゐなかつたからであらう。目を開いて蓮田氏にゐる事実を知つた。氏は僕の南方派遣後にもなく必死して南征の途々僕に会ふ機会を捉へようと昭南以來手尽くしたが、昭南の朝日南方支局では既に去つてジャバに向つた事を知り、ジャカルタでももう東部に去つたか聞いて失望したが、スラバヤでやつと滞在中の消息を得たが既に出発は明日夕刻に迫つてマランの地に到着の余裕もないから今、大塚の連船員がその地に向かふのを幸、二の書を託したといふ意味で、言外に面会を切望する意が溢れてゐた。僕は亦一たび相見えて君が行を壮んじたい意が大にある。……

翌日——たしか暮の二十九日であつたかとおぼえてゐる。朝九時にマランを発し

た。彼地の東京時間の九時は、内地の七時に相当する早朝だからまだ朝もやが晴れ切らないなかを、附近の農民らが行き交ふ路上、市の花市に花を運ぶらしい。東、朝露のうちに働いてゐる田園の風景をたのしみながら、一時間半の朝のドライブは爽快であつた。路の半分はそれと云つたかぬ程に「くゆるい傾斜の下り坂であつたは平坦な一直線の並木街道である。タマリンドの大樹の並木はいつもながらいい。スラバヤの黄金河畔の朝日支局では早々と遠路旅舎に電話をかけたらしい。蓮田氏は我が身の想像した旅舎にはなないから大塚の支局へ向ひ合せようかとも云つてくれたが、まだ時間はいま半もある。そのうちには見えるだらうと待つ事にしたが、時は刻々に迫るのに蓮田氏は姿を見せない。待ち違ひしたのは差支へないが、きのふの返事が間に合ふやうに蓮田氏の手に入つたかどうかを察しられたが、いくら色の黒い連絡員でもさう無責任ではあるまいと思ひ返して落ちついてゐると、十一時を少し廻つたころ、軍服姿に軍刀を掲げた蓮田氏が我々の居る屋内を眩しげにのぞき込んでゐるの

いから時々うかつかり忘れて出るので、大切なお忘れ物など通つかけられるのは不体敵なもので、などと思つて椅子についた。活版の三分の一は一身に關した一別以來的お互の行動、旅程などであつたが三分の二は國と戦つた國とするものであつた。蓮田氏は同僚や部下の勇敢をたのしく楽しんで酒つて、何しろかういふ仲間を相手ですから、我々のへたな頭でへたなかけひきをするよりはいつも突き込んだ方が要領がいいわけて……と云つた一句のなかに、い

にも蓮田氏らしい面目と覺悟を感じて今も思ひ出す。……行く先は無論よきはわかりませんが、いづれ小さな島ですから、食も住もすべて自足自給の用意がいらすから、大工道具やら、農耕の用具、野菜の種など買ひ集めました。すぐ簡単に手に入るものと思つたが、なかなかあちらこちら歩かなければならなかつたので、実は今朝おそくなつたやうなわけでした、という話もあつた。……

つて然も嬉しい征途に自分に合はうと心を勞しつてくれたのに対して何か恨をしたと思ひながら、何の用意もないのを本意なく思つてゐると、蓮田氏の語の一端で氏が夜更時計がなく軍務にも困つてゐるが坊間にこれを求め得ない一事をはしくも知つた。僕は自分の使ひ古したものはあるが手くひにあつたのを解いて君に使つて貰ふことにした。これは芳賀君が先年僕が潮江部隊に關して従軍の時、記念に贈られたものではあるが今日自分がこれを賣いて蓮田氏に贈贈するのは芳賀君の志を解いて生かすといつてもこれを無にする事になるとは思はない。それ故この時計の由来をも蓮田氏に語つて置いた。……

### 木もれ日のように

吉本青司

谷あいの数珠の寒暄が  
無名のまま自然に化して  
それがなんともかなしく  
むらの歴史をまきまきと見るのだった  
かつての家居のあとに  
この世のものとも想われぬ水仙が  
なかに野生化して咲きついでいるのも  
ふかくあられてあつた

△もつとはやく生れたかつた△  
と少女がいった  
△いいえ もつとおそく△  
といまひとりの少女がいった  
ふたりは橋木にまじつた墓石の上に  
クラクラ木をのつた  
RINNE という名を信じるなら  
みんなのものは回り合うだらう  
そのとき鐘は あなだかもしれない  
背いそらの聲から  
時間が果のようにあふれてて  
水仙の黄をぬらして

### 森本 忠 僕の詩と真実

「神風連のこころ」僕の天路歷程の著者の昭和十五年から二十二年までの五年間の激動の自伝……単に森本氏個人を語るだけでなく、こよなく時代を語つてゐる。

#### 目次

美しき日 / 青春の津波 / 新しく光へ出る  
激動の新しい友 / 坂中家の一別 / 坂中下の  
往来 / 実業家の評 / 藤原の / 激突のあひそ  
／ 同僚の友 / 一別 / 終戦

¥ 600

#### 日本談義社

四本 市東 坪井 町五  
製本 黒本 二一五 一五六 五番

を見つけて抱き入れた。腰の刀を壁にもたせかけながら、かうして外すのはいいが慣れない

の冊子も年とともに新らしいものに変へようとし新しいのを用意して来ませう。それにつけてもこれが魚腹に葬られるのを恐れずから御保存を願ひませう。これをお持ち帰り願つて同人の遺物でも見せて下さい。さうして蓮田は依然勇躍して前線に赴いたとお伝へください。といひながら窓外にうろふ日かけを見てみたが時計の三時半になつてゐるのを見てから、そろそろ帰つて出発の用意でもしませうか、宿は市外の営倉に兵と一緒ですが、この地にもあと二時間はかりとなりましたから、と勝手な札をすすると、壁にもたせかけた軍刀を腰間にかけて支那口に出た。僕が君の武運長久を祈ると、君は僕の平安を祝して再び勝手に別れ去つた。後を見送つてみると七八歩元氣よく踏み出してから三度目に拳手したのはあたりにもた富米氏が君を見かけて札を送つたに答へたものらしかつた。

(昭和十九年七月「文芸文化」終月号、佐藤大木道雄、スラブヤに於ける蓮田浩明追悼)

この文章の木尾で、蓮田が春夫に託した黒表紙の詠草が、彼の最後の発表作である「おらにびうた」である。これは春夫の「遺通」と共に「文芸文化」終月号に収載され、東京を出発以来の彼の動向と心緒を知りえたのである。もしスラブヤに於ける遺通がなく、從

## くらい水

浅野 晃

ここは河口である  
なんとといふくらい水だ  
河と海とがここで出会つた  
けれどなんとといふくらい水だ  
いつたいこれはどれほどの重いものを  
運んでゐる水なのだ  
叫んでゐるのが海で  
だまつてゐるのが河なのか  
重いのはあなた  
自分か重いからくらいのです  
あとからあとから星が降る  
月もなければ夜明けもない  
つてその詠草が蓮田の國葬に納つて彼と行動を共にしていたら、或いは後世に伝えられな

くらいのはあなた  
あなたがくらいから沈むのです  
それぢや關坐した職藝の前橋につつたつてゐるだけなのか  
それとも潜水したままで  
ここで消息を絶たうといふのか  
いつかどじやぶりの風の中で  
街の灯火を眺めました  
これが母といふものかと  
あなたはほづんといひました  
けれどなんとといふくらい水だ  
こんなくらい水があつてよいものなのか  
やつらの太陽はにせものだと  
口くせにいづつてゐたでせう  
孕んでゐるのです 太陽を  
ぼんものだからくらいのです

かたかもしない。というのは、その後には於ける蓮田からの通信の幾つかは、確實に魚

腹に収まつたと想定されるからである。

## 夢

福地邦樹

小学校の頃の私は  
虚弱で、よく胃を悪くし  
見る夢といつたら  
いつも、追いかける夢で  
暗い野道や、家の間などを  
悪漢につかまりそうになりながら  
逃げまわりつづけるのであった  
中学校では少しは運動もやり  
丈夫にはなっていたが  
相かわらず神経質で  
勉強がすんで眠りに入る瞬間に  
たびたび何かに襲われるさまになされた  
闇の中でひとりうめきつづけ  
誰も助けには来てくれないのであった

大学の頃から  
ひどく疲れた夜には

スラブヤを流つた蓮田が日向地のスンパ島の  
のワイカップに入浴したのは、明けて昭和十  
天然色の夢を見るようになった  
ジャン・コクトーの映画のように  
不思議な物語であつたり  
箱と踊つてゐるうちに  
いつの間にかやら少女に変わつていたりする  
幻想的な場面であつたりした  
そして、それら色のついた夢は  
大抵、明確に覚えていたのであつた  
四十に近くなつてきた私は  
あり夢を見なくなつた  
しかし、時に見る夢は  
例えば、蒼い海底を  
コバルトすずめとか  
ベラなどという色とりどりの魚達が  
群をなして泳ぎまわるような  
ブリズムの眼がねであつたりを見通して  
フツフツと色あいが湧きあがつてくるよう  
な  
そういう、動く色彩だけの  
コンポジションを  
見るようになったりである

九年一月一日であつた。門司を出帆したのは  
昨年十一月一日であつたから、丸々二ヶ月  
を要したわけである。インドネシアの小ス  
ダ列島の中部の島であるスンパは面積二万  
方キロ、今まで第十兵団の第四十八師団の一  
部が配備されていたが、その大部が東部のチ  
モール島に移駐したので、その後釜にすわ  
つたわけだ。この島の地形は最高七百メートルの森林  
丘陵地で海岸には椰子を主とする熱帯樹が茂  
つてゐる。住民はマレー族又はマレーバ  
族である。その数十八万、牧畜や紡績を營みチカ  
材を輸出する平和な島である。それにマカ  
サーの蛙跳り作戦の裏街道に当るで、ニ  
ュギニヤ北岸の死闘を思うと申訳ないよう  
な安全な警備であつた。

蓮田は到着早々、給料を家族に送る送金票  
の通知欄に、コバルト色のインキで次の便り  
をしたためてゐる。

「井頭公園の杉林を砂踏椰子の林、あの池  
が大洋、動物園の代りに、野生の猿の群、  
オム、ワニ、三尺とかげ等のいふところ  
にゐる。海には同様の大魚伊勢えび、なま  
こなど。くだもの事欠かぬ」

スンパの風物を井頭公園のそれにたくえて  
いる。井頭公園には家族づれで満足を享けた  
ことがあつたらだらう。

二月の送金票には次の歌が書かれている。

ふるさとほろくみ末因てしらうめの花  
をちらすたとよりしせいも

結局が判然としない。福地孫樹の意見では「たよりしせいも」でないかという。

三月の送金票には次の便りがしたためられている。

「品一、太二の進学祝と新天下駄でも買つてやりなさい。先日手紙を出したがこの送金は航空便とのこと故りあへずこちらの宛名と社健で居ることも通知券々手紙をたのしみに待つて居なさい。返事まつ。諸氏にも宜しく」

末尾の「返事まつ」の語順には、さかさか魚慮が逐じられる。船腹に積載された内地からの郵便貨物は、どこかの波止場に停泊しているか、又は空しう魚腹に葬られたかして、いつころにスパンまで届かなかつたようである。四月の送金票にはその魚慮が文字になつてゐる。

「まだ便りを得ないので、別に余り心配するわけではないが、いろいろ情勢も想像されるので、今日は瀬木の方に送つてみる。尚ほ今月は八拾円送るが、余つてゐるため

に送るの別で別に意味はない。自分は元氣だ。」  
こんな事情で、蓮田の宛名「濠北派遣船第一一九六二部隊島越隊」が、知友間に知らされたのは五月下旬であつたらしく、その通知

### ランダイ(三)

―バレットの酒長書簡―

森 亮

七

高い山々甜いだいたいで  
初は木の葉、花盛り  
神の恵みよ御山にみ習  
これも神慮か花笑ふ

八

春の花時、花より清い  
いとしいの娘が散りもする

九

類しほから黒子が小刀で  
ほじり出される貴め苦さへ  
おれの心を愛へやせぬ  
あの娘を思つて突りやせぬ

十

花になりたや荒野の花に、  
いとしい人から吹く風に  
かゆれ、かくゆれ

十一

旅商人の来しきは  
真珠売り売り履しの  
ゾーメル除に貴婦人の  
頬の黒子の数をよむ

十二

「こころ」が「まなこに言ふことにや  
「眼見る夜、わしや寝む夜」

十三

「まなこ」の答へが面白い、  
「心が始めた色恋を  
わたし涙で跡始末」

(つづ)

「かた」は「梁型」と解釈すべきだろう。「模様」という一般的な解釈でもさしつかえはないが、「梁型」とした方が味がある。藤とあるから紫色の花の穂を垂れる植物で、海岸の椰子樹の根方にも咲いてゐるためであらう。想像するその花容は、大柄な敏子夫人にほまことに似つかわしい。その肌艶な肉体をうつつと包む単衣に、花魁を置いて梁型にしている蓮田の面影が、うつに見るように浮かび上つてゐる。静雄が「その笑む唇のまことに美しいひと」(「神話」)と嘆賞したその面影を望望の思いで、麗麗色の海面を見やつてゐる蓮田が想い描かれてくる。その眼はいくかん潤つてゐる。愛嬌の情で涙ぐんでゐる。品一、太二、新天、三人は取つ組んで喧嘩したり、泣き叫んだり、仲良くなつたり、断つてくをしたり、げらげらと笑つてゐる。

をうけた少年三島由起夫は、次の便りで留守宅を見舞つてゐる。

「拝復、蓮田孫樹住所御親知被下、厚く御礼申上候。蓮田氏にも御社健の御様子、又御疎開中の御家族御一同様にも御変わり無之御由、大慶至極に存上候。爪哇には佐藤氏と御会見の由、定めし両雄、談論風発被遊被事と、遙かに想ひ参らせ候。早速中尉殿には御手紙光上申可候も、御返信等の節は何卒宜しく御伝へ被下度候。皆々様の御自愛を祈り奉り候。草々。」

(折簡)成程五月十五日東京本町東宝館六丁目五十五号少年三島由起夫宛送金票不可成候事はが

「こちらには未だにこれといふ病氣もせず元氣なり。そちらからの便りは未だ一度も手に入つてゐないので、昔元氣か、無事か、この返事に書いてはしい。又出発以来の要件を簡単に一通り知らせはしい。そろそろ暮くなつてくるが、去年のお前の病氣やら、まさかもし余若きか夫の三子のことと、さぞかし、いろ／＼起つてもよろしく、大きくなつてもよろしく、知りたく思ふ。

いので、敢て離れてゆくように……。

先の六月下旬に内地に着いた手紙の次に書いた便りは、送金票の通信欄のそれである。

「昨日初便として戸畑の兄の第一信をうけとつた。お前が瀬木に帰つたこともしれた。品一はどうしてゐるか。大変だつたらう。皆様によろしく(五十四送る)。」

蓮田は戸畑にいる次兄道明からの便りで、家族が帰郷したことを知つたのである。蓮田は自分に似た品一が、意圖地を襲つて田舎に帰ることを拒んだのではないかと心配したのである。帰郷後の動向が氣になるのである。

「四月二十四日付の手紙受取り、熊木に帰つたこと、品一の転校のことも分りました。品一がどうしたかと案じてゐたが、一緒に帰つてゐることで一安心しました。熊木、東京の皆々様によろしく、成城へもよろしく。」

先の次兄道明からの便りに次いで、敏子夫人からの初便りが着いたので、折返えし送金票での通信である。品一が成城学園から蓮田の母校・済々黉に転校していたので、ほつとしたのだ。その吐息が聞こえるようである。又、別の月の送金票には、次の愛見思慮の歌がしたためられている。

# The Evening Sea

Shizuo Itoh

A slow, sure evening dusk and incessantly swinging  
 White wave crests come nearer from the gray sea surface.  
 At the top of the lighthouse is turned on a green light,  
 unnoticed.

It takes a long time-until the light  
 Like an aimless, futile foreboding  
 Is made bright and brighter by the darkness.

But soon, how bored with the green light from the lighthouse  
 That turns too regularly and flickers tirelessly,  
 The sea will have to lie all night.

Translated by Ken Miyagi

の進駐などすでに戦術的な意義を失っていた。事実運田の属していた島根中隊は進駐した一年間に、たった二回空襲をうけただけであった。一度目は敵二機の機銃掃射をうけた。二度目は六機による機銃掃射と爆撃とをうけた。しかしその空襲も、島根中隊長の思い出によれば、次のように呑気なものだったのである。

「スンパ島パイン警備隊の時、海岸線に陣地構築を実施中、休憩と成り、愚生と運田氏と素裸に成り海の中にて水浴をして居る所に敵機四機が機銃掃射をしながら吾々を攻撃して来た。兵隊は工事中の塚の中に、平ガモの様にへばり付いて、誰一人として射撃しようとする者も居ない。愚生は突作に砂浜に飛び上り軽機関銃を取り上げ銃撃して来る敵機に向ひ爆タマ射撃をして居ると、愚生の近くで軽機関銃を以つて射撃をして居る者が居る。此奴、豪胆な奴だと思つて見ると運田氏が素裸で、フリ金の杖、敵機を射撃をして居る。敵機が飛去つてから好く見ると、愚生も運田氏もフリ金の杖砂浜に飛び出し敵機を射撃して居たのである。運田氏はフリ金の杖、部下小隊を集め、曰ク「敵機は中隊長殿と私のフリ金杖に吻着して逃げて去つた。中隊長殿と私が敵艦だ。

うまねりよさめし稚児のひとみして我も  
 さめしかうつるもの消し  
 いとまありてしつけきときはふるさとの  
 子の手子ほは十六なままで

運田は幼児の頃の夢でも見たのかもしれない。覚めた後で見る自然は、眼そのものが純潔に若返つたように、新鮮に見えたのだろう。それにしても、純潔な眼をした子供達が、むしろに恋しくなったのである。手を振り撫でさすってやりたいほど、切なく愛しく感じられたのである。これも既述したように、遠く離れていれば、そ初めて吐露した真情である。不思議な内身間の含羞……。あれが一人一倍運田は強かったのだ。

この愛児思慕の歌を運田が書いた頃、内地の植木町では、次男太二・三男新天が珍らしく自分等宛に書かれた父の手紙を読んでいた。品が交代りとなって代読したかもしれない。

「太二君も二年生になって元氣であることと思ひます。新天君はあひかはらすづるん坊でせうね。兄さんと三人で心をあはせてお母さんを守つて、お父さんがぬくてもりっぱな人になりなさい。兄弟三人で心と力を合せたらほんとうに強くなれます。四

十七七もうち入り時は三人ぐみになつてたかつたさうです。お父さんは元氣です。家のまはりの林にはお猿さんが一杯あります。豚さんも時々歩いてきます。一メートルばかりの犬とかげも、太二君の好きな河馬さんほほません。さやうなら。」  
(昭和十九年八月二十六日、海北忠義少将第一九二部 深谷東宮世田寺本陣 運田太二 新天九七)  
 「兄さんと三人で心をあはせてお母さんを守つて、お父さんがぬくてもりっぱな人になりなさい」というあたりには、すでに遺言のにはいりがない。

運田の最後の便りは送金簿に書かれた次の歌であった。これが植木町に書いたのは昭和二十年二月二十三日だった。この時すでに硫黄島にも米軍が上陸していたのだから、以後の便りは概ね魚腹の収めるところとなつてあろう。

海のごとつづみてくろき山なみにか、

りて大さ尾の空かす道をたどりつ、う  
あかはしのかけさす道

たへどひととがめせぬかも  
 いずれも機銃掃射の感がみなぎっている。海のように黒く沈んでいる海拔八百メートルの山麓、それが黒ければ黒いほど尾崖は

明るく大きい。その中でもとりわけ明るい光をけり手に投げているあか尾一。夜明けの明里。おのすから歌が口を奪いて出る。夜明けの歌、出発の歌だ。どんなに声を張りあげても、誰からもとがめられぬ。ただ一人ゆく道一本の道……。これは恐ろしい山麓駐留地のパインから、連隊本部のあったワインガバへ命令受領にゆくとき成った歌だ。行程八〇キロ。早晩に出発しなければならなかつたろう。運田は明けの明里を仰いで歌いながらいったのである。それにしてもこの歌は、半年後に彼を待ち受けている連隊が、先陣を立てて運田を歌つてしまつたような歌である。その一本の道はやがて半年後に通じるの思われるからである。ああはしのかけさす道をたどりつ、うたへどひととがめせぬかもV。

筆者はここに連隊本部からの命令受領を想定したが、事実スンパ島の北方のスンパ島にある第四十六師団司令部は、この頃マレー半島の艦運命令が降つたのである。というのは、米軍は小スンダ列島をおいてさきほりにして、ニューギニア・フィリッピンを制圧すると、一路ダラム・サイパン・硫黄島の花道を攻め上つていったからである。スンパ島へ

# 記憶

萩本家義

夢の坂では 杉の木の上に  
たそがれの細い月が  
定着して動かなかつた  
夢の中では 子どものわたしが  
一足先に坂をくだる母の後を  
泣きながら 追っていた  
祭の町からわが家へもどる途中だった  
大きなおもちやの汽車をねだって  
泣きながら 追っていた  
母はわたしが置いてきぼりにしきれない程  
ふきげんになってしまったのだ  
ふりむきませず  
前に行く母の姿は

暮れ残る道の白さに深い  
はつきりと黒かったが  
追っても 追っても  
追いつけなかった  
泣いても 叫んでも  
素知らぬ様子で  
母はもくもくとあるき続けた  
それも そのはずだった  
母は元でに わたしを残して  
千万億士のあの世とやらへ  
去っていたのだから  
坂の下の 武蔵野の  
淋しい村の片隅で  
さきやかな一つの石になっていたのだから  
夢の中でのかなしみは  
現実のかなしみ  
目がさめたら わたしのまぶたに  
涙がうすくじんでいた

（原稿目録三十四年号）

御前達が塚にへばり付いて一完も敵機に向  
ひ射撃をしなかつたのは小隊長とした残念  
至極だ。もつと重負を出せ。フリ金調旨終  
り」で爆笑をした事が有つた。

師団に転進命令が降つたのは秋であつた  
が、連隊が移動を開始したのは明けて昭和二  
十年に入ってからであつた。敵機と潜水艦の  
眼をかすめて、島伝いに移動する苦心は「黒  
本兵田戦史」(昭和二十年)に詳しい。

「二十年一月二十日ころから夜間八トンの  
鉄舟に二十四、五人を乗せ、ワイケロ港から  
六ないし八隻の編成で毎夜スンパツ島に渡  
りレンタに集結した。ここから約千五百キ  
ロの行軍だ。スンパツ・ロンボッター  
バリ島・ジャワと逐次海峡を渡つてよう  
やくジャカルタに集結した。

三月五日海峽で大荒一隻を撃沈された  
きは、十一人の戦死者を出した。ジャカル  
タからは師団司令部とともに軍艦「伊吹」  
で甲南につれてはつとした。患者などはと  
ても随行できないので、スンパツから野戦  
病院とともに軍艦「五十鈴」に乗せてスラ  
バヤに向かつたら、敵機と潜水艦の攻撃を  
受けて沈没し、四十六人の戦死者を出した。  
マレ半島ではタウンタン、ベナン、ガ

る、恰好な事件が起つた。スンパツからシंगा  
ポールに入港した直後である。  
「蓮田氏の部下が憲兵と喧嘩をして、憲兵

# 風 紋

中野 偉子

翔ぶ鳥の  
叫び声は  
うつとも  
うしろの空に残されてゆくものだ  
砂の森に  
あたしという鳥がいて  
あなたという風を待っている  
浜割のもえる  
砂丘のおもてに  
古い愛の外皮が  
おしひらかれてゆく  
その息吹に  
あたしの耳は固まらなくなってしまった  
サラサラと  
砂の浜が流れつつけて

いつのまにか  
両眼は  
見えなくなっていた

とり残された翼と  
風に刺ませた砂のかなたに  
いま  
同じ一羽の鳥影を見る  
からっぽの胸を抱いて  
あたしという鳥が  
鳴きながらうはむ  
おのれの砂灘は  
あたしの棲む

砂の森であつたが  
くれなすむ  
夕空に  
あなたという風は  
いつも  
昨日のそよぎでしかない

一ル水原地付近に後退、同地付近に防衛陣  
地の構築中終戦を迎えることとなる。連隊  
の全戦死者は百二十九人であつた。」  
蓮田は連年の地ジョホール・パール  
に辿り着いたのである。  
その頃、いかにも部下思ひの蓮田を物語

兵の処罰を要求して参り、当時の上村栄人  
聯隊長も致し方なく、中隊長と學生(鳥  
越)を招き、中隊長に於いて重謹慎を命じ  
てはどうかとの事でした。之れを聞いた蓮  
田氏は、直ちに學生の所に来て、部下の誤  
ちは小隊長である蓮田の誤りである。兵を  
どうしても処罰されるなら、蓮田も処罰し  
て下さい、と強引にやつて来た。蓮田氏の  
性格を百も承知して居る學生は「ヨシ、そ  
れでは今度の事件は中隊長である私が責任  
を負ふ」と申しますと、「いや、それはい  
けません。蓮田の責任です。」それなら二  
人で処罰を受けよう」という事になり、蓮  
田氏と二人で聯隊長、師団長に御詫びをし  
て、憲兵隊長に頭を下げ、軍高級副官に取  
り下げて貰つた事がありました。」(同前)

鳥越聯隊長の手紙  
蓮田の部下がどんな理由で捕虜を暴発させ  
憲兵に傷害を与えたかは不明であるが、少く  
とも私行によつて起つた対外事件に、真風の  
上司である小隊長の蓮田までが責任を負うな  
らともかく、鳥越中隊長まで巻き添えにした  
ことに關しては、いささか組織の節度を越した  
行為である。つまり、度を越えた自己犠  
牲の精神なのだ。この連帯感と自己犠  
牲の精神が、八月十五日の終戦の詔勅を契機



### 季刊「四季」第三号

評論  
 読書家と観察者 桑原武夫  
 歌木ノ果……杉浦明平  
 鳥獸・虫魚・草木……山岸外史  
 ハンターの語……丸山 薫  
 山 桜……田中冬二  
 生と死……神楽光太郎  
 死の網……阪本越郎  
 夏どり・夕暮……竹中 郁  
 夏草のなか……大木 実  
 そのとき……塚山勇三  
 昔い日の歌……村中瀧太郎  
 夜の歌……小山正孝  
 夜種抄……伊藤桂一  
 蛇になつた指……藤野野矢

小説  
 わが婚祭よ……長谷川 敬  
 座談会「中立道」……  
 中村真一郎 吉行理恵・他

随筆  
 権木ノ果の項へ伊藤整・坂本越郎  
 随筆：萩原素子・杉山平一・丸山薫  
 ・田中冬二・他  
 会員作品  
 「四季」一号・二号残部あり・  
 四季会誌集報中半部は編集部へ

発行所 東京都中央区日本橋町三の五三  
**株式會社 湖流社**  
**「四季」編集部**  
 電話東京九一三七五番  
 郵政掛一五二号

Y 千 380  
 月刊一冊

果樹園 一五二号 昭和四十二年九月一日発行

果樹園 一五二号 昭和四十三年十月一日発行

（毎月一回）発行 池田市石橋二丁目六十五 果樹園社發行 印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

## 果樹園

第152号

蓮田善明とその死 小高根 二郎  
 石 仏 美堂正義

わが折り 浅野 兎  
 日 記 田中克己  
 お け 福地邦樹  
 鳴 の 無 吉本青司  
 夜 の 雨 萩本家義  
 編 集 後 記

石 仏

美堂正義

### 書簡 (藤井嘉子宛一通)

伊東 静雄

に暴発し、敗戦によって惹起した幾つかの代表的な悲劇の一つとなるのである。

昭和二十三年六月二十九日、大阪市阿倍野区北畠阿部野高等学校伊東静雄より、大阪府中河内郡栗町大地八（一四藤井嘉子宛）はがき。

先日はお葉書ありがたう。中学校におつこめのお由、大変でせう。初めはお疲れなさいとせう。私は今度アベノ高校（目下は住吉高校に同居）に転校しました。もとのアベノ高女の後身です。時も少しづつ書いてみます。元氣です。お暇の折にはおしりしにおいで下さい。水、土が暇が多いです（三時ころまでです）。

お尋ねの雑誌は私の手ほらで放つたら少し私にいます。津田さんと云つて女尊国文出の若い方がをられます。あなたと同期か一年以上位の方です。

このころ私の女の子さかんにお掛けいこしてみます。

果樹園 第一五二号 毎月一回二頁発行

昭和四十三年九月一日発行

発行所 湖流社

定価四十円 送料二十円

### 蓮田善明とその死 (五十)

小高根 二郎

筆者も終戦時は蘇州なる江蘇省連絡部におつた。正午に重大放送があるというので、金子大佐以下中将・下士官・軍属・それに兵である筆者らは肅然と待っていた。定期、沈痛な、そのくせ妙に驚愕な効果のある音楽が流された。が、オキ波瀾のような雑音が混入し、巻きかえた。丁度、玉音に支海漣の波濤が乱入した感じだった。全身を耳にして、雑音が意味を分析しようとしたが、無駄であった。結局、なにがなんだかわからないうちに放送は終了。あの放送音は、はたして陸下であつたらうかどうかわからないが論議に不

た。浮世離れのした抑揚からして陸下に相違ない……と結論されるに、さして時間を要しなかった。それにしても徹底抵抗の詔勅だろうか？ それとも終戦のそれだろうか？ という論議、意見は二分した。が、それも後者の結論に達するのさして時間を要しなかった。と、いうのは、宿舍備え付けのラジオについていたからである。その上、三日間にわたる蔭介石の布告が放送された。中国は大国の権威をもつて敗戦国日本の暴戻を敵してやれ……という趣意だった。その意味は謀略としては真に迫りすぎていた。そのうち上海の新聞社中報の屋上から「山河我返」というノボリが突然掲げられ、敵勝祝賀の狂行列が敢行された。近くにありそだ……という兆

編集後記

七月八日、小島晋長氏から、蓮田善明とはいつたことになつたか。一文書氏氏は毎月新聞や書評はほとんど読んだが、蓮田の士であったので、議論を感ずり読んでみた。蓮田の由の了解を頂戴した。ありがたうことである。善明が中国で因文書界、文藝界に活動したことは、蓮田は中国で因文書界、文藝界に活動したことは、蓮田は中国で因文書界、文藝界に活動したことは、蓮田は中国で因文書界、文藝界に活動したことは……

小さな人も在んでゐない入江から入江、曲りくねりながら見えかくれしながら、部落から部落へと血管のやうに、青い草や雑木のなかを流してゐる。

立ての底。ありきたりの道標神も知られぬ長い年月を語る音に響はれ、既に顔もとに残つてゐるが、微かな笑ひが口もとに残つてゐるのを伺ふ。浦田の細々と続く道、青い海の反射も木の下には薄暗い。供えた花も腺香もなく、忘れられた石仏。嘗つては通行の安全と落石をまぬがためか折り、新しい道がつき、道の中に雑草が生へ、通人もなほ道、そして人から忘れられ、石仏も忘れられて、苔着してくつくれるだらう。その日まで有仏の童顔には微笑は残つてゐるだらう。

はずであつたのである。敗戦なら敗戦であらう。しかし中国戦線では敗けておらん。よろしく天皇を迎え奉り最後の戦を中国大陸で戦うべきである……という迷論も出た。いや、身はたとえ群盜になり下つても、太割を根柢にして抗戦……という高説も出た。これらは下士官や軍属の提言であつた。大学出身の兵である筆者らはこの提言に乗らなかつた。敗戦は悲劇さわまりないが、軍隊という下克上の組織の崩壊は歓迎であつたからである。

人、その立場と所とで、敗戦のうけとりかたが違つた。これはおむえぬ現実であつた。労働員の監督役を、南大阪で塚原野や工場の勤勞員も監督役をやつていた中学校教育の伊東静雄は、茫然自失するに止まつた。彼は下駄身体の調子が悪くて休務していた。そこに近所のおばあさんが陛下の重大放送があると知らせにきた。門扉の扉にとりつけたラジオで、平和で無智な村の人々と一緒に聞いたのである。

「ゴツダム米約交話のお言葉のやうに押されたやうに……いふのはラジオ雑音多く、又お言葉が難解であつた。しかし「降伏」であることを知つた瞬間茫然自失、やがて後頭部から脳部にかけてしびれるやうな硬

直、そして涙があふれた。……太陽の光は少しもかばらず、透明に強田と畑の面と木々とを照らし、白い雲は静かに浮び、家々からは炊煙がのほつてゐる。それなのに、涙は散れた。何の異変も自然におこらないのが信ぜられぬ。」(伊東静雄日記)

静雄が茫然自失できたのは、身をめぐくる環境に、抵抗し或いは防衛すべき何物もなかつたからだ。橋川文三は「それは一つの信仰の孤獨な絶対さとその挫折の絶対さを同時にある途を絶たれ、自ら途なき記念碑と化する運命に引き渡された」(『静雄』)といつてゐるが、茫然自失できただけでは福だつたのである。外地にあるものはそうはいかなくなつた。すぐさま環境に抵抗し身を防衛せねばならなかつたからである。中国は既述したように蔣介石の布告があつたのでまだしもよかつた。白人人種、肉食人種と接触があつた地域は、会田雄次の解説を借りるまでもなく、苦烈であつたのである。

ジョホール水源地付近で、英印軍やマレー士民軍に備へ、防衛陣地を構築中に終戦を迎えた蓮田らの連隊が遭遇した環境もまた、苦烈であつたのである。転進以来、軍司令官は板垣征四郎大将、師団長は国分新七郎中將、連

隊長は中条豊馬大佐に変わった。上条大佐と島越春時氏は発表したが、それは大佐の遺族の名義を慮つた偽名だつた。しかし大敗を誇る熊本隊の士気は旺んであつた。終戦の詔書は、天皇の御命令であるから、これを受けつかなるまい。ただし、万が一、武装解除が直接連隊軍の手で行われたら、天皇が戦争責任をなされるやうな晩には、軍の独自の行動として、板垣大将をいただいて最後の兵まで抗戦すべし。そう、青年將校の意気は燃えていた。計画は極秘裡に建てられた。蓮田の上司であつた島越大尉は連隊副官となつてしたが、彼の手によつて抵抗隊の編成が作られたあつたのである。蓮田はその部隊の大隊長に擬せられていた。

この不穏な空気を新任の連隊長、中条大佐は察知したのである。逸速く下士以上を連隊本部の奥に当る山上の新王宮(山下恭文大将がジョホール渡河作戦を指揮した所)に集め、軍告別式をしてから訓示をした。その訓辭の中に青年將校の憤激を買つた言辭があつたのである。島越副官の記憶によると、「敗戦の責任を天皇に押し、皇軍の前途を諷刺し、日本精神の壊れを説いた」というのである。島越副官はその措辭を時期尚早だと判断したが、蓮田は中条大佐の職業軍人らしから

ぬあまりに見事な豹変と家筋がりに、心中煮えくりかえるものを感じたのである。その上、中条大佐の日頃の言動に不審な点が多かつた。大佐が上海から有任するや、「自分宛の郵便物に金葉」といふ宛名でくるのがあつた。これには少しづつあるのだから承承してくれ」と、島越副官に言つた。後になつ

て考えると、中条大佐は対馬の出身であつたから、或いは少年時代に朝鮮から渡来し、中条家の養子になつたのではあるまいか。つまり金葉と真実の姓名ではなかつたのかと推測してゐる。そういえば大佐は分屯地の軍状を視察に行つても、日本の軍隊は相手にせずもっぱら現地人の出迎者の応待にいんぎ

んで、「いまにあいつらの世話になる時がくる」と、島越副官に述べたことがあつたという。即ち、スパイ容疑をうける言動が大佐の日営にあつたのである。

### わが祈り

浅野 晃

馬車は山麓の道をゆき  
小さな橋にかかり  
いまその橋をわたり終へて  
嵐の中に角笛がながれる  
雑草の花といふ花がそよぐ  
わが視野のそこへ馬車は過ぎた  
子供はまた手をふつてゐる

おれはおまへの父親を知らない  
おれが知つてゐるのはおまへの母親だ  
子供はだまつて手をひかれてゆく  
おまへは母親に抱かれて  
お宮まゐりもすましたし

五月の初節句には  
雁の吹流しもあけた  
グエトナムでもでても  
おまへくらははみなし子だ  
子供はわたしを見上げてうなづく

この輝やく青い天よ  
もつともと光をふらせ  
この子の小さな手をとつてゆけば  
やがてこの道も尽きよう  
あそこの三角屋根の建物の窓に  
顔が見える  
雲を渡くした顔が見える  
母を姉たちが山を見ながら  
ささしい歌をうたつてゐる

ああ八月の晩夏は黙し

道は尽きて尽きず  
むかし藤原仲二郎や岡倉覚三から  
いつたらゐるアシアの道  
いまわたしたちは歩いてゐる

無数の生死を生きては死んで  
多くのみんなと励ましあひ  
記憶を失つたはずやかきで  
いまわたしたちは歩いてゐる  
この子は泣かない、強い子だ  
かこしい子だ、勇氣もある  
この子がいつか成人し  
本当に母に会ふその日まで  
この子の上に熊天の冥徳のありますように  
今夜のうちに、わたしは  
エンタシスある柱の並ぶところまで  
辿りつくのだ

の奥と三乃う……と蓮田が決意したのは、玉

音放送の夕後——十八日である。彼は身  
辺の整理をしなげ、あれを思い、これと思  
つたらう。四十二才を一期に果てなければ  
ならぬが運命を回想したであらう。神風連の  
太田黒井雄は四十三才、加屋舜堅は四十一  
才。前者より一年早く世を去り、後者より一  
年長く生きのびることになる。それにしても  
俺はもともと早死だと人に予告され、俺自身  
も予感をした。早くも中学二年の時に肋腺を  
病み一年休学をした。広島文理大時代には、  
友人が「僕の手相をみて、四十六七か五十位  
の時健康に注意せねばならぬぞ」といつた。  
ばかめ、と思ひながら、急に目のうらがあつ  
つたつてきて、泣けさうになつた」(源平敏子  
二)があつた。又、事実、俺もその頃早死を  
予感して暗涙を呑んだことがある。

「数日微熱、今日眼科院にて受診、オオさん  
でレントゲン写真をとる。肺門リンパ腺の  
あたり稍やれてゐる。歩きながら暗涙を  
のむ。敏子、品一。

永遠に生きようとは思はぬ五十五まで  
妻子の顔でも見ておればこんなでもない  
ぞ  
何度五十とかせへともみじかくなつた  
のち

(日記一冊昭和十一年一月二十八日)

この青春の日の折りもあつた五十にも達し  
ない。その年から八年も早くこの世を去らね  
ばならぬ。しかし、それはもはや未練という  
ものた。神国日本の眼はギギ……と乳みなが  
ら閉じようとしてゐる。古事記の荒ぶる神々  
の高級に昇るさきはは雲間に引き揚げられ  
ようとしてゐる。遅れずに走せ参しねばなら  
ぬ。人、或いは運世だとあざ笑うやもしれぬ。  
あざ笑うものはあざ笑うがよい。運世こそ最  
も豊かに消える善う術だと長閑が暇暇し  
たところである。知る人ぞ知るであらう。  
それにしても中条大佐は何で討つたのかもか  
？ 伝統の日本刀で真一にせずばなるまい。  
蓮田は軍刀のサヤを払つた。家伝の名刀であ  
る。父盛吉の伝へたところでは、「加藤正正  
陣中二於テ働キノ太刀」という由緒ある太刀  
である。蓮田陣中ノ用意、之レハ自分兵士ノ  
具足ヲ着戴陣中兵士ト一同二斬入リテ敵陣ヲ  
奪取セザレシモノト云フ」(昭和十二年、敏子  
小振りの太刀である。陣中や屋内の乱闘には  
もつてこの長さである。小太刀の名人・千  
葉潤作好む。ただし軍刀に仕込むにはさ  
さか短かすぎた。従つて蓮田は刀身の油を懐  
紙で拭つた。腹の底までずん……と磨えるも

### 日記

田中克己

八月二十四日、朝刊に  
木山捷平氏昨日午後念道ガンのため逝去、  
六十四歳と。  
この先輩は昭和十三年高田寺駅の近くにお  
住まひて  
「メクラとチンパン」といふ詩集の著者なの  
だが

年に一篇しか小説を書かないのでおひまも  
承知して  
伺つて将棋してはしか負けたと思ふ  
三十年近くなつて再会した時わたしをお忘

た事件を思い出した。その原因は、甯事の主  
唱者であつた相沢中佐が、台湾は台北高等商  
業学校の配属将校に左遷されたからである。中  
佐は赴任に先立って上京し、人事担当の少将  
を陸軍省に尋ねて前したのである。蓮田は相  
沢中佐と同じ頃同じ広島県の温暖の空気を吸  
い、蓮田が台湾に移住して四ヶ月、まだ吸ひ  
馴染まぬぬい空気を、中佐も同じく吸わんと  
れだつた。

この日の夕刊にまた  
丸岡明氏肺ガンのため本日午前逝去、六十  
一歳と。  
この先輩の父上丸岡樫大八(仁父)とは歌の  
友だちで  
「なのりそ」といふ御玉尊の雑詠に歌をの  
せてもらつた  
そのことは堀長雄さんの十年をしのが会の  
席上で

申しあげて奥さんも承知だつた。  
わたしはガン・ノイローゼも遠のいて意け  
てゐるが  
ふたりの先輩をけふは悼んで眠る。

小川 国夫

### 海からの光

島田敏子、藤沢明、木谷共、野野村清が激  
する情な小説、文藝界の寵愛をうける。早く  
野野村清の小説に文藝界の寵愛をうける。早く  
野野村清の小説に文藝界の寵愛をうける。早く  
野野村清の小説に文藝界の寵愛をうける。早く

東京都千代田区神田區田町一ノ二六  
南北社  
¥ 680

のがある重い光だ。心臓のトキメキを伝える  
ように、ヤキは刃に沿つて走り、きつ先から  
稲妻して空間に消え去る。はがねの面に顔  
が映つてゐる。俺の顔だ。いや、俺の顔はな  
い。怒り悲しんでゐる顔だ。いっそや金剛巖師  
に見せてもらつた赤靴作の般若に似てゐる。  
巖師は「知恵を悪用するとこんな顔になる」  
といつたつた。般若になつてはいけない。文  
蔵作の延命冠者のように、自若と微笑んで  
いた刀身を横たえた。細く突つていた顔が横に  
ひしゃげた。まさに延命冠者だ。いや、敏子  
の顔だ。そうではない品だ……。邪念を払  
うように彼は立ち上ると、正眼に構へて髪  
がけに一と振り振つてみた。肩にずり……

して終つたのである。中佐も信従の絶対精神  
を破つた少将を刺したのだ。中尉の斬もまた  
信従の絶対精神を打破つた大佐の斬らんとし  
てゐる。なんという奇妙な因縁だ。だが待て  
よ、中佐は剣道四段の使い手だつた。それに  
反して俺は非力な学究だ。もし仕掛けるよう  
なことがあつたら、鞆目の恥を受けねばなら  
ない。いや、鞆目の恥を受ける前に、大佐に  
一刀両断されること必だ。國賊に連なやら  
れてなんとする。しかし討とうとして討たれ  
た事例はあまりに多い。しかし黒田伴雄然り。そ  
の二の舞いは真ッ平だ。長老上野聖吾の歎  
をいれ、飛び道具を起用せずばなるまい。蓮  
田は刀身をサヤにおさめた。

彼は皮サックから拳銃を取り出した。次で  
弾倉から弾丸を抜いてばらした。五弾を掌に  
載せると、その重量を確かめるように上下  
に揺つてみた。弾丸の集積はさ揺らぎしな  
い。小粒ながらずしり……。と重たい。生命を  
奪ひ取る重量だ。彼は一弾だけを掌に載せ  
てみた。これはまた、軽からず、重からず、  
まこと適当な重量である。ひやり……とした  
つがらな球体。彼はその表面を滑らしている  
油ごつを、布で丹念に拭つて置くと、掌の  
上では……。とははねてみた。球体が離れる利  
那と弾着する瞬間の頃合いな圧感、それはく

すぐるような感覚となって、掌の皮膚から、腕を駆け抜け、体内のどこかへ消えていった。それは快感だった。その感覚は弾丸にはねかえつた。「このいじらしい小っちゃな球体」。彼は弾丸を掌の中にヒシヒシと握りしめていた。その感覚は、一年十ヶ月前の「大前ののさいれ石」を呼び起した。Aが汝が手に二にぎり、拾ひて、われと汝と分たんV。敏子は胸を握り、親しく分ち持った玉砂利。その幾粒かは現在、将校行李の底に眠っている。神国日本は分厚い。すべすべとした形見別け……。いや、この金属性のさざれ石、玉砂利、まさに崩壊せんとする神国の一と柱なりと支えすはなるまい。よし、非力にして支えられずとも、支えんとする最後の努力をしなければならぬ。それは最善者としての義務だ。国文学にかかわった者の奉公だ。一弾。一弾。彼は心を籠めて磨きながら、次第に楽しい思い出に陶酔をしようとした。それもそのはず、彼には小球体に寄せる異常な嗜好と偏執があったからである。

広島文理大の頃である。たまさかに帰郷した彼は、品一つをき、弁当持参でビクニツクにでかけた。そのとき、空には二つ弁当袋に、親子で茶の葉を拾って入っていた。「茶の葉、子供、汗して、拾つて

衝動にゆずられた。

柿を一つなげてやろうと思ふけれどかけつけたばかりの子は開礼口で見送つてい

### おしげ

福地 邦樹

おしげは頭が少し足らぬ女である。七分ぐらいだとも、六分ぐらいだとも言うが、どうもよくは解らない。もう七十すぎの年でもあろうか、身体はすがる速者で、白さのまさったはつれ毛を掻き立て、左右のまなこが反拗しあっている斜視でこちらを見られると、村人は誰でも不安になるのである。といへば、おしげは会う人ごとに、相手の持つているおしげのような食べ物をねだり、底の果物を公然と所望し、それを素手に抱え持って二三十味わったあと、もらったお返しを二つ返るのである。それが全くの気遣いではないから、ちゃっかり計算も入っていて、常に自分の手元に饅頭や果物が、少しずつ残る仕掛になっているのである。そして時には、お金を借し

茶の葉つやつや草の中、土の中  
拾つても拾つても草にある茶の葉  
いちんち子供とひろつて弁当袋は茶の葉  
母ちゃんに便ひやうなく茶の葉のおみや  
げ

(日記一冊と九三三)

この「想ひ出」は善明自身の少年時代にも違っていたであらう。固い艶々とした殻に守られた茶の葉。土の上のいい、草の中といひ、ふんだんに仕付けられた天然の陰謀。無用の土産であるのに、弁当袋一杯詰めさせて、遠くまで運ばせる自然の計略。その冷たく堅い、ころころと自然の輪軸快感……。それにまよと引かかる嗜好が彼自らにあったのだ。

この茶の葉の思い出は、さらに仏手柑にもつながる。同じビクニツクで広闊に心を展いたときであった。

「四月三日、  
昨日、姉、トシコ、品一、途中から喜一  
さんも、二塚山から弁天山に上る。久しぶ  
りの快晴であった。

みづたが動き出したやうに、ころがりは  
じめた。ぶしゆ柑の孤線  
ころがり落ちてしたのもの、ころがりゆ  
く、木藪草叢

これは紛れもなく小球体の動態——投擲を  
さえ意図した発作的な彼の愛情だった。

てくれと強引にせがみ、それを決して返そう  
とはしないのである。

私の家も、おしげの家に近かったので、よく  
騙されたものだ。苗のトマトやら、イチジク  
やら、まくわ瓜やら。おしげは必ず支度をあ  
けて、大きな声で呼ばわって、そして正式に  
ねだるので、泥棒とは申しかわるである。  
ある夕方、私の家にも借金の中入れがあっ  
た。二千円借してはしいというのである。十  
年以上前の、まだ少しは金の儲ちがあった  
頃で、母が出しすぎるので、私が二千円渡し  
てやった。それでそれ以来、おしげは私に頭  
が上がりぬのである。

おしげは若い頃からそんな悪癖があったの  
だ、男前の株屋の亭主は何度も別れようとし  
て、だが、二人の子供はあるし、おしげに泣  
きつかれて追いかけまわされて、どうしても  
別れられなかったというわけである。

おしげは日蓮宗の信徒で、うち太鼓を持っ  
て薬行をすることも。いつか裏の川で、  
どこかの子供が溺れ死んだとき、おしげが必

ま黄なるもの、すつと崖に吸はれて転落  
した。息をのむ、たゞいつしに崖を  
転落しゆくもの、息をのむ」

(日記一冊と九三)

黄金色の小球体の仏手柑……。それは自らの意志からのよう、転がりだし、木藪や草叢を抜けて、崖に吸引するように転落していった。その行方、その見事な孤線を、息を呑んでじつ……。と凝視している蓮田の関心には、湯を盛すその実の喪失を惜む心ではなく、その実を失うことによって生ずる実への陶酔がある。茶の葉に対しては静態に対する関心だったが、この仏手柑では動態に対する関心となっている。

そういえば、小球体の動態への衝動は二三年前にも起っていた。秋休に帰省し、二三日の滞在の後、別れなければならなかった姉である。未嫁になるので、夫婦間で「送るな」「送りませぬ」と堅く約束されていた。にもかかわらず、発車間際になって、敏子は品一を背にくくりつけて駅に駆けつけてきたのである。蓮田は約束が守れなかった妻の愛情の深さに感奮した。妻の背から車窓の外にサヨナラを叫んでる愛児の姿に胸をしめつけられた。風呂敷に包んだ土産の柿の実を取り出して、開礼口の品一に投げてやろうという

いや、蓮田は小球体を投げるくらいで満足してない。それを奪い、搾り吸ることに執つて、自分と一体化しようという徹底した軌

死になってナンシヨウホーレンゲキョウと繰り返しながら、髪ふり乱してもう冷たくなっている他人の子の胸をいつもまでも強く撫でさせるのを、私は不思議に美しいと思った。おしげのお題目は、終りのゲキョウという所を、しゃくり上げて奇妙に強く発音するので、平仄はいは滑りなのだが、その時だけは少しもおかしくなかったのである。近頃は村も、新しい家が立ち並び、見知らぬ任人がめっきりふえた。おしげは年をとってきたし、懐旧の心も残っている。見え、おしげのやさしさも、おしげの思い出も、昔からの村人以外はあまり知らないのである。

心をあつた。それは正月飾りのダイダイである。

「先生(無頼無恥)を厭に三人で送つて、歩いて帰つてきた。その帰途に正月のかざりの櫓を三人で十六七も、家々の門から盗んで帰つた。低いところは僕と祐田君とで取れるが、高いところはだめになると、僕たちで手もとゝかぬところを後藤君が、悠々と左手でしめ縄を押へながらもぎとつてくるものゆかひだつた。持つてかへつたのは翌朝から榎海をしてのんでゐる。」

(金子平兵衛、昭和九年一月)

これは酔余の黒敷だけではない。黒敷でダイダイなんて呑めるものではない。まさに執心という嗜好である。

これら小球队に寄せる執心の羨しい思ひ出は、蓮田の胸の底からききなく湧いて出た。その執心は競争になつても消えなかつた。昭和十四年の中支戦線でもそうだった。「突砲声に促されて起ち上つて整列を命じたが、突砲に私は木匠から一握りの小石を掴みとり、ぬれたま、ポケットに藏めてゐた」。あの発作的な執心だ。その執心は昭和十八年の「大前のささ石」に連らなつた。又、大阪臥頭での伊東静雄との別れの直後、「ゆかりあらば……其をうけ玉へ」と密柑を静雄のまほろ

しに向つて投げつけた。小球体を投擲することによつて送つた、発作的な愛情であつた。蓮田は丹念に弾丸を拭つてからスビンドル油をたっぷり塗り、小球队の執心の思ひ出を一つ一つ破いたおすように、一弾……一弾を留め金に挿し込んだ。彼は改めて拳銃を右腰に握つて、引き鉄を二度引いて空を撃ちやぶつてみた。弾倉の回転が正確なことを確かめてから、彼は弾丸を装填した。万事、これによしも彼は願っていないのには……とした。眼は胸の中を自若とした覚悟を示すまじりに、暗れ晴れとした明るさに澄んでゐた。

八月十九日の早朝七時半頃、蓮田中尉は胸に腰銃をつけ、拳銃と双眼銃を袂に挿した胸に、背囊を負つた完全軍装で、ひよっこり副官室に現れた。手にはもろん好きな白の手套をしてゐた。鳥越大尉は「お早よう」と挨拶をしてから、おや、と思つた。蓮田が完全軍装で現れたからには、転任の挨拶か、申告でもあつたかな、と推察したからだった。それにしても副官である自分が知らぬはずがない。そう思い直して、なんというつたなしに二人は話をしていた。そこに補給中隊で手榴弾による自決者がでたという報告があ

### 三代に亘る精進朝日に読みつがれる全集

## 現代日本文学大系全九七巻

すべてオリジナル、すべて本物王様、みじんも影の無い複製。そして、読者な、しかも双方を引張つてゆけるのも、その品質、いさか古武士のとき、パツクボンに似てゐるであらう。少年時代に指導を受けた川村君の仕草が、この頃の文藝全集にはじめて現れてゐたのも、私としては大に喜びである。

三島由紀夫  
第二回 回本 発売中 第二回 回本 10月5日

井川竜之介  
島崎藤村

筑摩書房

¥ 720

東武東上線千代田区神田小川二丁目一八

つた。沖淵出身者。しかも二人である。すぐ処置してはしいという要請なので、鳥越大尉は立ち上つた。このとき蓮田も立ち上つて、「隊長殿へ(そう呼び習ひしていた)もし自動車でゆかれるなら、お供させてください。また話があらぬのです。」

「……」と、いった。しかし、あいに自動車が出たつてゐた。やむなく大尉は蓮田を後に残してオートバイに跨つて補給中隊に駆けつけた。鳥越大尉が自決者の後始末をして、連隊本部に戻つてきたのは十一時半を廻つた頃だった。蓮田はまだ待つてゐた。その間、彼は何

をしてゐたのか誰も確認者がいないが、「連隊長まで相当長時間に亘り連隊長を強く諷めたいならだ」というのが、功績係の後藤包軍曹の推測である。丁度、星條時なので、鳥越大尉の部屋で食会をする事になつた。河村大尉、田中大尉、高木大尉に、蓮田と旗手の塚本少尉を加えた六人だった。鳥越大尉の自決者の報告がききかけとなつて、話は自然と日本の将来のことになつた。

## 鳴無

吉本青司

こころは鳴無といふところ  
果まつた入江の岸  
思いがけない神殿がたつてゐる  
あたりはきれいに掃きよめられ  
出陣時式の揮殿のすがすがしき  
朱のさびた本殿の荘厳  
木彫の竜の飛翔する  
小造りの神殿に  
秋のけいはがただよ  
叙禮を祝う里人たちの祭礼が  
間もなくくりひろげられる

高木大尉は投げやるように、  
「高木大尉は敗けたんだ。敗けたからには連隊長が言われるように、もう天皇も、国民も、なんの区別もあはしはない。これから日本の子供達に、誰が一番えらいんかおね？と訊ねたら、おそらく藤井石と、ルメズベルトと答えるこつちやろ。天皇……なんぞで答える者は一人もいなくなるよ」といふた。蓮田は坐を正すると反論した。

司がどのいない揮殿に歩み入り  
真長の薄明のなかで  
しよしやなあなたに会う  
深く沈黙にも似て  
そっぽを向くでもなく  
嘆くでもなく、ただ実在するもの  
鳥居は入江に面し、道は  
そこら階段になり  
海に流れてゐる  
遊行の日  
あなたはこころ海に入るのか  
聖なる無常気さで泳ぐ子供たち  
ふりかえる  
そこはまったく古代であつた

「高木大尉！ あなたは士官学校で一体なにを學んできたんですか？ 有名な葉田なことは断じてない。日本が続くかぎり、日本民族が存続するかぎり、天皇が最高であり、誰が教えなくとも、日本の子供であるかぎり、天皇を至尊と讃へると、高木大尉はにやりとすると、  
「敗けてから、そんなことを言うても始まらない！ それはあなたの単なる理想じゃ」と、軽くうけ流した。

「敗れたからこそその必要ではないか！ 皇室中心に子供達を導くのは、変らぬ我々の責務だ」と、蓮田は無念の唇を噛みしめた。  
「冗談じゃねえ。はたして生きて帰れるか、どうか、わからんぞやなんだぞ。連隊長殿の話のとおり、くだらん理屈をこいて暇をつぶすより、どうしたら生きて帰れるかちゆう手段を、真剣に考える秋じやあるまいか？」  
と、高木大尉はたたみかけた。  
「生きて帰らうと、死んで帰らうと、我々は日本精神だけは断じて忘れてはならん！」  
と、蓮田は大声を流らせた。  
「その日本精神が物量にころりと負けたん

じゃ。いまさら何かが言わんや……じゃ。

日本精神の看板じゃアア、もう飯も食えんデ」と、高木大尉は肩をさびかや。

「まあ、まあ、まあ。飯がまずくなる。論争はそれぐらいにしてくれ！」

と、田中大尉から水が入って、後はいつもの談笑に戻って、つつがなく会食がすんだ。

鳥越大尉は、蓮田がまだ何かを話しかけたような様子をしてるのを、感じた。大尉の手許で極秘裡に進められている抵抗部隊の構成について、知りたがつてるのかもしれぬ……と思った。このとき塚本少尉が、

「副官様、軍隊統制の準備を唯今からやりますから、監督をお願いします」といった。

飛行機で飛来した團院宮春仁王殿下から、連隊長以上に終戦の聖旨の伝達が新王宮であった後で、第十九軍の軍旗を一括して昭南神社で焼却する手筈になっていたからである。

「よし、承知した。すぐとりかかろう」と大尉は塚本少尉に応答し、蓮田に向って下

さい。「あなたは今すこし私の部屋で寝込んで下さい。例のことで相談がある。帰りは自動車で私が送りますよ」といった。蓮田は立ち上る。

「連隊長はいつ出発されますか？」と訊ねた。

「もうすぐ乗用車で出発される……」と答えて、部屋を出ようとする。蓮田は例のしつこくまで、

「隊長殿！」

と、姿勢を正して声をかけた。その声を聞き流して、鳥越大尉は塚本少尉を追って、二階の連隊長室の隣りに当る軍医室へいった。

やがて中条壽馬大佐は、箱に納めた軍旗を奉持する塚本少尉を従えて、静々……と勝政を降りてくると、支那へ向った。車廻りには乗用車が待ちわびていた。扉は黒田登軍曹が開いた。大佐は車内に乗り込もうとして、瞬間……戸口で立ち止った。この時、黒田軍曹の背後から、躍り出た者がある。蓮田中尉だ。今まで副官室の窗外、死角になる場所を待ち伏せていたのだ。

「国賊!!!」

という蓮田の絶叫で、大佐は顔をめぐらすと、声の主を理した。そこを、蓮田は擬していた拳銃の引き金を二度引いた。二弾連発した。弾丸一、大尉のさざれ石、頼みにした小隊体は、大佐の右顎下から左頬に貫通した。朱に染まっどどど……と仰向けに倒れた。と

まさに、黒田軍曹は塚本少尉の手を借りて、湖死の大佐を支那國の小部屋に担ぎこんだ。「つかまえてアア!」「つかまえてアア!」と、

けたたましく叫ぶ河村大尉の音が何処かであ

して、黒田軍曹は支那前にとって限った。丁度、蓮田中尉は、車廻りの向うの築山に向

り、一散走りに走つて来たところだ。と、中尉は立ち止った。右手の拳銃の筒先が右コマ

カミに当たると、引き金を引いた。カチリ! 不発だった。黒田軍曹はすつ跳をいききえ

すれば、蓮田中尉を自殺行為から救えると思つた。しかし、上官殺りではいせん銃殺刑は免れろくない。いや、知性の高い蓮田先生のことだ。借従の筒先を超越してまで敢行した所業には、それ相応の原因と理由があつてに相違ない。その黒田軍曹は反省をした。丁度、向いの築山の上で兵隊が古文書の焼却をしていた。その連中が跳びだしてきて、もしも蓮田中尉の行動を防衛でもしようものなら、阻止してやろやという心理になつて

いた。不発と知つた蓮田中尉は、拳銃を持って右の手を水車のように廻しながら、さらに築山に向つて走った。それは追手を防く動作とも、二重筒を解く動作ともれた。二筒ばかり走るのを立ち止まり、再び筒先をコマカミに当てて引き金を引いた。今度は成功した。中尉の身体がくると右に一旋回すると、一尺ばかり血汐を吹き上げながら、ねじれて熱い大地にどう!と崩折れた。けいれんす

る左手には、遺歌を書いた一枚の葉書を、堅く、握りしめていた。内野中尉の記憶によると、「日本のため、やむにやまねず、奸賊を斬り皇国日本の柱石となる」という意味の歌だったという。これが蓮田善明の最後だったのである。

### 夜の雨

萩本家義

宵がすぎても此のトタンを鳴らしつづける雨に  
茶の間のテレビの前で  
耳を借しながら  
このまま、つゆになつて  
しまふのかと思つた  
孫はねむつたらうか  
まだ起きてるだらうか  
東京は深川高橋の  
親子三人ではせまざる  
アパートの一間で

あの子がきたのは五月の初め

蓮田中尉の遺骸は丁重に手当てをされて原隊の楊原隊に移され、戦友たちの手で火葬にふされた。遺骨は同僚の高村隆伍長が奉持して帰国する手筈になっていたが、英軍が遺骨の持ち帰りを厳禁したので、やむをえずシンガポール近くのゴム林の中に埋められた。

まだ庭に山吹が咲いていた  
—— おじいちゃん  
おじいちゃん

髪のもののみどなりも  
ようやく濃くもつと  
とどの初めた小鳥のひなの  
いとしい呂律  
そのおはあちゃん  
おじいちゃんの近くの灯りの下で  
いねむりをして

テレビの中では犯人のつまが  
刑事を刑事と知らないで  
一しよにお茶をのんでいた  
風が出たらしく  
緑光の背葉の雨戸にきやる音が  
雨にまじつてきこえてきた

又、蓮田が左掌に握りしめていた遺歌を書いた軍事郵便ハガキは、憲兵隊に没収されたまま再びと帰らなかつた。

この蓮田の最後に関しては、丸山学の「蓮田善明の最後」(昭和三十三年三月)と、それに不明なところを元副官鳥越長時からの指示(昭和三十四年九月)で加筆し、さらに元連隊長村重黒田隆の記憶(昭和三十三年四月十一日)、同じく元連隊長村重後藤包の二篇蓮田善明中隊長を絶句(昭和四十一年一月)で補い、相互に矛盾する個所を筆者が訂正補修したものである。ほぼ真相に近いという確信がある。

この日は朝から雲が垂れ憂鬱な日であったが、夕方から雨が降りはじめ、夜は霧にみる暗さであった由である。本部付の下士官の一人が、就寝前に外庭に出たところ、本部支團前から飛び立つ火玉を発見したという。前掲の後編は、「恐らく蓮田中隊長の弟が祖国日本に向かって昇天したものとと思われる」といつている。丁度、この日頃であつたらうか? あ夜は植木町の留守宅で敏子夫人はなんとなし庭の向うを見ていると、阿蘇の方角から飛んやくる両手に抱えるほどの大きな火玉を見たのである。よっぽど子供供達に教えようと思つたが、恐がらんとおぼしき思ひつたという。又、ある明け方かと眼を覚ますと銃光に

季刊「四季」第三号

評論

読書家と観察者……桑原武夫

詩

散木ノ葉集……杉浦明平

小説

わが婚後……長谷川 敬

戯作

「四季」一、二号残部あり

会員作品

「四季」編集部

発行所

株式会社 潮流社

〒

380 70

〒

編集室 九二七五番

軍装の蓮田が佇んでいた。「あら、お帰りのささい」と挨拶をすると、崩折れるよう身を沈めた。と見て、夢から覚めたということである。恐らく、夫人の脳筋に刻まれていた二重輪の完全軍装をした天衣が、後象として夢に浮び上ったのだらう。おもえば、あの広場で蓮田は夫人に玉砂利を拵え、三人の愛児に形見分けをし、自分では「いただきもだて」行く。三粒四粒」と戦地に携行したのだった。そのうち二粒は中条大佐の射殺に費消し、一粒は自決に用いた。三粒であったら丁度だったし、四粒だったら一粒余った勘定になる。それも二重輪による一粒の捨て弾を計算に入れるとちよつきりになる。まさに運命の數と言わなくてはなるまい。まさしくというものが、この地上に存在するものであれば、目が宿運を果した蓮田は、その由を告げに、骸子大人の夢枕に立ったのである。ちなみに、非業の死をとげた中条大佐は、英軍が鋭意探索する人物だったが、後日判明した。彼こそ、上海に不審着したドワリツトル東京空軍部隊の飛行士に、死刑を宣告した判司長、その人だったからである……と、蓮田の竹馬の友・丸山学の語るところである。

編集後記

八月廿七日、四半より信州の軍にいた。由多きのひまをい。中一：島尾健三とらし人物も連れて「罪」があつたが、伊東静也も出沒して、文筆作としてだけでなく研究資料としても貴重かつた。八月、東京ハイウェイ宮野中川英夫が来た。講談社時代に蓮田善明の教えをうけたといふ。三年前の朝日新聞「著者と一時期」の誕生の話を覚えていて、今四改め「著者」で「現代日本文学大衆」の広告で蓮田が採録されることを知つて礼を言ひきた。……とこの日。十四日、津早の上村徳氏から、桑原武夫さんが講談社発行の「四季」に五寄りの稿に落つて下つたと便りがあった。二十日、岐阜の片山武夫という人から便りを買つた。岐阜時代に蓮田善明から教えをうけたといふ。先の中川氏と同じく東京静野の太極に蓮田の作が採録されたことを知つて、「東郷」の非難を飲んだんといふ申出つた。抽巻の刊行についてはいしおしおしである。二十日、丸尾明氏が思いがけず来された。十九年、二十二年、東京静野で一緒に会つたことを思い出して、明氏の妹のサツキさんには書に採録された。本後象が有るのをしたので大書房をされた。田中氏の今度の詩による上巻と同様かつたのである。讀んで最善の意を捧げる。(〇)

果樹園 第一五二号(毎月一日発行)

昭和二十三年十月一日発行

発行所 果樹園社

定価 四十円 送料 二十円

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

果樹園 第一五二号(毎月一日発行) (毎月一回日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

果樹園 第153号

蓮田善明とその死 小高根二郎  
ランダイ(回) 森 亮  
少年の日 浅野 晃

スマトラ記 田中克己  
戴 帽 式 吉本青司  
日 内 記 蓮田善明  
身 内 愛 福地邦樹  
ふ な 萩本家義  
草 原 中野信子

蓮田善明とその死(五十五)

小高根 二郎

蓮田善明のこの異常な死が、内地の先遣や知友間に伝えられたのは、昭和二十一年もよやく夏になつてからであった。スラブヤで奇運の機をえた佐藤善夫は、その由を林富十馬に、次のように使っている。

「蓮田善明の死に対して腹立しいといふ氣持も表現も了解されないではありませんが、蓮田君としてはそれより外に方法もなかつた必然の行き方と小生は深い哀悼の感を持っています。人間の八月廿日、「哭蓮田善明」といふ一詩(外敵)を出してをききましたからまた見て置いて下さい。蓮田君

も内地に  
ゐても  
う四五日  
も生きて  
ゐたらま  
た何とか  
考へ方も  
あつたの  
ではない  
かと思  
ひます  
が、十五  
日から二  
十日まで  
の彼の心  
事と思ふ



「おもかげ」裏表紙の権方志功画「悲しき飛天」

上悲簡に堪へぬものを感しませす」。(昭和二十三年十月一日発行) 第二輯(上巻)

これは林の書信に対する佐藤先生の返信である。恐らく林は蓮田の死に關して、腹立たしいものを感じた……と書き送つたのである。この林の感懷は、そっくりそのまま伊東静雄の感懷だつた。その静雄は清水文雄に次のように書き送っている。

「蓮田さんのごこと、『戴帽』の原稿で初めて知りました。丁度二年目の八月二十日ご

ろでありました。その日は颱風の余波が、河内平野を過ぎようとして、しきりに雷鳴のある日でありました。それから三日目に未知の青年（三高の学生）が来訪し、その人が話のついでに、蓮田さんに対する敬愛の衷情を述べましたので、その後このことををしへましたら、急にその青年は、顔面蒼白になり、貧血をおこした模様、失礼しますと云つて、私の前に仰向けにならなりました。私は驚くと同時に、この青年の肉体にまでしみこんでゐる蓮田さんの影響を思ひ、痛切の情にうたれました。私は「ひとりの友を失つて、他の多くの友も遠ざかつていたい気持」とそのころの心境をノートに書きとめておきました（昭和二年十一月付、演義）

伊東はここで「痛切の情」という言葉で、感懐を表現しているが、それは蓮田の同志である清水宛であるから、遠慮した表現なのである。伊東がひとに直接語つたままの感懐はまことにきつくない。「ひとりで死にやいひのに」と章王暗に語つている。

「敵がすんで復員したわたしは戦闘帽と軍服のまま吉中学校まで出かけて伊東静雄にあつた。彼は戦闘帽や軍服をはなすのに不愉快があつた。彼は大東亞戦争をもつた

## ランドアイ

—バレット— 詩長集

森 亮

十四  
爽へてくだされこの身を花に  
花は薔薇の花  
はらはらと  
散るはあの娘の胸のうへ

十五  
とめてとまらぬからぞの靈へ  
おこりのせみではないさうな  
あの娘の髪のびらびらが  
ゆれるゆめゆれるゆめ

十六  
意地を張らずと  
くちつけなされ

く憎んでゐて、戦争がすんではずつとしたと言つた。わたしは「春のいそぎ」のころの伊東静雄を思つてゐたので、一寸あつけにとられた。

わたしは戦争中ウルトラ右翼だつた連中

いくらそなたが若かると  
美しかると  
若い間がいつまでつづく

十七

花の蕾は目こぼしなされ  
咲いて匂ふが花ぢやもの

十八

川のほとりに咲く花に  
あなたになつてくれたなら  
わたしや行きませ水くみに  
水をくみには言ひ訳で  
あなたの匂ひをかきにゆく

(つづく)

十九  
笑ひ声のふさはしいあなた  
だにわたしは  
わたしは千々の物思ひ

## 少年の日

浅野 晃

仕掛火花がまたしても  
湖水の空をいろどり  
犬は全身を滾らして  
痛者に耐へてゐる  
その小倉を敵群は取りかこみ  
喊声をあげた

ゴロは死んだ 二番鳥も  
三番鳥もきき  
莊重な朝の訪れまでは  
半眼ながら  
うけとめた彼であつたが――

少年たちはゴロを抱いて  
泣いた

見だつた。」（昭和十八年「演義」伊東静

「文芸文化」の蓮田善明の自殺のことが語に出たが、蓮田が徹底抗戦を部隊長に進言していられず、部隊長を射殺して後自殺したことを、彼はひどく厭がつてゐた。ひとりで死にやいひのにといふのが彼の意

感天のもと カンナの赤い花が  
思ひきり赤く燃えた下を  
かれらは揺る 揺る  
さすかにはひやりと冷たい  
理葬を終へて少年たちは  
花の下から去つた  
かれらはいつしか犬の遺骸からも去り  
てんで少年の日を葬り去つた  
いつの日か父や母を葬りまた  
自分自身を葬るべく

夏が燃つてきて  
仕掛火花はいます  
湖水の空をいろどつた  
感天のもと  
カンナの赤く燃える下を  
ゴロに似た犬が燃つてゆく

り、林のいわゆる「叛立らしい」感懐につながらつてゐると見ていい。佐藤春夫の「悲霧に堪へぬ」という感懐とは、吾意語韻にいていささか違つてゐる。つまり、春夫のいわゆる「蓮田君も内地にゐて、もう四五日生きてゐたらまだ何か考へ方もあったのではないかとも思ひます」という、シンパシがないのである。ひとの環境にわが身を置いて、考えてやるという度量に缺けてゐるのである。

特伊東は羊の羅漢まで蓮田に頼んでゐた。（昭和十七）又、「勇進といふお言葉」のころも（昭和十七）も、肝銘したものでございませう。日本の詩歌のもつとも大切な、発想の唯一の地盤がそこにあること、十年の特作の後やつつわかつて来たのであります（昭和四月）と感謝し、「君が心熱くここに示してくれたこの道の標に、自分も従ひゆかうと思ふ」（昭和四月）と信徒の思ひも表明してゐた。いかに伊東が敗戦のショックで、「何の異変も自然におこらないのが信ぜられない」と自失してゐたとしても、昔僕のそりから免れることはできません。もしも伊東が八年後の病床で、涙をポロポロ流しながら、「蓮田善明も死んでしまつて……あの蓮田も死んでしまつて……」と、改めてシンパシイを表明し、詫言るとい



# Rather They Sing This Day of Mine

Shizuo Itoh

People sing

Of the short days which were brilliant;

In their reminiscences

Those days chose slyly

Good time and place.

Only one marsh spreaded over the world,

So any marshes could be tiny

That captured people's eyes.

I do not sing

Of the brilliant days which were short,

Rather they sing this day of mine.

Translated by Ken Miyagi

△その身に古代を現して雲隠れ玉ふ▽とはまさに蓮田の最後を享し得て、いささかの狂いもなげ。己が身に古事記の荒ぶる神々のみ霊を招き、雲の掛け橋のと切れぬ前に、あるがままの世界である神ながらの国へ……と雲隠れ遁世したのである。三島はこの追慕の日から二十年後、蓮田のその後の声を奇しくも伝えている。△なごてすめろぎは人間となりたまひし。

古代の雲を愛でし  
君はその身に古代  
を現じて雲隠れ玉  
ひしに われ近代  
に遊されて空しく  
鏡鏡の雲を慕ひ  
その身は淡々たる  
塵土に埋れんとす  
三島由紀夫

△「おもかげ」  
（『新水交遊』序）  
この日の出席者の感懐は「おもかげ」と題した冊子に染筆され、蓮田を識ること深かつた前仙・棟方志功の悲しき飛天で装幀されたが、その中に三島由紀夫は筆致あざやかに次の詞をしるしている。

すめろぎの  
ふみのはやしに  
わけいりて  
おくがきはめ  
かくはしき  
心の花も  
ひらきしを  
おほきみの  
まげのまにまに  
つめろぎはき  
すめろぎの

架蓮田善明

ろがなかつたら、筆者は伊東を背信の徒と断じたかもしれない。  
ともあれ、蓮田は「文学の棟梁」として、数あるわが国の文人中から四人を挙げていた。「古典の文章のしらべ」といふものは、歌人にして吉井勇、詩人にして伊東静雄、小説家にして（強ひて小説家の間から挙げるなら）永井荷風、佐藤春夫の四人より他に今の現に生きてゐるのを尋問して知らない」（昭和十七）という、その信頼に応えるかのよう（昭和十七）に、佐藤春夫が蓮田の情熱を逸速くものし、文学雑誌「人間」に寄せたことばさすがである。

とほのみかどに  
さわらひて

かたぬうらみに  
はなむつつか

八月二十日  
じよほううるに

己がこめかみ  
びすとるの

たまにつらぬき  
たまきはる

いのちすきぬる  
みたまいま

まみがつかえし  
すめろぎの

いづくにかます  
反歌

まさきくもあれ  
といのりし

ますらの友は  
あらずも

なりにけるかな

この詩は「人間」編集部から印刷所に題され、一応校正刷りまで出されながら、占領軍の検閲で発売禁止となることをおそれ、梓

に上ほまなかつた。それを惜んだ編集員の一人が、校正刷りを三島由紀夫に送り、三島はこれを清水文雄に送ったので、今日残りの運命の詩である。△みたまいま。きみがつかえし。すめろぎの。いづくにかます▽。  
その魂を招くべく、昭和二十一年十一月十七日午後二時から、成城学園の集心寮で「蓮田善明を偲ぶ会」が催された。集ったのは、桜井忠雄、中河与一、清水文雄、阿部六郎、今田哲夫、三島由紀夫、栗山理一、池田勉であった。

「床上に飾りし君がうつしゑはわれらが思ひ出の地紀州高野山なる通照光院の後庭にて栗山理一手づから撮りしもの、供へし花は君が立立つ日の車窓に伊東静雄氏より贈られしとふかの黄菊。集ひし人人は君を知ること深く君を思ふことまたあつき先重夫人。折から朝米の時雨漸く上り、薄雲を透してさせる光、前庭にちりしく落葉にほのかに映えて、君を偲ぶ心切なる日なりき。語りひゆくうち、咲き匂ふ黄菊の下、いつしか君も我等と同坐して、往時の静き思ひ出の世界に共に遊ぶが如き思ひに深く深く誘はれゆきぬたりき。噫々されどそは一場の美しき夢なりき。さればさめての後の空しさ、寂しさは何ものにか書へん。」

「陛下がただ人間と仰せ出されしとき  
神のために死したる靈は名を剝脱せられ  
祭らるべき社もなく  
今もなおうつろなる胸より血潮を流し  
神界にありながら安らひはあらず」

「日本の敗れたるはよし  
日本の敗れたるはよし  
農地の改革せられたるはよし  
社会主義的改革も行わるるがよし  
わが祖国は敗れたるはよし

わが国民はよく負荷に耐え  
敗れたる負目を悉く肩に荷うはよし  
わが国民はよく負荷に耐え  
試験をくりくりてなほ力あり  
回廊を警めしはよし  
抗すべからざる要求を深く受け容れしは  
よし

されど、ただ一つ、ただ一つ、  
いかなる強制、いかなる強圧、  
いかなる死の脅迫ありとも、  
陛下は人間なりと仰せらるべからざり  
陛下は「英霊の聲」  
△などですめろきは人間とならまいし  
この声はまさしく蓮田善明の声であるといっ  
ていい。

敗戦によって自決した陸海軍の閣僚者は五  
二七名と信られている。甚闊瀛国の典型で  
あるかのように伝える、陸軍大臣阿南惟幾大

将や第一總軍司令官杉山元元帥夫妻の自決  
は、高級職業軍人として敗戦の責をとった当  
然の道行きであつたにすぎない。職業軍人に  
しても下級將校や志願以下士官、ないし  
応召による將校や下士官・兵、いやをそれ以上  
べきである。橋川文三はその基準として、  
「何かを回還するためにではなく、純然たる  
信条体系の進歩のために、もしくは、自叙の  
うち何らかの積極的意味を見出したがため  
に、自決した人々がここでは問題となる」  
（敗戦の自決）といっている。そしてその典  
型として、代々木原軍団に從容として刃に伏し  
た大東義の影を以て、以下四名を挙げている。  
決行に出発直前、神前に乗上りし祝詞

「同志のみま洩ることなく速ややく高天  
の神のみ門に引き取り給ひて、みな誓く永  
久の御仕へ仕へまつらしめ給へ」  
（四十七日）  
と祈つてゐた。神ながらの高天原への神  
靈を招待したのである。蓮田の遺書や遺歌  
は、遺戦ながら憲兵隊に没取されたまふ今日  
に伝ええないが、この大東義の遺書とは同  
じものであつたろうことは、彼の遺辭やとは  
なりから想定される。筆者をして「わびむれ  
ば、敗戦に臨んで神国日本の終焉を象徴した  
のは、「人間宣言」によって神国のききはし

してゐた、証與が手にあつて、一冊のノー  
トの表紙裏に  
「わがママトラにたむじ日に、この一卷を歌  
の女西沢大人に託す。わが母らざる日は矢  
加部大人こそふるまをに届けたまへ」  
と記してゐる。このノートはわたしのシンガ  
ポールの歌集で、最後の歌は  
五月十九日

### 戴帽式

吉本 青司

照明はきえ  
一種の燈火を捧げた天使の像が浮ぶ  
闇の中から しずかな呼び声  
少女らは  
ひとりひとり立ってそこにひさまつゝ  
微笑のひかりをうけて  
白帽が彼女の女の頭上をかざる  
少女のささげもつ 扇ぎに  
燈火がうつさされ  
美しく、面が生まれる  
ふたつ みつ  
白衣の群像は鼠のようにまたたく

△ひたすらなる道は愛にいたるVと  
招かれた詩人がつがやく  
少女らのそらんじる聲調が  
△わが生涯を清くすし わが任務を  
忠実につくさんことをV  
と戻つてくる  
コーラスがはじまり  
少女らの列が、銀河となってながれる  
スタタリの病舎にともされた聲が  
いま  
帯のようにひとひとのころを縫う  
何もかが、なにかに  
文えられなければならぬとき  
一種の燈火よ  
やさしさの導きとまれ

三代に亘る精確明日に読みつがれる全集  
**現代日本文学大系全九七巻**  
すべてオリジナル、すべて本物主義、むしろ  
も愛護のない加筆をせよ、批評と作家の双方  
を引張つてゆけるのも、その旨意、いささか  
武士のとき、バツグンによるのであらう。  
少年時代に指導を受けた蓮田善明の仕事が、この  
頃の文字全集にはじめて復活して来た。私と  
しては大きな喜びである。 三島由紀夫

第二回配本 発売中、第三回配本 10月26日  
島崎藤村集(一) 夏目漱石集(一)  
東京都千代田区神田小川町一八  
**筑摩書房**

### スマトラ記

田中克己

わたしはほかで、よく決死の覚悟をする。  
そのくせ妙に楽天的で、よい景色や人情のよ  
いところではまた来るという望みを抱いて、  
いいかげんにすましてしまふ。スマトラがそ

風單木の梢のころ夕映えをアラブ重をつ  
れつつぞ見る  
といふのである。毎日新聞の支店に紙幣交換  
をたのみについて、「明太郎先生、十一日逝  
去」の記事を見たのは、このあひのことであ  
らう。明太郎先生の訃報でわたしたちは決死の覚  
悟をさらに強めたことを覚えてゐる。

スマトラ行のボンボン熱気に乗り込んだの  
は与謝野晶子さんの亡くなった廿九日であ  
つたらう。第十〇字和島丸といふ船で、同  
行は朝日新聞記者だった三木士郎兵衛、これ  
も新聞記者だった水田軍団の二人であつた。  
乗船の手續は三木君がしてくれ、その小さい  
のに驚いたが、あとの祭である。マツカカ海  
飲に暮れ水艦が出没するといふので、出帆は  
日が暮れてからであつた。二十五年たつたの  
でよく覚えてないが、一日半かかって無事に  
スマトラのブラワンデリー港に着いた。途中、  
水田とわたしは飯が出るが、三木君は兵な  
ので飯上げといつて、自分で飲事までとり  
にゆかねばならない。三木君は歴史文科出  
身の兵隊なので、それを面倒がって飯の二回  
や三回は食はなくて、といふ顔で腹をわたし  
特別に持つて来てもらうことにした。わたし  
はこんな風に他人のことを嫌ふ思ひくせがあ

蓮田善明

昭和九年(広島文理大三) 二年二期

十月三日

雨ふりし蛆虫の白くはひける  
雨ふりに蛆虫御ひ出し白き  
虫ないて雨もふりあるねさめ  
道はたまで蛆虫の白う御ひける雨にて  
蛆虫の白う洗はれてゐる雨道

十月七日

下で、何かゴテく夫婦や云ひ争つてゐる。□□氏は、さつき腕をかりにきた。そこ  
でいふと――

り、いっも人からうるさがるれるのである。  
港には日本軍の爆撃のあとがあり、わたしたちの船一夢が着いただけであつたが、ふしぎなことは、もう出迎へのトラックが来てゐた。宣慰のメダンの車で、軍曹以下数人が乗つてゐた。わたしは挨拶もそこそこしてこれに乗り、まっすぐに南に向つた。道はよいが両側は林で何もない、三十分も走つたらうか、やつと家が見え出し、シンガポールでなじみのまっ赤なブーゲンツレアの花の咲いた前庭をもつ建物をみると、メダンはオゴンそっくりのきれいな市だと思つた。やがて宣伝班支部のめる小さい家に入り、支部長の中尉に挨拶したあと、うながされて、官部隊本部へ申告に行くこととなつた。官部隊といふのは近衛師団のことで、広島久留米の二師団とともにマレー半島を来て、北スマタラに移駐したのである。わたしは身分上はこの師団司令部に配属されたので、その挨拶をすいにくのである。三木上等兵は珍中で、「僕は兵隊だし、田中さんは将校待遇だから、申告はむづかしいことになるが、まあ僕がやりませう」といって、その通りしてくれた。「申告いたします、陸軍上等兵三木八郎、陸軍徴員田中克己、……」という順にやることになつたのである。その

通りの申告を官部隊の参謀長の大佐にしたら、大佐はいはつて丁重に「参召前の職業は」とたづねられた。三木君は「朝日新聞記者であります」といひ、永田も記者だつたことをいつた。わたしは「文士であります」と答へて、あとで三木上等兵に笑はれた。わたしは文士というほど有名な文士といふのである。しかし詩人だの、研究所員だの答へる気がしなかつたのは事実で、わたしは軍部が手数をかけて徵用するほど有名な北川冬彦、大木惇夫、神保光太郎と同じく有名な詩人、すなはち文士だと思つてゐたのである。わたしは三十一歳、高慢で、空っぽりだつたと思ふ。

このあと参謀部の将校室にも申告した。事務をさつてゐた若い将校は、すでにわたしの履服を洗ひてゐたと見て、わたしに質問した。「田中さん、高等学校はどこですか?」「大阪高校です」と答へると、たなみこんで更にと、「何回ですか」と問ふ。「七回です」と答へると、この将校は「わたしは十一回です」といつて、みるみる敬愛の情を示した。旧制では同じ高校といふのはふしぎな位の親愛力を示し、しかも上級の方が偉いのである。(つづく)

身内の愛

福地邦樹

身内の情愛というのは

陽差しや雨や風の上に  
あるといへば確かにあるが  
ないといへばないよすな  
これほど住みここちよく消えない安定感  
をもち

これほどさらさらと風にもならない  
毎朝看物をきたり歩いたりごはんを食べ  
たり

毎晩ぐうぐうねしてしまつたりするような  
木の葉が芽ふいたり花をつけたり  
街路樹の下を何げなく歩いてゆくような  
そんな種類のものではなからうか

○「お早う」は時刻の早さ、乃至、めざめ、や、仕事の、ついで。その早さでなく、その日、仕事の「造り」ますよとの、一種の壽詞か。

「おやすみ」も、「寝む」を意味中心とするやうだが、その「寝む」のものと「安」に心がようて、ことほぎの意味でないか。

「やすみし」といつたやうな。

「お早うございます(あります)」は、下に「ように」をそへるべきだらう。

十月二十一日

ごさそう山(真聖が半山)にのぼる、暑くなく寒くなく、これで体が立ち直る。何ともいへぬ健康感だ。夕刻五時過ぎ。

みんなでいたたく榎の水をおとしてゐる。古さびたらしいな鍮をふることし谷をむれなく(谷の暗さをみる)みそさしい石に紙まつりはとけさまたなつたその石

十月二十七日

まとめない日本文芸史  
まとめること、まとめないことを、ともに警戒して、まとめない日本文芸史といふものを書いてみた。  
ちよつと氣とつてゐると思はれるかもしれ

ぬ。しかし、しつくり胸に収まるやうな女芸史をかきたないねがひがかうさせたのだ。もう三十年もまきたら、世の中が大部変わったころもう一べん書いてみたいと思つてゐる。(序文は柳田氏の民間伝承論の序のやうに、しかも簡単に三行か十行で)

一、老人と少年  
二、万葉集の中の歌史  
三、古書記一源氏物語一太閤  
四、連歌、俳諧史  
五、物語論史  
六、口語体と現代文学の意味  
七、不定型へ、定型は中年型  
八、谷崎と菊池と横光  
九、民間伝承文学  
十、日本文芸学

昭和十年(広島文理大) 三年二期

一月十三日

昔客が雲を溶ませてゐる白い雲  
ここに日だまりがある砂に下敷をおく  
坐つてみれば風も吹き草もゆれ  
あの山陰に霜のとけぬ扇根が、ひとり歩く  
沙のほつて島にとりとなる日だまり

数日微熱、今日與病院にて受診、すすんでレントゲン写真をとる。肺門リンパ腺のあたり瘤やられてゐる。歩きながら暗涙をのむ敏子、品一。

さうときまれば平静となつた下からなみだかうなつてもまだペンと紙とに向はうとする。浅ましく

台湾へいつて産産を作らうと思ふばかりで一日

数日風呂に入らぬよされた手の白き生きた気はせぬ身となつてしまつたかな永遠に生きようとは思はぬ五十まで

妻子の顔でも見てめればこんなでもないぞ何度五十とかぞへてもなじかくなつたいのち

病氣になつたので一番あゝ風呂に入つてあたたまつて寝ることになつたので

ありがたい ありがたいゆつくり ひげもせるゆつくり 垢もあらへる

ありがたい この寒さへ 世の中にはあつてのむ  
\*  
何も重荷と思ふな わたしが包んでもらつて

ふな

萩本家 義

雨のふる日に川から田んぼへきたふなはふたたび 川へは

帰れなかつた田んぼにたまつた雨水が溝へ落ちるのをふせくため

水口がふさがれ逃げ場をなくしてしまつたのだふなは つよい日ざしと

稲に吸われて日ましに浅くなる水の中を泳ぎながら

けん命に活路をさがしていた泳ぎつかれると水底の泥に沈んで

からだを休めそれからまた 右へいき

みる  
妻と子よ、命短かうても手をひいて行かうよ  
ちようどよい時病氣になつた心が斬しくなる

左へいきしてさがし続けたがどこへいっても

日につくものは昔く並んだ稲の株だけ――雨をたたえて、ゆたかにふくれた

川の流れにさそわれて里へのほり見も知らぬ田んぼの中で

苦境におちたおろかさが今さら、しきりに悔いらるるふなは今や、不安と

恐怖におそわれながら待つよりほかに仕方がなかつた

どしゃぶりの雨が明日と言われ、今日にもきて

水口の泥の小山を崩さぬ限りふなは、もう二度と川へは帰れなかつた

何もつて行くものはないみんなある

一月二十九日

夕方はいやだ  
とがつてきて  
駄々をこねたくなる

草原

中野 信子

子供らは  
草原へ帰ってゆく

しばらくは  
ためらいがらに

明るいはかりの内側で  
タレオンなどを

とりかえこする  
草から

草へと  
みしらぬ風と戯れる

いつしか  
子供らは  
遠い響りを受けて  
叢に身をひそめると  
おもいおもいにしゃがんで

くやしつて  
わんわん、子供のやうに声あけて泣きたい  
朝熱がひいて気が晴れたのが

草いろの秘密を育てはじめ

ゆるく草の中で  
ひそやかな風のリズムに合せて

子供らは  
成長と裏切りの  
さわたいパトランスを歌いはじめ

牧歌のように  
わるい風も吹きはじめ

草の葉とのあどけない対話もただえて  
やがて  
あたたかもなく草原を見失う

どうしても、選べられない  
その、ときがくる――

いつも  
子供らは  
成長といひ、成長にかかつて  
帰るべき  
草原を失ってゆく

よけい かなしい

\*  
自分ひとりがかの天の罰か何かをうけたといふの  
ならしい

\*  
妻や子供までくるしめるために肺の虫がくふ  
のか

\*  
自分は敏子を、こんなに不幸にする権利はな  
しかも自分よりほかの誰がこんなことをした  
のか!

\*  
今朝六時すぎに起き、空山の山まで日の出  
前に歩く。八時半に帰つた。気分はなほだよ  
く。星に餅をやいてたべ、又歩きに出る。四  
時半まで歩く。午後四時の熱は昨日より稍高  
い。歩いてゐると考へることが少いので歩く  
のだが、やはりいけないのか。

\*  
マスクを買つて、石炭を買つて、ガ一ゼに  
はさんでかけて坐り、我ながら病人然となり  
きつたのがあはれになつた。早く又明日が来  
ればよい。

九時  
先生に昨夜手紙をかいたがまだ出さぬ。

やたらに泣きながら、敏子へ手紙を書き、  
そのあとで先生と池田・清水君へ書く。丸山

季刊「四季」第三号

評論 評書家と観察者 森原武夫  
旅ル木ノ魚草本 山岸外史  
ハンターの語 丸山冬二  
山 桜 丸山冬二  
生と死 神保光太郎  
死の網 阪本越郎  
夏草のなか 竹中 天  
そのとき 塚山別三  
春の日の歌 村中明太郎  
夜 小山正孝  
菜種抄 伊藤桂一  
艶になつた指 小高根二郎

小説 わが橋松よ……長谷川 敬  
座談会「立原道造」 中村真一 吉行理恵・他  
対談 樺の木の下 伊藤聖一 阪本越郎  
隨筆 萩原兼子・杉山平一・丸山薫  
田中冬二・他

会員作品  
「四季」一、二号或部あり・  
四季会員集集中部には編集部へ  
発行所 東京都中央区日本橋兜町三の五三  
株式会社 潮流社

「四季」編集部  
編集長 小高根二郎  
編集委員 小高根二郎 長谷川 敬  
中村真一 吉行理恵 伊藤聖一 阪本越郎  
萩原兼子 杉山平一 丸山薫 田中冬二 他

380 70  
¥ 千  
果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行  
発行所 東京都中央区日本橋兜町三の五三  
株式会社 潮流社  
「四季」編集部  
編集長 小高根二郎  
編集委員 小高根二郎 長谷川 敬  
中村真一 吉行理恵 伊藤聖一 阪本越郎  
萩原兼子 杉山平一 丸山薫 田中冬二 他

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第一五三号 昭和四十三年十一月一日発行

果樹園 第154号

諏訪時代の蓮田先生 今井信雄  
スマトラ記 田中克己  
ゆめみこたちの群像(一) 山田俊幸

諏訪時代の蓮田先生

今井信雄

蓮田先生が岐阜から諏訪中学に赴任して来られたのは、昭和四年で、先生の教えた二十五才の春である。在任期間は三年、その最後の年に私は中学に入学し先生にクラス担任をしていただいた。

四十年も昔の話だが、初対面の印象は極めて鮮烈である先生について友の一人は、「芥川竜之介のようだと語り、他の一人は、「あれはア、かだ」と評した。何れも奇矯な評言ではあったが、私は納得できた。もとより中学一年生に、芥川についての確たる認識

のところへ行きかけたが、熱で顔はほてり、身体はさびつ、涙さへ出てくるので、修道中学の角から帰つて、涙つて視無量寺経をよんでみた。しつとりとしたやうな気もち。たしかに神様冥加もある。近日中に帰郷して二月中休養することにする。それで多分よくなる。

からだに異常があれば知らぬに熱が出てゐるかういふ、さしきながら身にならなかつてゐるいろいろ考へると、ふしきなのは身体だ

今夜はしばらく、ねむれるだらう気持といふかのはへんな奴だ悲しんだり、泣いたりするがわけがあつてでもないのだそれで切ないときは、どうにもしようがなく

かなしいといふ言葉さへ言葉にすぎない)それかと思ふと、そのわけを考へてきめたのでなく、わけてけりりと心が晴れてゐる。

鎮花 祭 浅野 晃  
視線 福地 邦 樹  
山莊 詩 評 吉本 青 司  
ランダイ 回 森 亮  
なかららのいづこより 伊 東 静 健  
宮 城 賢  
保田典重部と角帯 小高根二郎  
編 集 後 記

があつたわけではないが、芥川の没後、いくらか経つていなくなつた当時においては、存外素直に受け入れることのできた評言である。芥川でなく、瀧長雄といつても、太宰治といつてもよかつたのである。つまり、中学生が抱いていた『文学者』のイメージを、さながらに見せてくれたのが先生から譲り出されて

いる雰囲気であつた。教壇に坐つた先生が、出欠簿を開いて面を伏せると、きれいな長髪が紙に落ち、背白い顔を倦い隠した。垂れたその髪を、何度か袖枝質そうに掻きあげてゐる座の中に、私は偶然とはあるが、少壮の気鋭の文学者を感してつた。その後、通學の途次に一、二度お見掛けした黒の中折帽、そのつがし員会にも、自由人である文学者を何んとなく

編集後記

水く流れてきた故郷「田舎」の死は本号の第五五期で完結した。第一回は昭和三十三年八月八日、第二回は昭和三十三年八月十五日、第三回は昭和三十三年八月二十二日、第四回は昭和三十三年八月二十九日、第五回は昭和三十三年九月五日、第六回は昭和三十三年九月十二日、第七回は昭和三十三年九月十九日、第八回は昭和三十三年九月二十六日、第九回は昭和三十三年十月三日、第十回は昭和三十三年十月十日、第十一回は昭和三十三年十月十七日、第十二回は昭和三十三年十月二十四日、第十三回は昭和三十三年十月三十一日、第十四回は昭和三十三年十一月七日、第十五回は昭和三十三年十一月十四日、第十六回は昭和三十三年十一月二十一日、第十七回は昭和三十三年十一月二十八日、第十八回は昭和三十三年十二月五日、第十九回は昭和三十三年十二月十二日、第二十回は昭和三十三年十二月十九日、第二十一回は昭和三十三年十二月二十六日、第二十二回は昭和三十三年一月三日、第二十三回は昭和三十三年一月十日、第二十四回は昭和三十三年一月十七日、第二十五回は昭和三十三年一月二十四日、第二十六回は昭和三十三年一月三十一日、第二十七回は昭和三十三年二月七日、第二十八回は昭和三十三年二月十四日、第二十九回は昭和三十三年二月二十一日、第三十回は昭和三十三年二月二十八日、第三十一回は昭和三十三年三月五日、第三十二回は昭和三十三年三月十二日、第三十三回は昭和三十三年三月十九日、第三十四回は昭和三十三年三月二十六日、第三十五回は昭和三十三年四月二日、第三十六回は昭和三十三年四月九日、第三十七回は昭和三十三年四月十六日、第三十八回は昭和三十三年四月二十三日、第三十九回は昭和三十三年四月三十日、第四十回は昭和三十三年五月七日、第四十一回は昭和三十三年五月十四日、第四十二回は昭和三十三年五月二十一日、第四十三回は昭和三十三年五月二十八日、第四十四回は昭和三十三年六月五日、第四十五回は昭和三十三年六月十二日、第四十六回は昭和三十三年六月十九日、第四十七回は昭和三十三年六月二十六日、第四十八回は昭和三十三年七月三日、第四十九回は昭和三十三年七月十日、第五十回は昭和三十三年七月十七日、第五十一回は昭和三十三年七月二十四日、第五十二回は昭和三十三年七月三十一日、第五十三回は昭和三十三年八月七日、第五十四回は昭和三十三年八月十四日、第五十五回は昭和三十三年八月二十一日、第五十六回は昭和三十三年八月二十八日、第五十七回は昭和三十三年九月五日、第五十八回は昭和三十三年九月十二日、第五十九回は昭和三十三年九月十九日、第六十回は昭和三十三年九月二十六日、第六十一回は昭和三十三年十月三日、第六十二回は昭和三十三年十月十日、第六十三回は昭和三十三年十月十七日、第六十四回は昭和三十三年十月二十四日、第六十五回は昭和三十三年十月三十一日、第六十六回は昭和三十三年十一月七日、第六十七回は昭和三十三年十一月十四日、第六十八回は昭和三十三年十一月二十一日、第六十九回は昭和三十三年十一月二十八日、第七十回は昭和三十三年十二月五日、第七十一回は昭和三十三年十二月十二日、第七十二回は昭和三十三年十二月十九日、第七十三回は昭和三十三年十二月二十六日、第七十四回は昭和三十三年一月三日、第七十五回は昭和三十三年一月十日、第七十六回は昭和三十三年一月十七日、第七十七回は昭和三十三年一月二十四日、第七十八回は昭和三十三年一月三十一日、第七十九回は昭和三十三年二月七日、第八十回は昭和三十三年二月十四日、第八十一回は昭和三十三年二月二十一日、第八十二回は昭和三十三年二月二十八日、第八十三回は昭和三十三年三月五日、第八十四回は昭和三十三年三月十二日、第八十五回は昭和三十三年三月十九日、第八十六回は昭和三十三年三月二十六日、第八十七回は昭和三十三年四月二日、第八十八回は昭和三十三年四月九日、第八十九回は昭和三十三年四月十六日、第九十回は昭和三十三年四月二十三日、第九十一回は昭和三十三年四月三十日、第九十二回は昭和三十三年五月七日、第九十三回は昭和三十三年五月十四日、第九十四回は昭和三十三年五月二十一日、第九十五回は昭和三十三年五月二十八日、第九十六回は昭和三十三年六月五日、第九十七回は昭和三十三年六月十二日、第九十八回は昭和三十三年六月十九日、第九十九回は昭和三十三年六月二十六日、第一百回は昭和三十三年七月三日、

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

昭和四十三年十一月一日発行

発行所 元市印刷株式会社

定価 四十円 送料 二十円

果樹園 第一五三号 毎月一回発行  
昭和四十三年十一月一日発行  
発行所 元市印刷株式会社  
定価 四十円 送料 二十円

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

果樹園 第一五三号 毎月一回発行

学の卒業生は次々に検挙された。

家庭でも学校でもアカは否定されていたが、その実体はお互いによく知られていた。アカについて説明ができる大人も多かったようである。中学生の理解はいたアかとは、頭がよく、在来もの考え方と異った意見を持った人位の認識しかなかった。その点、先生の容姿は秀才の条件を充分備えており、授業の展開は従来の型を破って戸惑いの連続であった。アカということばには、自分達の判断の域外に属する、いわば阿闍陀流とか南無流ということばに共通した神秘感をもたせていたのである。

最初の授業で、教科書にカバーをつけることとは、装綴者の心を無視することだといわれ、大多数の生徒を困惑させた。教科書は押し敷いて使うものでなく、何でも気易く書きこみをして、年度末にはズタズタになっていることが望ましいといわれた。用意して行った大学ノートは使用させないで、洋紙を綴じさせ、何でも気儘に書かせた。感想、意見に類するものから、文中の状況を絵にさせることも屢々であった。土田耕一の『西行の戻り橋』を絵にした日の苦心は、今だに忘れられない思い出である。

開巻第一頁に載っていた尾崎喜八の詩は、

二週間に亘つて扱われ、一高、三高の奏歌や、その流れ波打母校の校歌が、如何に浮疎なものであるかに言及されて吾々を愕かせた。辞書による語釈から一応は出発しながらも、詩の中に生きるそのことは独自の生命を探索することに、授業の中心がおかれていたように思う。時には自分の解説を撤回されて、生徒の答える諏訪地方の方言に賛同される場合もあった。解答が先生のお心にかなった場合には、やさしい笑みをたたえて生徒をほめられた。伊東静雄ではないが、その笑む眸のまことに美しいひとであった。

二

初めの作文の時間は、湖に注ぐ川口に引取られ、両目するものを勝手気儘に書かせた。詩でも感想でも絵でもよかった。私は土手に腰を下して黒いソフト帽の生手と、傍に映いていた浦公英を最終に、随分、突飛な指導法に思えたが、最近、先生の中学校作文指導私見（『国語と国文学』昭五・五、六月号）を読むに及んで、湖野や城址への引率は、細密にたられた作文指導案の一駒であったことを知らされた。

迂闊な話ではあるが、今頃になって、先生の国語教育は、教科書至上主義の亡霊から吾々を解放させることであり、その作文教育は、

あったが、作文に対するあれ照の興味を、生徒に喚起させることはついにできなかった。山吹の段々へ根ついた稲の穂が青々と波打ち、山には邪公がしきりと鳴き、春蚕の繭を運ぶ馬が日毎坂の道を上下りする頃、村は何となく西気ついて、夜毎登り降りの音が聞えてくる。どんが、どんが、お迎えどんが、上の家の音さがう呼びながら、瓶を振り振り油買いにとんでゆく……といった中学時代の文章が、それ相応の苦心を重ねたためであろうか、今でも口づついて出てきたりする。

【備考】

去る十一月十五日所用あつて上京した小高根は、余暇をえて筑摩野に小宮正弘氏を訪い、「蓮田善明とその死」の出版打合せをした。そのとき小宮氏から、「現代日本文学大系」に蓮田善明が収録されることに決めたのは、白井吉見氏の強力な権勢があったからだと、うかがった。夢想もないことだった。衷心よりあつて白井氏に感謝申しあげる。

この「現代日本文学大系」の広告が媒介となつて、岐阜二中で善明に教わつたという片山武夫氏から便りをいただいた。お蔭で探りだすことができた。又、同じ広告で、諏訪中

時代の教えずである中川英夫氏（東京イリ）が出張のついでに来訪された。折から僕は、善明が諏訪中でみつけた天才少年歌人、A伊那谷と木曾に日通ふ馬の群舞を演じていたなき次すゝの作者を探索していた。相談をしたところ、それはたぶん今井信雄（諏訪）だろうとのことだった。照会の結果まさにその通りで、この寄稿をいただいたのである。

スマトラ記(一)

田中克己

スマトラは世界で五番目の大きい島で、日本の本州の二倍に近い面積をもつてゐる。わたしの着いたのはその東海岸州の首府マダニに次ぐ町である。市街はオランダ人の住むところと中国人の町とに分れてゐて、わたしの部隊のあるのは、オランダ人の旧住家とありあげた二画であり、総督のみな近づくことゝあつて、そこには鹿が庭に放し飼ひされてゐる。シンガポールより住みよささうだと思つたのは、善い直後のことだが、わたしたちは早々に高熱を出した。体温計ではかたや四一度を越えたと。 Dengue 熱かマラリアかとも思つたが、病名より高熱でうは言をいひは

昭和になつても依然として蔓延つていた軌道臨海主義の払拭にあつたことに気がついた次第である。前記、「中学校作文指導私見」の結びに「私は彼等の独自性を伸ばすことに忠実でありたいと思ふだけである。それも私の力で引き伸すのでなく、彼等が伸び易いやうに彼等を保護するだけ」と述べている。

自由選題で書かせた作文は短評をそえて、翌週には教室の壁に下げられていた。『指導私見』には、生徒の内面的自覚を測しつゝ、まずその、生徒を兼直に、長く書かせる所から始めたという意味のことが述べられているが、身近の生活を苦明に綴つた長文が続々とあらわれた。夏休みの生活、自転車、靴、といった仲間の作文には、百枚、二百枚を越える作品が珍らくなかつた。提出された作文は、その場から読み始めて、先生は職員室に向われた。いま読み返して、本人自身が退屈してしまうような長文を、先生は丹念に朱筆を加はられてゐた。先生が受け持たれた作文の授業は一年生の全クラスで、総員二百八名であった。生徒のとりどりの作品を読む時の、言葉で尽せぬような喜びは、指導私見の一行に見えらるゝことである。その後、私も国語教師と呼ばれるようになり、先生に真似て作文教育に打ち込んでみたことも

しなないかと恐れた。これは正気であつたかも知れないが、永田軍医に「おれが死んだらカカアによろし」といふたのは、自分でおぼえてゐる。永田はおどろいて、支部長の中尉に話し、中尉はすぐ平井忠治一等兵をつけて、軍病院に入院させてくれた。軍医殿が注射をし、平井一等兵が徹夜で看病してくれると、翌朝も熱は三五度台に下つた。軍医殿（富久少尉といふ方だった）は下りすぎたところ心配された様子だったが、これがわたしの平熱であることは、わたし自身もそのころは知らなかつた。

そんなわけで入院をつづけてゐる中に、面会に来たことがある。城地で珍らしい背広で、気さくに自己紹介をして田中館秀三と仰しやつた。苗字が珍らしいので、わたしは学界の元老田中館愛権博士の後嗣とすゝ承知した。実はシンガポールで、ラッフルズ博物館へ圖書を見たと思つて入館を申しこむと、田中館さんの指図で、軍命令により当分、軍人軍団の入館が禁止されてゐた。そんなわけの方がここに現はれたのは、別に意外と思はなかつたが、わたしが高熱でうろうろと入院してゐるの気を感じて「田中さん、軍人軍団、ことに軍団がばつとしてゐてはいけません

よ……丸(家内は淺岡丸かといふが、わたしの記憶や記録からこの船の名は出てこない)は南方に必要な軍服を沢山のせて出落した。軍服たちが行く先をもちいたので敵潜水艦に撃沈された。と叱りおへると出てゆかれた。なに今から考へると、軍の暗号はぬすまれてゐるし、現にわたしの乗った緑丸といふ図体ばかり大きいが速度ののろい船などは門司を出てから、ずつと津水艦にあとをつけまはされ、わたしも内心、アメリカは中々やなと思つてゐた。不意打ち戦争のはじめの戦果に慢心したのだといふかも知れないが、わたしはもとより日本中あまりにアメリカを知らなすぎたのだ。

さて田中館教授のお叱りを受けてちぢまつてゐるわたしに、院長命が伝へられた。「服薬を止して出て来い」ということである。わたしはシंगाポール以來着用してゐる半袖襟までのカーキ服で陸軍へ行つた。他にも将校、下士官、兵がゐて、用は悪願の御葉の下達であつた。わたしはこの御葉をいただいて病室に帰り、ベッドの頭にそれを供へたあと、廊下へ出て囁言した。ありがたさで自分の働きの足りないのに対する申しわけなさとがその理由であつた。

そんなことで男が泣くのかといふ人は、おつてよくように想い出の人々をまじつづけろ。「お母さま、お父さま、アヤピン……」ときれがちなながらも電樹はよびつづける。「立原くん、クエイサイ、済さん、先生……佐藤先生、風巻先生、サイゴクタン、み……」おかあさま……」

リンピッで勝つて泣き、負けて泣く各異連手の氣持もわからないだらう。しかしわたしはそのすぐあと退院を許されると、御果をやはり室の棚にかざり、その一部を通訳のナンカバタンにやへて、ありがたさを説いた。この通訳は部長の氣に入りて、賢い顔をして、英語が話せるといふので雇はれてゐる青年であるが、わたしに反問した。「材料は何ですか」。日本のハクセンコウをわたしは何と説明したか、彼は不思議さうな顔をしてまた聞いた。「材料がそんなで、民間でも作れるものなら、ありがたしいはどういふわけですか。わたしは天皇陛下がお作りになったのならともかく、あまりありがたいとは思ひませんがね。」

わたしは与へた菓子をとりかへして、どうしたらの異民族に教へられるならかと思つた。解決は南方にゐたあひだつひに出なかつたが、このごろ教会で聖樂式に加はつてパンと葡萄酒とをいただけるので、イスラム教徒にはあるひは教へやうがあつたのではないと思ふ。

追記すると、田中館教授は帰還後、東北大学教授で、法政大学教授におなりになつて昭和二十六年一月二十九日なくなつた。明治十七年生まれて六十才だつたといふから、

いることを知る。「立原クンの書いた詩に似た風景だ。」と電樹は思う。しかし、その広さ、平和さがかえつて電樹の心を不安たさせる。「いちゃーん」電樹は幼いこゝろ、兄の茂雄を呼ぶときのように泣きたい氣持で茂雄を呼ぶ。

おまへの時が花の時であつたのなら  
花はおまへであつたのだが

花の生きがひを身に秘めて  
おまへの時が過ぎようとする

おまへの時が花から花へ  
稲妻のように飛び翔ける

われらの短促のいのちを  
野の母子像にそそげ

そして行かう  
ををしく進んで行かう

やすらへ花よ

わたしの父とは同じ年だつたが、この時は四十歳代の若さに見えた。なお父上の愛稱博士はそのあと二十七年五月二十一日に亡くなつた。九十五歳だつたといふから學徳ともいふべきは長寿だつたわけである。近ごろ田中楠弥太教授に承はると、「秀三教授はご養子で、仲人は父(正平博士)がいたしました」とのことである。ふしぎな御縁があつたのである。

メナシカバタンといふのはあとでわかつたことだが、スマットの民族のうち最も人口の多い、イスラム教を信じる部族である。

### ゆめみこたちの群像(二)

山田俊幸

死はあたりまえのように電樹をおそつた。船の重くふい盛腹が下腹部のあたりをつきさし、均衡を失つた電樹は前にめつた。「ていちゃーん——」電樹はうめくように六年前に大陸で戦病死した兄の名をよんだ。おそろか遠い音のうちに気がして、電樹の名は、入隊後、めずらしく夢想の時が訪れる。走馬燈のように、幼年時代から石炭になるまでの美しい、はかない思い出がかけめぐる。電樹は、

昭和六年、松永電樹の兄、茂雄は、一高へ入学した。そこで、茂雄はのっぽでひょうひょうとした少年に會つた。父親が海軍関係の重職に居た。若い軍事評論家を自認している茂雄は、その少年のふるからに或る日、少年の質問にこたえる。茂雄はその時のことを次のように記す。その調々しい少年の名は、立原道造と云つた。

高等学校へ入つた十九の暮。同級にのっぽでひょうひょうとした蒼黒い少年がゐた。教室で授業がすむと々僕たちは室からとび出して草の中へねそべり日光浴をしながら、一時間たまつてゐた悪い空氣をはきたすのだった。

ある日のさういふ時、僕はポケットから眼鏡を出して——その頃はいつも虫眼鏡と巻尺を持って歩いてゐた——ふとむしり取つた草の葉っぱをのぞいてゐると、横にゐた彼が話しかけた。

「ナンブタンテイシテケルノデスカ」僕はやたらに草を食べると毒だよと云つた。

「松永茂雄「立原道造」——  
「ゆめみこ」第八号に貞夫

### 鎮花祭

浅野 晃

山の青が映つてゐた  
花のちひさなひとみに

沙騒の青もきこえてゐた  
その夜の苦い苦い夢には

どこへいつたのか山の青よ  
沙騒の海はどこなのか

子供たちのかはゆい手が  
花をむしつてまき散らす

くろいからだや手足の虫が  
よろこび勇んでこんでゆく

二人の交友は、立原の茂雄に対するとまどいがちな質問からはじまる。それは、立原の親友との出会いが多くそうなるように、好意を感じている少女ははじめてはなしかけるようなどまどいがおそったのである。立原は、日光浴をしながら草をルーペでのぞきこんでいる茂雄を、何かめずらしいものでもみるように、はずかしそうにいつもチマチャラッとみていたのである。茂雄は立原の視線を感じながらも、何故か自分からその少年にははなしかけることがためらわれる。おそらく、立原が茂雄に話しかけたとき、茂雄は何か曖昧な笑いをかえしたことであった。茂雄の答えは、「やらない草をたべると毒だよ」という一言だった。

立原は当時、すでもう口語歌壇の新鋭であった。第三中学校在学中に、国学院を出た橋本利氏の影響下にあり、白萩、本太郎、夕暮などを愛するようになったという立原には、中学三年の時に編んだ手製の歌集「葛飾集」に次のような歌がある。

もちの木に  
ヒサコカネタと彫りつけて

た自分の口語短歌だのを茂雄にみせたのだらう。

朝の電車の隅で会釈し返したあなた。共時の顔が其ま、僕をあざける

何か思ひつめてた——ばかなばかな僕、  
今草にねて空をみてる

こんな短歌をみながら、おそらく立原と茂雄の交友は深まっていたのであろう。  
「あの子にあったの?」

### 視線

福地邦樹

視線が合った瞬間に  
僕らの通話ははじまる

数キロ離れた相手と  
電話で結ばれる瞬間のように

だから 見知らぬ人と  
僕らはなるべく視線を合わせないようにする

眺めあかずに見つめ固しかな

片恋は夜用淋しき  
夢に見し久子の面影  
頭にさやか

これは立原が、友人の金田敬の妹、金田久子をうたった歌である。茂雄は、いつももなく、立原のそのリベのことを知りはじめた。茂雄はそのことや立原の歌のことなどを出会いの風景につづける。

さうして二人は友だちになった。彼が僕が一年下のくせに前田夕暮門下新人として前途を囁かされてゐる新興歌壇の逸才であり、彼を知って、ロングフェローもこんな男だったかも知れないと驚かにもこんな男だったかも知れないと驚かにも畏敬の眼を覗いた。僕が飛行機の機室に耳をすまして、あの中にだててエンジン設計者の個性が現はれてゐるのだよ」としてやかに話をする彼は熱心に聴いてゐた。僕は彼に軍艦と飛行機と児童文学の知識を語り、彼は僕に短歌と詩と芝草と隅田川の話をしてくれた。軍事評論家と詩人とはだんだんお互ひの理解を深めて行った。その頃、二人ともあどけないり

茂雄は本から目をはなさずに立原にいう。  
「うん」

立原ははずかしそうに前方に目をやったまま茂雄に答える。自分の秘密をみられる気はずかしさ、茂雄にわかってもらえぬうれしさ、何か不思議な思いに陥る。立原は茂雄の顔をよめるが、茂雄は「フーン」と云ったまま本をよみつづける。何か期待をうらぎられたようにじっと茂雄をみる。立原がねこぶと空には雲が早い風にながされてゆく。  
「雲が飛んをいつちまう。どうせどうにもならないんだ。」

獣は 視線が合ったとんに  
はつ然と敵意をいだき  
蒙古の匪賊は 眼を見返した者の命を  
容赦なく奪ったという

恋人たちは  
眼を見交した時から愛しはじめたのだ  
僕らの言葉は  
視線の上をすべって行く心にとっては  
出来のわるい注射でしかないのだ

1ベを持った。それはマンズフィールドのエドナがショアのグレイリーの様な女の子だった。他の友だちに話せば笑殺されてしまふ様な馬鹿馬鹿しくも貴いものだったから、それは二人だけの秘密だった。雨の隅田公園たの五月晴のクラウソウの芝生で、僕があの子の手紙や写真を見せれば、彼はあの子のバステル画面の肖像だの讀みの短歌だのを見せて、すうっとしたりうれしかったりした。さみだれの頃、彼のために春遊をときめきについていふ歌を歌って女学校の前を徘徊で歩いていした所を見ると、僕たちのリベも素外平凡なものだったかも知れない。僕の方は学校をやめるとそれっきりになってしまった。彼の方は中学校の先生に訓戒されて恐れ入ってしまった。

(同前「立原道造」)

茂雄が立原と出会い、立原が前田夕暮の門下であるということを知るまで、その時間はたっていないかたがいない。夕暮は、当時「詩歌」の編輯をしており、立原は三木祥彦のペンネームで、この中に作品を発表していた。立原はノートにかきつけた「葛飾集」という自分の短歌集の「詩歌」に掲載され

立原は一人こちろ。  
不意に上空に飛行機の爆音がある。  
茂雄は本から目をはなし、空をみつめる。

そして、急に立原に飛行機の話などはじめられる。立原は急にとびてきたそんな話を目をぱちくりさせてきいている。「ちがうな」と立原は熱っぽく飛行機の話をしている茂雄をみながら思う。「甲斐やノリフサなんかともちがうな」と思う。立原は自分がどうしてこんなに茂雄と判りあうことができるのか、と不思議に思う。

そんな思いにふけていると、遠く茂雄の声がきこえる。「立原くん」と茂雄がよぶ。茂雄をみると、「船ろうか」という。「うん」と立原は立ちあがる。

### 山荘詩評

吉本青司

私どもをとりまいて混沌のなかで、私どもを汚れなく表現するものがどこかに存在しなければなりません。

フルトゲンツラー

かずかずの詩の本の探訪は、美しいモノに



巡り会う欲びのためである。それは、名づけ得ないものの方で私を引きよせる。

ピンボウな詩はいけない。たわな愛のみのりがなくて。でも、言葉をいくら飾りたててみても、こちらのピンボウなのは、どうにも困ってしまう。

もちろんそれは、詩のリアリテをとおして愛容される。私がリアリテといわないで、わざとリアリテというのは、C・S・ルイスも言っているように、内容のリアリズムでなく、表現のリアリズムをさすのである。現代芸術の永遠的なエレメントも、ここにある。もう今日の定説であろう。

「響」12（芦屋市）は、夏の雷みたいに美しい。富士止時のははなだあいまめ浅野晃の「限石と花」能登秀夫の「別居」杉本長夫の「緑日にて」藤田喜久子の「戦友」などツイットな感動が、小さな花びらを眺むようだ。「モノはかなげな」姿こそ、日本詩の命運であろうか。

「詩部」11（松山市）の高木至の「絶海」は、いくらかのナマの言葉に、じまされながらも、コクのある情緒の異観を、つい眺めさせられた。

「骨」30（京都市） 依田義賢の「隠道にて」。この社会的な諷刺は、ちよっと「ス

マートな色をして」走りきる。八尋不二の「いた そこに」。さきやかな一こまが、死と生存の交わりを深切に書いた歴史になっている。表現のやばなところ、二、三、ひつかかるが、モンタージュの技法を、自然な語りにかかしている。

「新詩部」6（東京都） 吉行理恵の「空の木の花」は、きれいな短詩である。モチーフのきりりとた扱えかたがたのしい。

「風信」夏（東京都） 立原道造の詩二篇。「ゆめみ」という雑話に発表された「夏の形ひ」「送死歌」を紹介し、山田俊幸が「解題」を書いている。「夏の形ひ」は、立原の作品の中でも、もっと秀れた作品の一つであろう。負負わず書いたところ、現代風情感が溢れでている。これほどの詩に出会うことは、今日めったにないことである。

「十蓮」3（豊中市） 山口淑津女の俳句「砂丘」は、すがすがしい。この見事なイメージのひろがり、たしかに俳諧の連鎖反応である。

「白珠」5（豊中市） 安田青風の「春雲に落ちちばるる松ふくりすすめの群にまぎれて寂し」。この古風な歌いぶり。静まった松ふくりと

りな、柔面で柔軟な詩にぶつかると、ほっとする。私のこのころの生理とかかわりがあるのかも知れない。

### ランダイ(四)

一 パレメント 藤原 亮

二十 わけが知りたい、お天道さまよ花と聞いた女子の中で、あたし一人がまだ蕾。

二十一 夫とわたしは切っても切れぬ市に売らうと言はれたらわたしは後からついてゆく

二十二 散ったむら雲またあつまれど換けた情けはもとどりせぬ

動くすすめと、いりまじって感興を呼ぶ。「寂し」の結びにエコーがある。

「桃」四月（東京都） 山東京子の「愛恋譜」は、夫を共に送ったあとの、若妻の家路のかなしみを詠んだ長歌。たどたどした言葉つきが、かえって哀れを誘う。山川弘至の口ぶりを想いださせる。

「ロジエ」4（大阪市） 宇智博道の「二つの言葉から」は、すこし説話にながれたさいつはあるが面白い。「詩を、もう少し捉えることを、いまだ一度思考していい時にきている。」そんなことを、ついでこの詩を読んてつぶやいた。

「詩雲」7（奈良市） 発行者は寺島キヨ子。詩を、こゝんに来しんでるグループはめざらしい。いってみれば家庭派である。たとえば、宮下太郎の「石ころの浜」など、最後の一行を除けば、すっきりと読ませる。

「詩雲」62（岐阜市） 殿岡長雄の「廊下」は

じんせいは なんて しょせん  
病院の つめたくて ながい ながい  
廊下の 上のようなものだ  
から後がいい。前半は、あまりに絶望的な人間観だ。

「詩雲」63、今紀子の「初夏の歌」のよ

「ボリタイヤ」2（東京都） ポシビリティを持って雑踏だ。ポシビリティは魅力に通じる。人でも木でも魅力がなければつまらない。客のはいりやすいロマンの市場だ。吉行理恵の詩篇は、清純さのなかに悲憤を治めている。このようなクールな抒情の創造は、ほとんどの詩人でなければ出来なかった。

### 二十三

仮ながすも恥かしながら  
あの娘を訪ねて会はず仕舞ひ  
おれの男も落ちたもの

二十四 おれが死んでも  
目蓋を閉ぢるな  
野郎のおれのたましひが  
あの娘の来るのを待つてゐる

二十五 身の衰へが顔に出た  
暮れの入目のいふふきは  
「老いと病は身のさため」

「ボリタイヤ」3。勢を迫ってたのし材に眼らんでいく。勝手きままに訪れるものの特つてよな雑誌は、ほかにあるまい。かみしもを着てゐたのだ。

柳井道広の「天竺行」は、美しいインド紀行である。インドへ行くことを望みながら、山荘を離れられない私は、ただならぬ夜の詩魂に慰撫される。

林富士馬の「低空飛行」は、風刺のごとく風雅のごとく、こころをくぐぐる。「万有引力の法則を盗み……」のサタイヤは、さしあたり私などにも適中して、痛快な文明批評だ。

「歴史」II（東京都） 尾崎喜八の「これど同じ安息日の夕暮れ」は、安達の詩情の底に、死と対面して在る日々、老詩人の感慨が光っている。老胡の詩だ。

「歴史」III、小野十三郎の「ある旅信」は鋭さをもちにひそめて、「風のまにまにヨイロップをさまよう人に、」何かを主張し、何かを風刺する。いくらかの作意が気になるが、結びの数がリアリテをきめている。

「歴史」IV、石垣りんの「母の顔」は、赤ん坊の指を伸ばしたりしている  
死んだ母親  
というところでキリとさせられる。この烈しく、精神に似たものは何だろう。ほかの

## From where in the mid-sky

Shizuo Itoh

From where in the mid-sky is this wind blowing?  
The roof of my house may be shining, too.  
There, all day long, the tide of wind changing its sound  
secretly.

In my study cold from spring chill, I stay  
Without reading or without writing;  
Did you get a new love? My old wife so wonders to herself.  
Imagine, freed from icicles pendent from the rocks,  
Dead leaves of last year will now be like light gold,  
Floating over the swollen spring river.

Translated by Ken Miyagi

長身の彼がそれで下腹をきりりと結ぶと、まるで軍装をした将士のように甲斐がいしく、きまから不思議である。東京生れの僕は、もともと角帯なんて御店の番頭や丁稚ふせいの装兵だと思しめていた。いやしくもインテリなんか自身につけるものではないと思ひ込んでいた。ふくらとした兵児帯の方が遙かに優雅だと思っていたのである。

ところがである。あるとき上京して純風・興重郎を尋ねたところ、珍らしく彼は襦袢で、外で夕食のご馳走にあずかることになった。彼は新妻の手助で、僕の面前でおびらに外出着に着換えた。淡い縞の和服を着込んだ彼は、しめくりに彼女の手から腰に巻いた角帯をうけとった。僕はおや……と思っただけ、それを二重にしてしくと、手馴れた指さばきでつるつると胴体に巻き付けた。僕は靈感的な文章を書くの長く青白い指が、角帯を巻くにも器用なのに感嘆した。手を背後に廻わした彼は、見えないところできりり……しめくりにつけ、次で締めくくいをためすように、平手で脇をポン！ポン！と叩いてみた。見事にきまっていた。一分の隙もないいでたちだった。とうてい番頭ふせいではない。蘆箱屏風の西陣の旦那衆？ いや、とんでもない。まさに愛國の公家のおしびとい

詩「夜毎」「鬼の食事」など、奥面のうららかにひかる、たしかな目を感じる。

「山の樹」29（東京都） 村中測太郎の「善い西貢」のように、異国のカチナ通りで、美の亡霊を遊ぶことも、今日のかなしみであらう。創造律の定型を破ることで、もっと表現のリアリテが獲得できよう。

川田靖子の「北方沙塵」を、二度も読みかえさせたのは、メルヘン風のエキゾチズムのせいでと思う。

「山の樹」30は、創作三十周年記念特集である。西垣脩の「樞師三十載」を読んで、三十年に三十冊という「断続的な超絶行ふり」に、悠々とした「山の樹」の気風を知った。ひとつひとつの詩も、ゆったりと秋の湖水のたゆたいである。いますこし厳しさが望まれる。消息欄の村上博子の無題の詩は美しい。

「日本派義」6月号（熊本市） 金井光子の「葬送曲」は、一人の陶工に捧げる悼詩である。手堅く死の意味を語っている。

「下野文学」第3号（宇都宮市） 佐藤満江の「山」は、山との交際の仕方、にやきしくしかも自新しものがある。「若い人」6（東京都） 水瀬清子の「息子」も老胡の詩である。ふと私は、滋味という言葉を連想した。

乳房は蜜をかたむけつくし

眼の中の流れは全部お前にそがれた  
長いみちのりの尽きようとする時  
私のくはみはかわき

私の腕には枯れた葉脈が――  
私の腕にも、きざなもを感じさせない。

こんな表現も、きざなもを感じさせない。  
むしろ古雅なエロチシズムさえ匂ってくる。

「毛国帯」6（高岡市） 堀内助三郎の「ツノの話」は、モノについての言葉、ウソ鳥のあわれを描いている。「文学好きなレディも……」のところは、あまたな表現である。「地獄」159（奈良県斑鳩町） 露谷真智子の「アカ」は、人を喰った、まじめな詩である。

「煙」178（桐原市） 吉川仁の「終夜祈禱」は、すこし大時代的なところが気になるが、アナキーな現代に、バクティンのごうごうと姿が影絵のように描かれている。サタイヤにまで高めてみた。

「河」第九号（鎌平市） 蒲池秋一の「浅茅ヶ宿」は、遊蕩の詩情をかなしく証言している。伊東静雄と同級であった詩人の遺稿にふさわしい力作である。

「河」の発行者上村肇が病弱のため、当分休刊するという。惜しいことだ。

「人間」三九号（河内長野市） 平光善久

の「ベンガルの朝」は、いい詩である。エキゾチズムは、それだけで得をするが、いい詩であるかどうかは、その目が弛したモノの反射の次第による。この詩は光を返している。東洋の悠遠さの響いがある。

「Glauco」2（高砂市） 変化に富むたのしげな本だが、実質感をともなう抒情の照明がなければ詩のモチーフは離りはじめない。「南方手紙」10（高知県伊予町） 宮地佐一郎の「星の光り」は、流動する抒情が古典的な匂いを放っていて、いまだき稀である。「栗樹園」149（池田市） 福地邦樹の「都会生活」は、最近の詩「パンツ」の歌などでもそうだが、日常のさりげない見聞や思索を、嫌味なく昇華している。ひらめきとかなしみが同在している。

## 保田興重郎と角帯

小高根 二郎

保田興重郎は戦前の青年期の憧憬であった。彼のすることならなんでも美しく見え、いさか意識してまで彼を真似て得意とした。角帯はその一つである。

興重郎は外出には角帯を愛用していた。それはまるで上方の看板のようであった。白首

# 保田與重郎著作集

全七巻・別巻一

このような独自の文学史観が今から三十年もまえに確立されていたということは、考えてみればおどろくべきことだろう。保田でなければ出来ないことなので、これからみても保田與重郎という批評家が天才だったことにまちがいはない。

日沼倫太郎

## 発売中 第二巻

後鳥羽院(思潮社増補版・全)

西行

芭蕉(全)

佐藤春夫(全)

文明開化の論理の終焉について

解説・大久保典夫  
解説・岡保生  
装訂・榎方志功

¥ 2 5 0 0

東京都千代田区神田須田町一ノ二六  
振替 東京五〇六三三九

### 南北社

果樹園 一五四号 昭和四十三年十二月一日発行

(毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行

印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

った風情だった。  
たしか銀座裏あたりの小料理屋の二階でこ  
馳走になった。帰りは、人通りの少くなっ  
て、いくぶん暗くなった表通りに出た。十数  
歩あるいたところで、彼は急に路上にしゃが  
みこんでしまった。左手で両膝を抱き、右掌  
を頬に当てて咳こんでる様子だった。彼は座  
敷での対談中に、両手で両立膝を抱いてしや  
がんでるような恰好をよくする。あの得意の  
ポーズである。呑みすぎで軽い脳貧血でもお  
こしたのかな? と近付いてみると、吐いて  
いるのであった。しかし、それは嘔吐のグェ  
グェではなく、喉のコホンコホン：だっ  
た。僕は背をさすると、彼はいい!と肩を揺  
って、やがて立ち上った。少しよろめいてい  
たが、もうシャンとして前を歩いた。その彼  
に感嘆しながら、あの暗い路面に残された嘔  
吐物は、一夜さ明ければ虹げいとなって立ち  
消えるに相違ない、と僕は思った。

その日から間もなく僕も與重郎を真似て角  
帯を用意した。しかし、どんなに練習をして  
も彼のように見事にきまらない。静雄もある  
時期「角帯と袴」趣味になった。文学青年の  
会に顔を出した静雄は、帯は「京染の渋い艶あ  
る角帯」をしていた(牧野将)。静雄や京己も與  
重郎にべた惚れにほれたことは、作品の「後

鳥羽院」や「日本の橋」だけでなく角帯もそ  
の一つだったのである。

### 編集後記

十月一日、倉見山田俊幸君から本号所蔵の「ゆめみこた  
ちの群像」が寄せられた。回君はまだ国立院大学の有馬の  
学生、一年ばかり連載の予定である。

五日、南北社の常駐郵太郎氏から一五三号の拙論で蓮田  
善明の死の真相を知り、「驚きかつ感涙もものがあつた」  
由感懐感を寄せられた。「驚きかつ感涙もものがあつた」  
の二語は、中河与一さんからも同じく蓮田の死の誘因である  
「小文体に対する嗜好」という嗜好は不思議な直感力」を感  
じてくださった山、たよりをうけたいだいた。他日、浅野晃  
宮城賢四氏からも、蓮田の死に對して改めて敬告の意を表す  
目的のため下さった。

十二日、今井啓雄氏から「戦時時代の蓮田先生」の貴重  
な資料をえた。二回にわたる連載である。また中学一年生の  
頃の今井氏の天才ぶりに蓮田が驚嘆した有名な逸話がある  
二十日、大阪府庁の職員である蓮田新夫君が石村登世子  
さんと華櫻の典を阿倍野以和貴君で挙げた。福岡から長兄  
品一君、熊本から次兄太二君がご喜びに馳せ参じた。二  
兄は共に医家である。母の故子さんは新世帯の準備のため  
すでに初夏から滞京中だった。僕は友人代表という格でお  
招きをうけた。宴中慎例によつて指名をうけて祝辞をのべ  
たが、レンガボールのゴム林に今日なおある交響曲もさぞ  
寛んでるであろうと述べたところ、泪があふれてきて  
異例の祝辞となつてしまつた。品一君がしきりとうれい汗  
を拭う姿が目についた。

果樹園 第一一五四号 (毎月一回一日発行)

昭和四十三年十二月一日発行

池田市石橋二丁目六ノ五

編集 小高根二郎

発行所 元市印刷株式会社

印刷所 元市印刷株式会社

池田市石橋二丁目六ノ五

発行所 果樹園社

定価四十円 送料二十円